

高知県高岡郡葉山村

姫野々土居跡

—葉山村総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告書—

2000. 3

葉山村教育委員会

高知県高岡郡葉山村

姫野々土居跡

—葉山村総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告書—

2000. 3

葉山村教育委員会



姫野々土居跡全景



堀 1・土橋（北西より）



焼成土坑（東より）



土師質土器



土師質土器 (P 387一括出土)

卷頭カラー 4



青 磁



青磁（高麗・李朝）

卷頭カラー 5



青花（華南系）



褐釉壺（タイ産）

序 文

姫野々土居跡は、土佐の中世、高岡郡一帯を支配していたという津野氏の城下町であり、背後の姫野々城跡とともに学術的にも非常に価値のあるものです。

平成6年、高齢者人口が村人口の4分の1を占める本村にとって、保健、福祉、医療の総合的なサービスを提供できる施設を「特別養護老人ホーム」と「直営診療所」が隣接する姫野々地区に設置する計画が具体化し、平成9年度から事業が実施されることとなりました。

事業実施に先立ち、葉山村教育委員会では平成8、9年度に調査を実施し、姫野々土居跡をより明確に把握することとしました。

その結果、城下町の存続時期を知るうえで貴重な遺物が多量に出土し、中世の高知県の歴史を解明していくうえで重要な資料が得られました。

これらの成果が高知県中世史の向上の一翼となることを念じてやみません。

おわりに、発掘調査にあたりご指導・ご助言をいただきました高知県教育委員会および（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターの先生方、そして酷しい暑さのなか、発掘調査に携わった作業員の皆様方、また遺物等の整理に携わった埋蔵文化財センター作業員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

葉山村教育長 大崎 敏正

例　　言

1. 本書は、葉山村教育委員会が平成9年度に実施した総合保健福祉センター建設事業に伴う、姫野々土居跡発掘調査報告書である。

2. 姫野々土居跡は、高知県高岡郡葉山村姫野々431-1他に所在する。

3. 試掘調査は、平成9年2月24日から同年3月24日、発掘調査は同年6月3日から9月26日まで行った。引き続き資料整理・報告書作成を平成10年度から11年度にかけて行った。発掘調査面積は4,100m²である。

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体　葉山村教育委員会

調査事務　葉山村教育委員会

平成9年度

教育長　堅田忠男

事務担当　大崎文彦

平成10年度・11年度

教育長　大崎敏正

事務担当　山崎哲人

調査担当　葉山村教育委員会

主監　大崎　文彦

小林　麻由

調査指導　高知県教育委員会文化財保護室埋蔵文化財班

社会教育主事　松田知彦

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

調査員　吉成承三

5. 発掘調査にあたっては、地元葉山村の方々の献身的な協力を得ることができた。また、現地での測量等、調査指導を高知県埋蔵文化財センター諸氏の助言・協力を得た。記して感謝する次第である。

現場作業員　岡崎鶴義、山崎健児、山崎温英、橋田善廣、高橋武男、高野清子、大崎徹、田中房子
西森清子、谷脇千尋、西田まつき、松岡誠一、高橋一六、宮本清助、山崎富士夫
大崎梅子、中平義雄、西森 啓、林 佳彦、竹村友重

整理作業員　森本佐江子、畠平裕美、大谷亜紀子、吉本由佳、北村邦博

6. 本書の執筆は、松田、大崎、吉成が分担し、第I・II・III章を大崎、第IV章の構成については松田、遺物は吉成が執筆を行った。第V章及び本書の編集は吉成が行った。

7. 姫野々土居跡の調査では、岡村道雄氏(文化庁記念物課主任調査官)、坂井英弥氏(同調査官)

を始め数多くの方々から、助言、御教示をしていただいた。併せて記して謝意を表わしたい。

市村高男（高知大学教育学部教授）中井均（米原町教育委員会）森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）鶴谷和彦（堺市立埋蔵文化財センター）十河良和（堺市立埋蔵文化財センター）百瀬正恒（京都市埋蔵文化財センター）村田弘（和歌山県文化財センター）中野良一（愛媛県埋蔵文化財調査センター）柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財調査センター）辻佳伸（徳島県教育委員会）日下正剛（徳島県埋蔵文化財センター）小野正敏（国立歴史民俗博物館）橋本久和（高槻市教育委員会）伊野近富（京都府埋蔵文化財センター）黒田慶一（大阪府文化財協会）大橋康二（九州陶磁博物館）森島康雄（京都府埋蔵文化財センター）山上雅弘（兵庫県教育委員会） 順不同、敬称略

8. 出土遺物については、葉山村教育委員会が保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法	
1. 姫野々土居跡の名称について	10
2. 平成8年度試掘調査の概要	11
3. 本調査区の設定	12
第Ⅳ章 遺構と遺物	
(1) 挖立柱建物	14
(2) 土坑	42
(3) 井戸	65
(4) 堀	69
(5) 溝	81
(6) 塚又は横列	85
(7) 配石遺構	85
(8) ピット	86
(9) 性格不明遺構	91
(10) 包含層出土遺物	96
第Ⅴ章 まとめ	
第1節 出土遺物について	115
1) 出土遺物の分類	115
2) 土師質土器供膳具の相対関係	119
3) 杯G a 及び杯A 1 a・b タイプについて	123
4) 土師質土器供膳具の様相差～山城との比較～	123
5) 貿易陶磁器の組成	124
第2節 長宗我部氏の動向と遺物様相～貿易陶磁器を中心～	131
第3節 姫野々城下屋敷群について	132
付録「御土居」について	136
『6年間の思い出』	147
遺構計測表	153
遺物観察表	154
写真図版	

挿図目次

図1	葉山村位置図	1
図2	葉山村地質図	3
図3	周辺の遺跡分布図	5
図4	高岡郡・吾川郡城館跡分布図	9
図5	姫野々土居跡周辺地形図	10
図6	試掘トレンチ位置図	11
図7	調査区グリッド設定図	12
図8	SB1 平・断面図及び出土遺物	15
図9	SB2 平・断面図	16
図10	SB3 平・断面図及び出土遺物	17
図11	SB4 平・断面図	18
図12	SB5・6 平・断面図及び SB6 出土遺物	19
図13	SB7 平・断面図及び出土遺物	20
図14	SB8 平・断面図及び出土遺物	21
図15	SB9 平・断面図及び出土遺物	22
図16	SB10 平・断面図	23
図17	SB11 平・断面図及び出土遺物	24
図18	SB12 平・断面図	25
図19	Pit 387 出土遺物（銅錢・土師質土器）	26
図20	SK77 平・断面図	27
図21	SB13 平・断面図	28
図22	SB14 平・断面図	29
図23	SB15 平・断面図	30
図24	SB16 平・断面図	31
図25	SB17 平・断面図	32
図26	SB18 平・断面図	33
図27	SB19 平・断面図	34
図28	SB20 平・断面図	34
図29	SB21・22 平・断面図	36
図30	SB23・24 平・断面図及び SB24 出土遺物	37
図31	SB25・26 平・断面図及び SB25 出土遺物	39
図32	SB27・28 平・断面図及び SB27 出土遺物	40
図33	SB29 平・断面図	41

図34 SB 30 平・断面図	42
図35 SB 31 平・断面図及び Pit 1206断面図	43
図36 SK 9 平・断面図及び出土遺物	44
図37 SK 10・11 平・断面図及び出土遺物	44
図38 SK 21・28・30 平・断面図及び出土遺物	45
図39 SK 44 平・断面図及び出土遺物	47
図40 SK 45 平・断面図及び出土遺物	47
図41 SK 46・47・67・68 平・断面図及び出土遺物	49
図42 SK 80・94・117 平・断面図及び出土遺物	51
図43 SK 122 平・断面図及び出土遺物	52
図44 SK 144～147 平・断面図及び出土遺物	53
図45 SK 176 平・断面図及び出土遺物	54
図46 SK 202 平・断面図及び出土遺物	56
図47 SK 202 出土遺物（石臼）	58
図48 SK 203 平・断面図及び出土遺物	59
図49 SK 203 出土遺物	60
図50 SK 217 平・断面図及び出土遺物	62
図51 SK 219 平・断面図及び出土遺物	63
図52 SK 89 遺物出土状況・断面図及び出土遺物	64
図53 SE 1 平面図	65
図54 SE 1 立面図及び出土遺物	66
図55 SE 2 平面図	67
図56 SE 2 立面図及び出土遺物	68
図57 堀1・2 SD 10・SA 1～SA 4平面図バンクセクション図	71
図58 堀1 土橋立・断面図	72
図59 堀1・2 交差部平面図及び堀1バンクセクション図	73
図60 堀1 バンクセクション図	74
図61 堀1 出土遺物	75
図62 堀1 出土遺物	77
図63 堀1 出土遺物	79
図64 堀1 出土遺物	80
図65 SD 10 堀2 出土遺物	83
図66 SD 3・9 断面図及びSD 3・9出土遺物	84
図67 配石造構1 平・立面図	86
図68 Pit 847 遺物出土状況図及び出土遺物	87
図69 Pit 出土遺物	89

図70 Pit 出土遺物	90
図71 SX1 出土遺物	92
図72 SX1 出土遺物	93
図73 SX2 平・断面図及び出土遺物	95
図74 包含層出土遺物（土師質土器小皿・小杯）	97
図75 包含層出土遺物（土師質土器杯）	99
図76 包含層出土遺物（土師質土器杯・瓦器碗・青磁碗）	101
図77 包含層出土遺物（青磁碗・皿・香炉・袋物・高麗青磁）	103
図78 包含層出土遺物（白磁碗・皿・青花碗・皿）	105
図79 包含層出土遺物（天目茶碗・瀬戸美濃系陶器・備前焼鉢・擂鉢）	107
図80 包含層出土遺物（備前焼擂鉢）	108
図81 包含層出土遺物（備前焼・東播系須恵器・常滑焼）	110
図82 包含層出土遺物（褐釉壺・羽釜・鍋）	111
図83 包含層出土遺物（石鍋・火鉢・鉄製品）	112
図84 包含層出土遺物（砥石・瓦・土錐・土製品）	114
図85 姫野々城下屋敷・推定復元図	135
図86 調査対象地位置図（スクリーントーン）	137
図87 トレンチ位置図及び検出遺構図	138
図88 堀2 土橋石積み平面図・セクション図	139
図89 堀2（西壁）・Eトレンチ（南壁）セクション	140
図90 Dトレンチセクション	141
図91 「御土居」推定位置図（スクリーントーン）	143

写真図版

卷頭カラー 1 姫野々土居跡全景

卷頭カラー 2 堀 1・土橋（北西より）、焼成土坑（東より）

卷頭カラー 3 土師質土器、土師質土器（P387一括出土）

卷頭カラー 4 青磁・青磁（高麗・李朝）

卷頭カラー 5 青花（華南系）、褐釉壺（タイ産）

PL1 堀 1 下層炭化物・集石検出状況（北より）

PL2 堀 1 作業風景（北より）、堀 1 土橋（東より）、堀 1 土橋側面（北より）

PL3 堀 1 セクション（E-F部）（南より）、堀 1 セクション（S-T部）（南より）、堀 1 セクション（G-H部）（北より）

PL4 堀 2 完掘状況（西より）

PL5 SD10・堀 2 断面（西より）、堀 2 堆積状況（西より）

PL6 SE1 全景（南西より）、SE1 完掘状況（南西より）

PL7 SE2 全景（北より）、SE2 完掘状況（西より）

PL8 SBピット根石、SBピット根石及び土師質土器杯出土状況

PL9 SK9 人骨検出状況（南より）、SK202 完掘状況（東より）

PL10 SD3 完掘状況（北より）

PL11 土師質土器杯及び鉄刀出土状況、SK89 備前焼大壺出土状況、SB12 P387 土師質土器出土状況

PL12 SB3・5・6・7・8・11・12 出土遺物

PL13 SB12・27 SK9 出土遺物

PL14 SK10・11 出土遺物（内野山窯産）・SK45 出土遺物

PL15 SK28・30・45・46①② 出土遺物

PL16 SK117・122・176 出土遺物

PL17 SK176・202 出土遺物

PL18 SK202 出土遺物（石臼）

PL19 SK203・217・219 出土遺物

PL20 SE1 出土遺物

PL21 SE2 出土遺物

PL22 堀 1 出土遺物（土師質土器）

PL23 堀 1 出土遺物（天目・青磁）

PL24 堀 1 出土遺物（青磁）

PL25 堀 1 出土遺物（瀬戸・美濃系陶器・備前焼）

- PL26 堀1 出土遺物（備前焼）
- PL27 堀1 出土遺物（東播系須恵器・瓦質土器）
- PL28 堀2 出土遺物（土師質土器）
- PL29 堀2 出土遺物（青磁・常滑焼・瓦質土器）
- PL30 SD3 出土遺物（土師質土器・瓦器碗・青磁）
- PL31 Pit 出土遺物（土師質土器・青磁）
- PL32 Pit 出土遺物（土師質土器・青磁）
- PL33 Pit 出土遺物（青磁・白磁・瀬戸・美濃系陶器・東播系須恵器・備前焼）
- PL34 Pit 出土遺物（砥石・瓦・羽口・土師質風炉）
- PL35 SX1 出土遺物（土師質土器）
- PL36 SX1 出土遺物（土師質土器・瀬戸・美濃系陶器・青磁）
- PL37 包含層 出土遺物（土師質土器）
- PL38 包含層 出土遺物（土師質土器）
- PL39 包含層 出土遺物（土師質土器）
- PL40 包含層 出土遺物（瓦器碗・青磁碗）
- PL41 包含層 出土遺物（青磁碗）
- PL42 包含層 出土遺物（青磁碗・稜花皿）
- PL43 包含層 出土遺物（青磁香炉・合子・高麗青磁）
- PL44 包含層 出土遺物（白磁碗・皿）
- PL45 包含層 出土遺物（白磁皿・杯）
- PL46 包含層 出土遺物（青花皿）
- PL47 包含層 出土遺物（青花碗）
- PL48 包含層 出土遺物（青花華南系）
- PL49 包含層 出土遺物（天目茶碗）
- PL50 包含層 出土遺物（瀬戸・美濃系陶器）
- PL51 包含層 出土遺物（備前焼すり鉢）
- PL52 包含層 出土遺物（備前焼すり鉢・堺産すり鉢）
- PL53 包含層 出土遺物・東播系須恵器（捏鉢）、常滑焼（壺）、備前焼（壺）
- PL54 包含層 出土遺物（褐釉壺）
- PL55 包含層 出土遺物（瓦質羽釜・土師質鍋・風炉）
- PL56 包含層 出土遺物（鉄刀・鉄釘・砥石）
- PL57 包含層 出土遺物（瓦・土鍤・土製品）

第Ⅰ章 調査に至る経緯

葉山村は、高知県の中央西寄りに位置し、北面は東から佐川町・越知町・仁淀村、西方は東津野村、南に大野見村、東は須崎市に境を接している。村の周囲を山々が囲み、中央部には新莊川が東西に流れ、国道197号が川に並走している。

この葉山村には、中世、高岡郡一帯を治めていた津野氏により築かれたとされる姫野々城跡が存在する。中世城郭として、その景観の壮麗さをはじめ、周辺城下町を含めた学術的価値は計り知れないものがあり、地元葉山村における文化財の中ではシンボル的存在として位置付けられている。この他にも歴史的に高く評価されるべき文化財が存在する地域でありながら、近年、村の地域振興発展のために産業基盤整備など開発の手が及び、遺跡自体、蚕食されながらその姿を失いつつある。

葉山村の人口は、1960年（昭和35年）以降には7,480人であったものが年々減少し、2000年（平成12年）には4,656人となり、この40年間で約2,800人の減少となっている。

1975年（昭和50年）以降、死亡者が出生数を上回る自然減の状況が続いているおり、4人に1人を高齢者が占める本村にとっては、保健、福祉、医療の総合的なサービスを提供できる施設を「特別養護老人ホーム」、「直営診療所」が隣接する姫野々地区に設置する必要が生じ、平成9年度から事業が実施されることとなった。

事業の実施に先立ち、葉山村教育委員会、葉山村文化財保護審議会、並びに高知県教育委員会では、工事計画区域が姫野々土居跡内に存在することから、文化財保護の立場から協議を重ね、事前に姫野々土居跡における遺構の広がりをはじめ、土居跡の時

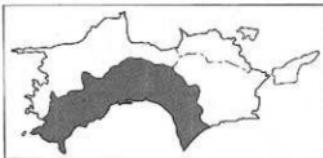


図1 葉山村位置図

期や性格、遺物の分布密度など基礎資料を把握するため試掘調査を実施する必要に迫られた。このため葉山村教育委員会では平成8年度に国庫補助金を得て、施設整備用地である特別養護老人ホーム北側の水田部分の試掘調査を実施した。

試掘調査は、葉山村教育委員会が主体となり、(財)高知県埋蔵文化財センターの協力を得ながら、平成9年2月24日から3月24日まで調査対象面積約5,400m²のうち約750m²の調査を行った。その結果、中世を中心とする良好な遺構・遺物が検出され、工事計画区域に遺跡の拡がりがあることが判明した。試掘調査の結果に基づき、村長部局と村教育委員会で協議をし、文化庁文化財保護部の指導を受けて施設整備により影響を受ける部分についての全面的な発掘調査(4,100m²)を行う運びとなった。

本調査については、高知県教育委員会文化財保護室埋蔵文化財班並びに(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターからの派遣指導を受け調査を行った。

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

姫野々土居跡は、高知県高岡郡葉山村姫野々に所在し、新莊川の中流左岸に開けた標高約50mの河岸段丘に立地する。葉山村周辺の地形を見れば、村の中央部をほぼ東西に流れる新莊川を軸として、北部山地と南部山地とに分かれた大きな地溝帯を形成している。北部山地（通称北山）は、仏像構造線と呼ばれる東西に延びる大きな断層によって生じた葉山地溝帯の北の側面を造っており、標高1,000m級の非常に急峻な山地である。このような山容は、鶴松森から東南東の方向に蟠蛇森へと続いている。南部山地は、標高500m前後の比較的低いなだらかな山地である。これら北部、南部の山地から葉脈のように24の支流が新莊川に流れ込んでいる。新莊川の村内を流れる区域は約20kmであり、川の屈曲に沿って姫野々・梶足石原野・鎌野々・船野・大野といった大小の河岸段丘が形成されている。

地質をみれば、四国には巨大な断層が3本走っており、北から中央構造線、みかぶ構造線、そして仏像構造線である。北部山地を走っている仏像構造線は北側が迫り上がりでできた逆断層で、この断層を境に秩

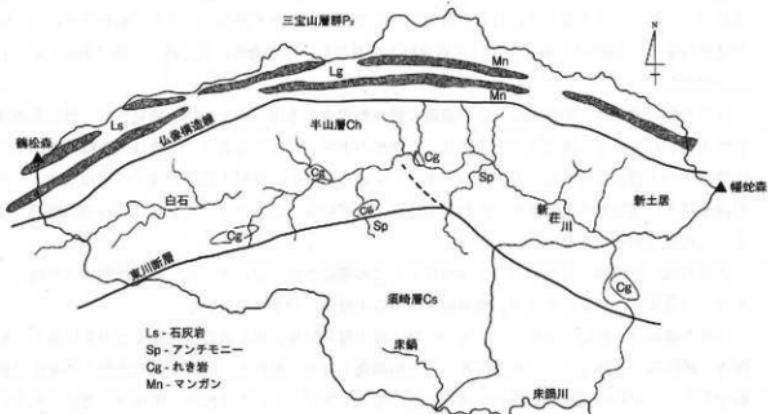


図2 葉山村地質図

父帶と四十万帯に分かれている。高知県の秩父帶の南縁を石灰岩を伴って東西に長く延びている地層は、虎空藏山層群（三宝山層群）と呼ばれ、中生代三疊紀後期（約2億1,000万年前）を中心に堆積した地層であり、葉山村の秩父帶はこれに属する。主に砂岩・チャート・凝灰岩・石灰岩で構成されており、鶴松森から蟠蛇森にかけて岩脈が延びる。仏像構造線以南は比較的単純な構造をして中生代白亜紀以後に堆積したもので四十万帯といわれている。葉山村は、これら秩父帶と四十万帯の境界線上にある。姫野々土居跡が立地する地域は四十万帯にあたり、村の面積の約半分を占める半山層群と呼ばれる地層である。下位層より基底礫層・砂岩・砂岩泥岩互層・レンズ状礫岩を含む砂岩で構成されている。本層は、村内だけでなく、県内の仏像線の南に沿って東西に帶状に分布しているが、模式地は葉山村馬闇・姫野々・三間川を含む仏像線に至る地域とされている。また、村内の段丘面上には地下50cm～1mほどの所にオンチ層が堆積している。土居跡の立地している姫野々は標高50m前後を測る段丘面上に集落・耕地が開けており、今回の調査地点も地表下40cm前後にオンチ層が確認された。遺跡の背後には標高193mの山頂部に主郭を持つ姫野々城跡がそびえる。

2. 歴史的環境

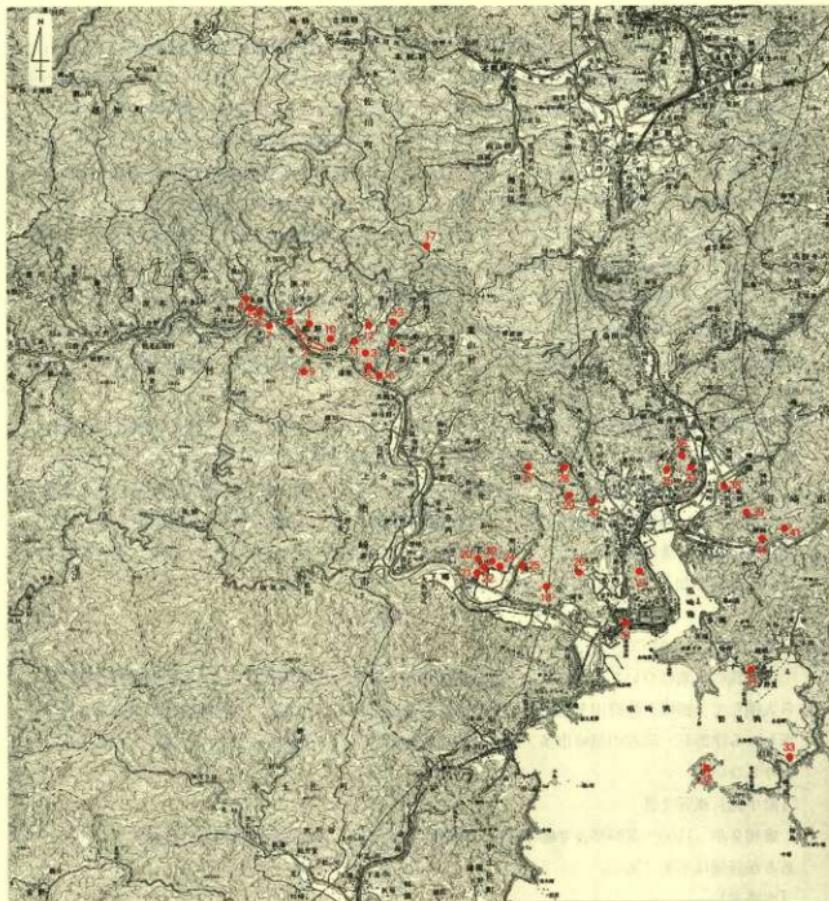
葉山村を含め新莊川流域には、いくつかの河岸段丘が形成されており、その段丘面上に遺跡が存在している。ここでは、姫野々土居跡周辺についてその歴史的変遷を述べたい。

村域最古の遺跡は新土居遺跡であり、縄文時代早期の無文厚手の萬島式土器と、それに伴う打製石鎚が出土している。早期に続く前期・中期の遺物も、この新土居遺跡と上流の永野遺跡から発見されている。永野遺跡は、昭和52年に国道197号の改良工事に伴って発見された遺跡である。この遺跡からは縄文時代中期の船元I式・II式土器を中心とする遺物が検出されている。この他に前期・後期の縄文土器も検出され、この遺跡が縄文時代を通じて存続していたことが判明した。特に永野遺跡出土の船元I式土器に伴う打製石鎚は、サヌカイト製の比率が高い。また、昭和58年には、永野遺跡の東方3.2kmの所に新土居宇津ヶ藪遺跡も発見され、永野遺跡に続く縄文中期中葉の土器・石器が出土している。

弥生時代の遺跡は、昭和58年、永野遺跡で耕地整理中の水田から土器片が発見され、緊急発掘調査が実施されている。確認された遺構は、不整形の土坑・ピットであり、遺物は弥生時代前期末～中期前半の土器が注目されるものとして出土している。特に、壺型土器は、薄手で堅致なつくりの特徴を持ち、高知県西部の遺跡で比較的多く出土している。このタイプの土器は、高知県西部で成立した可能性が考えられる。

古墳時代の遺跡は、村内においては現在のところ確認されておらず、弥生時代後期～古墳時代にかけての遺跡は、新莊川下流域、現須崎市のある平野部に分布が見られる。

中世の遺跡は、姫野々城跡、新土居の古城、佐川町との境にある城台山城跡など中世山城と、繁国寺、勝松院、永林寺など中世寺院跡や、今回調査を行った姫野々土居跡を含む津野氏の家臣屋敷群がある。いずれの遺跡も、中世を通じてこの地域を支配していた津野氏に関係する遺跡であるが今まで本格的な発掘調査は行われておらず、平成6・7年度にかけて行われた公園整備に伴う姫野々城跡の発掘調査がこの時期の変遷を知る上で端緒となった。姫野々城跡は、津野氏の居城であり、



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	堀野ノ城跡	中世	12	樺ノ川五輪塔群	中世	23	畠岡遺跡	弥生	34	伏木村御用56番地	中世
2	津野氏土阿跡	中世	13	円土寺跡	中世	24	駿島遺跡	中世	35	若木遺跡	平安・中世
3	古城(新土里城)	中世	14	紙工屋宇津ヶ原	縄文	25	波介遺跡	弥生	36	白木戸遺跡	中世
4	永野遺跡	平安・中世	15	永野寺跡	中世	26	高根遺跡	中世	37	菊之森城跡	中世
5	高根城	中世	16	新土居遺跡	縄文	27	鴻来遺跡	古代・中世	38	佐波古跡	中世
6	柴間今跡	古代・中世	17	城代山城跡	中世	28	南ノ沖遺跡	中世	39	針木城跡	中世
7	紫山本村遺跡	中世	18	同本城(墨ノ西城)	中世	29	行正遺跡	中世	40	久保ノ村遺跡	中世
8	伊野ノ上町遺跡	歴史・時代	19	奥城城	中世	30	竹ノ舟遺跡	縄文・平安	41	土居の谷遺跡	中世
9	法昌寺跡	中世	20	中氏の宝蓋印塚	古墳	31	土佐塙砲台跡	古墳			
10	曉松御茶園森	中世	21	波多原遺跡	弥生・中世	32	戸島遺跡	弥生・中世			
11	植生南跡	中世	22	東寺中遺跡	中世	33	美山遺跡	中世			

0 2,500 5,000m

図3 周辺の遺跡分布図

土居跡の背後にある山城である。発掘調査は、主郭部に相当する標高193mを測る山頂部を中心に行つた。その結果、礎石建物跡・掘立柱建物跡・堀状遺構・石積み遺構などが検出され、土師質土器の供膳具、青磁・染付けなどの貿易陶磁器、瀬戸・美濃焼、備前焼といった国産陶器類など、主に、15世紀代の遺物が中心に出土している。城の繩張りは、主郭部は単郭帯曲輪で構成されており、上述した遺構・遺物は帯曲輪で検出している。東、西、南に延びる尾根に連続堀切、主郭部下の斜面に畝状堅堀群などが見られる。築城年代は不詳であるが、出土遺物から南北朝期には山城としてある一定の機能をしていたことが明らかとなった。また、帰属時期をみれば、15世紀代がピークであり、その後、16世紀後半頃まで機能していた城である。

その他では、繁国寺周辺の調査が行われ、掘立柱建物跡・瓦溜遺構などが検出されている。時期は15世紀後半～16世紀代にかけてであり、軒丸・軒平瓦、備前焼大甕、擂鉢などが出土している。伝承によると平安時代後期に創建されたといわれているが、この期の遺構・遺物は確認されていない。

当村域における中世の遺跡で発掘調査が行われているのは以上であるが、今回、調査を行った姫野々土居跡の成果により、山城と土居跡の関係、及び津野氏時代の様相が明らかになりつつある。

また、近年、高速道路建設に伴う発掘調査が行われており、葉山村に隣接する須崎市でも調査が行われている。須崎市吾桑地区に所在する飛田坂本遺跡では、13世紀後半から14世紀代にかけての掘立柱建物跡、溝状遺構とともに、貿易陶磁器などの多数遺物も出土している。後に、後述する津野氏の動向を知る上でも、貴重な資料である。

津野氏の由来について…

津野氏の由来については、伝承によると延喜13年（913）、藤原仲平の子山ノ内藏人経高が伊予から入国して、権原・津野山を本拠としその勢力を伸ばしたという説と、平安時代後半に成立したと思われる津野荘（現在の須崎市多ノ郷、吾桑地区）から新荘へと発展したという説などがありはっきりしない。

『勘中記』紙背文書

康和2年（1100）高岡郡吾井郷津野村（津野保、須崎市）に京都賀茂御祖社の荘園として成立があるが詳細は不明である。

『南路志』

「地頭津野」という記載がみられ、地頭として封建領主化に成功していったと考えられる。

『佐伯文書』（堅田文書）

鎌倉時代末期には「津野新荘里方」に対して葉山、津野山方面を「津野新荘山形」といった記載がみられ、南北朝末期には権原方面も新荘内に組み入れられている。

『賀茂御祖皇大神宮諸國神戸記』所収の応安5年（1372）9月8日付けの津野繁高請文によると、津野本荘（現須崎市）が繁高的地頭請となり、永和元年（1375）から康暦2年（1380）に至る四通の津野淨高の所領宛行状や代官職安堵状（證簡集拾造）では、備前守淨高が東は多ノ郷（現須崎市）から西は権原（現権原町）までの地やその代官職を家臣らに宛送っている。姫野々はこれらの地を

押える要所に位置していることから、南北朝時代の繁高の頃には居城は当地にあったと考えられている。

以上が津野氏について述べられている文献であるが、南北朝期の動乱が契機となり、14世紀中頃から新莊川下流域まで進出し、15世紀の中頃には四万十川上流（壽原町・東津野村）より新莊川全流域の制圧、当地域の土豪名主層の家臣段への編成を達成しているようである。この南北朝期から室町期にかけてが津野氏の全盛であり、「十八代記」によると津野繁高・淨高・春高であり、之高が伊予の河野氏から入って春高の養子となっているが、明徳年間の津野之高は、この期のピークを示す人物であろう。その後、永正14年（1517）一条氏の家臣であった福井玄蕃の守る戸波（現土佐市）を攻撃した恵良沼の戦いや、天文年間（1532～1555）の戦いで敗退し、津野氏は一条氏に降り、所領は安堵された。天正3年（1575）長宗我部氏の土佐統一にはその傘下にはいり、長宗我部元親の三男である親忠は津野勝興の養子として迎え入れる。親忠は、慶長年間（1596～1615）に城を須崎（須崎城）に移したとされているが、慶長5年9月の閬ケ原の戦いに敗れた長宗我部盛親に切腹を命じられ、津野氏は滅亡する。

《参考文献》

『葉山村史』葉山村教育委員会1980年

『姫野々上町・新土居字津ヶ藪・永野遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』葉山村教育委員会1984年

『姫野々城跡Ⅰ』葉山村教育委員会1995年

『姫野々城跡Ⅱ』葉山村教育委員会1996年

『飛田坂本遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1998年

年 代	惣領	事 項
承久3年（1221）	經高	首藤山ノ内氏入国? 業山村床鍋に住む。後に櫛原に移住し兵力を貯える。
元弘3年（1333）		「在地領主津野氏」が文書で確認される。 (瀬崎綾成主文書・佐伯文書)
建武3年（1336）		1月7日北朝方の津野家時が浦戸（南朝方）の水軍の本拠地を攻撃。
文中元年（1372）		津野本荘の譜文をたて、京都賀茂神社との契約書がとり交わされる。
天授元年（1375）		堅田氏（元・海辺莊領主）、津野氏に従い、櫛原広野の代官職に任じられる。
天授3年（1377）	繁高	12月繁高、佐川方面の守護代三野氏の領地を襲い、斗賀野佐川付近を占領する。
天授4年（1378）		北津野莊全域を手中に收める。→斗賀野・斗賀地・谷地・斗賀野尾川・三野 津野氏の勢力範囲が飛躍的に拡大した時期
嘉吉元年（1441）		播磨守護赤松満祐が將軍足利義教を謀殺。
文安元年（1444）	之高	6月赤松攻め不参加の罪に問われ、細川氏の命により、大野氏（伊予の住人か） と弘岡（現春野町）で交戦。
永正5年（1508）		津野氏領地高二万五千余石（五千貫）の国人領主になる。
永正14年（1517）	元実	戸波井のノ場の戦い 井のノ場城城主、福井玄蕃を攻めている最中、背後より佐竹氏・一条氏の挾み 撃ちに遭う。 津野勢、元実を含め恵良沼で全滅
天文11年（1542）	国泰	国泰、嫡子基高に家督を譲る
天文12年（1543）	基高	7月一条氏・大野見方面へ進軍する 津野勢の抵抗にあい、撤退
天文14年（1545）		10月高橋の戦い 一条房基、津野領へ進軍し、新土居城を落とし、姫野々城を攻撃→津野勢、降伏。一条氏の軍門に下る
天文22年（1553）		津野基高死去
天正元年（1573）		津野勝興、長宗我部元親にくだる
天正14年（1586）	親忠	長宗我部信親、九州戸次川にて戦死
慶長4年（1599）		元親、親忠を業山から香美郡岩村の神通寺（吉祥寺）に移して、蟄居を命じる。
慶長5年（1600）		津野親忠切腹、津野氏滅亡

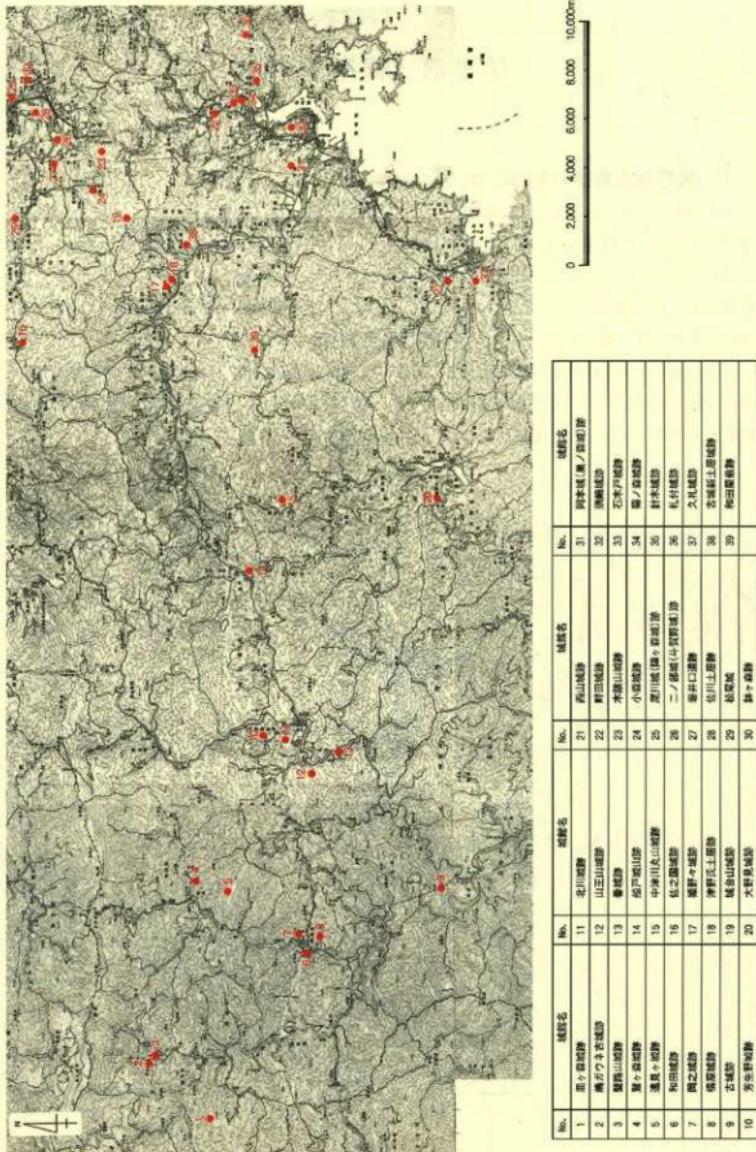


図4 高岡郡・吾川郡城館跡分布図

第Ⅲ章 調査の方法

1. 姫野々土居跡の名称について

天正16年（1588）の『長宗我部地検帳』によると津野氏は城山の南麓中央部に二反の土居を構え、その南に五反二七代四歩の広大な弓場を備えていた。土居を中心として西に長林寺・三鷗神社、東に聰松院、中央部に良徳院・道場・聖文院など寺社があり、家老津野藏人をはじめとする家臣の屋敷群がある。「御土居」は二反で、土居の前には五反二七代四歩の広大な御弓場がみられる。また、土居の東側には「御乳人屋敷」という側近の奉仕者を構えている。

今回の調査が行われた地点は、地検帳に記載がみられる「御土居」に推定されている東側にあたり、「御乳人屋敷」及び家臣屋敷地周辺にあたる。姫野々土居跡という遺跡名は、調査地点が地検帳段階の津野氏の土居である確証がないため、今回は姫野々という地名を名称化した。

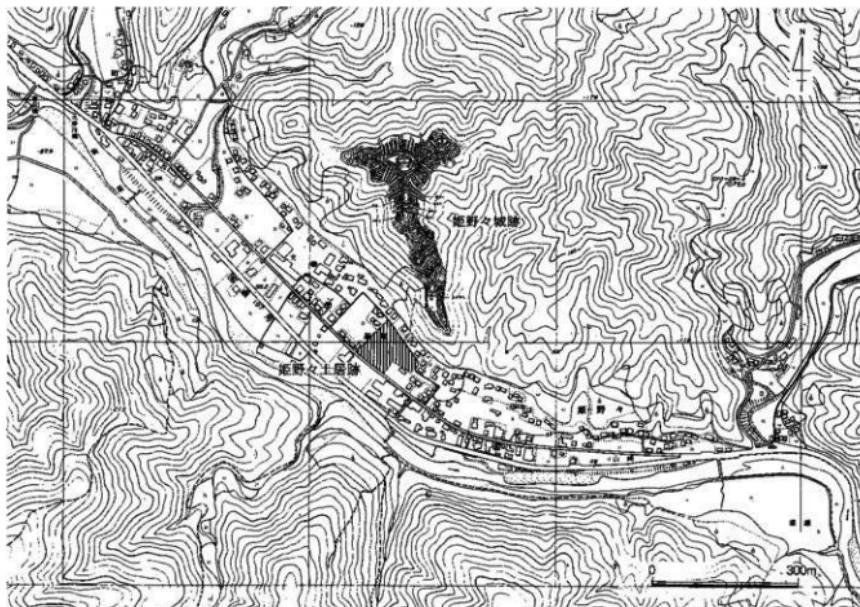


図5 姫野々土居跡周辺地形図

2. 平成8年度試掘調査の概要

調査対象区域は、現在の郷野々の集落が開ける河岸段丘上に立地する。現況は水田であり、標高52m前後を測る。調査対象面積が5,400m²と広範囲に及ぶため、水田の各単位に10箇所に分け、アルファベット順にA～Jの名称を付けトレントを設定した。トレントEについては、幅2m、東西20m、南北30mの十字型のトレントを計画したが、御土居推定地に隣接している箇所でもあり、東西16m、南北16mのトレントに拡張して調査を行った。

現況の表土、及び無遺物層の掘削には重機を使用し、遺物包含層の掘削及び、遺構検出は人力により行った。調査期間は平成9年2月24日から3月24日にかけてであり、発掘調査面積は750m²である。基本層序は以下の通りである。

- I層：灰色粘質土（現表土）
- II層：暗灰褐色粘疊土（床土含む）
- III層：黒灰褐色粘質土（遺物包含層、炭化物含む）
- IV層：黒褐色粘質土（遺物包含層）
- V層：赤黄褐色粘質土（火山灰土：オンダ層、地山）

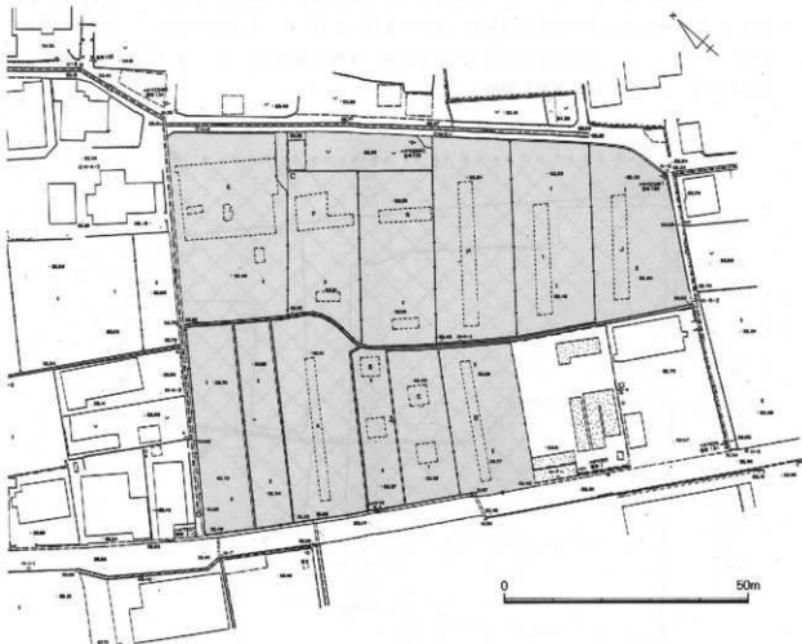


図6 試掘トレント位置図

今回の試掘調査では、E・Fトレンチで連続した柱穴を検出した。特に、Eトレンチでは2m間隔で柱穴が8個並んでいる構列を検出している。さらに、Eトレンチの西よりで南北に延びる溝状のプランを検出し、一部、サブトレンチで確認した結果、幅約4m、深さ1.5mを測る堀跡を確認した。埋土からは、多量の土師質土器、備前焼、青磁片などが出土した。Fトレンチでは、石積みを伴う南北方向の溝状の遺構を検出した。また、炭化物、焼土の括りも確認された。備前焼擂鉢（間壁編年Ⅲ期）、和泉型瓦器碗、土師質土器など、他のトレンチに比べ古い様相の遺物が出土している。H～Jトレンチについては北部にピットが集中して確認されているが、E・Fトレンチに比べ密度は少ない状況である。南部に設定したA～Dトレンチについては遺構・遺物とともに北部に比べ疎らである。

以上、試掘調査の結果から、遺構の中心は北部に設定したE～Jトレンチにあることが判明し、土居を画すると考えられる堀も検出することができた。

3. 本調査区の設定

平成8年度に実施された試掘調査の結果を受け、総合福祉センターの建物により影響を受ける箇所について試掘調査を行ったトレンチを拡張するかたちで全面的に調査区を拡げた。調査区が広範に及ぶため、便宜的に4つの調査区名称（I区～IV区）を付け、公共座標を使用し、グリッドを設定した。グリッドは、 $4 \times 4\text{ m}$ の小グリッドを組み、X軸を西からA～Z・a～eまで、Y軸を北から順に1～24まで付けて調査を開始した。

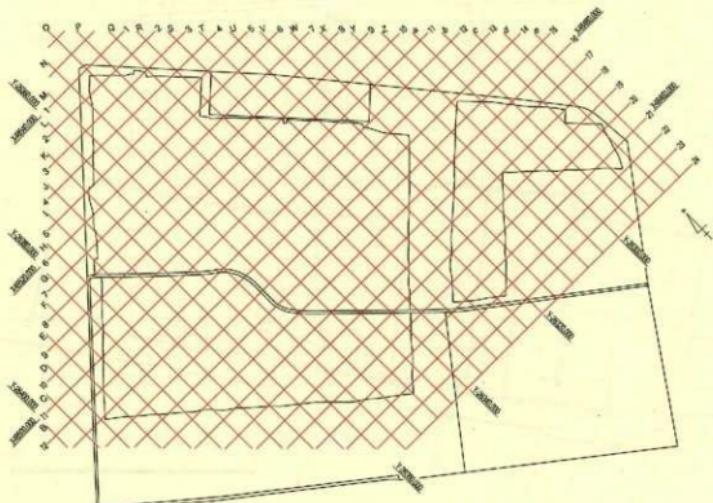


図7 調査区グリッド設定図

調査対象地南部についてはⅠ区・Ⅱ区、北部は道路部分で区切られるラインをⅢ区とⅣ区とに分け呼称し、重機で表土・無遺物層を除去した後、人力により包含層掘削から開始した。Ⅳ区の北部については、遺構の拡がりが北の方に確認されたため、一部、拡張を行い、Ⅳ区北拡という名称を付けた。最終的な調査面積は4,100m²であった。

第Ⅳ章 遺構と遺物

遺構については、調査区北部及び東部に集中している。全般に近世以降の削平の影響がみられるが、残存状況は良好である。本来の遺構面は遺物包含層中である可能性が高いが、包含層は肉眼では分層ができないため、その下層の赤ホヤ火山灰層面でしか検出できなかった。

今回の調査で確認された遺構のうち、掘立柱建物31棟、土坑22基、堀2条、塙又は柵列4列、井戸2基、溝跡3条、配石遺構1基、ピット1個について報告する。

(1) 掘立柱建物

SB-1 (図8)

調査区南東部で検出した梁間2間(4.29~4.35m)、桁行4間(6.9~6.95m)の東西棟総柱建物である。SB-2と一部重なっている。棟方向はN-58°-W、面積は30.23m²である。柱間寸法は梁(南北)が1.75~2.6m、桁行(東西)が1.42~2mであり、2間の梁間のうち、北側の柱間寸法が南側より0.55~0.85m短い。柱穴は円形で径25~40cm、深さは、7~45cmとなっている。また、根石のみ残存しているところが1箇所あり、その他4箇の柱穴で根石が検出された。

出土遺物(1~3)

遺物は、9個の柱穴から土師質土器細片が50点出土しているが、図示できるのは3点である。1は土師質土器の小皿であり、P159から出土している。ベタ底から丸味を持ちながら内湾する。口縁端部は丸味を持つ。2は土師質土器の杯であり、P201から出土している。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味になる。3は備前産の擂鉢である。P159からの出土である。口縁部は外傾する面を成し、端部を上方につまみ上げ、わずかに拡張が見られる。内面に7条を基調とする条痕が認められる。間壁編年のIVa期にあたる。

SB-2 (図9)

SB-1と北側の一部で重なりあっている梁間2間(3.84~4.1m)、桁行3間(5.7~5.95m)の南北棟総柱建物である。棟方向はN-41°-E、面積は24.4m²である。柱間寸法は梁(東西)が1.72~2.12m、桁行(南北)が1.68~2.27mである。柱穴は、径21~42cmの円形で、深さは、7~30cmとなっている。根石は、1個の柱穴のみ残存している。遺物は、9個の柱穴から土師質土器の細片52片、スラグ等が出土しているが、図示できるものは無かった。

SB-3 (図10)

調査区東部には掘立柱建物跡が集中しているが、そのうち5棟の建物が重なっている部分のうちの1棟である。梁間3間(5.97~6.1m)、桁行4間(7.92~9.88m)の身舎に東庇が付く東西棟建物で、西側に1間の張出がつく。東庇幅は2.00mであり、身舎の西から1間目と3間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。棟方向はN-44°-W、面積は64.36m²と大型の建物である。柱間寸法は梁(南

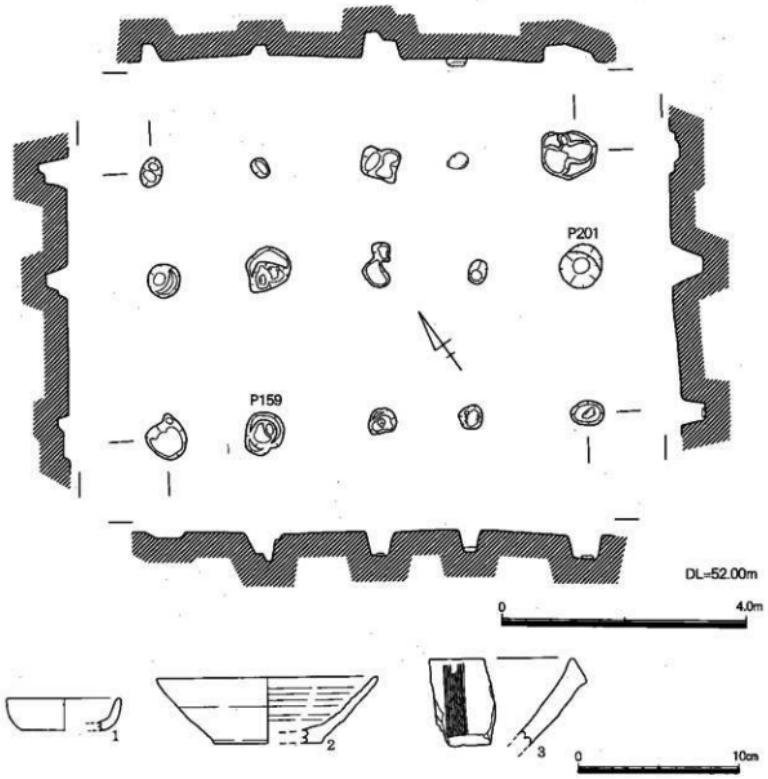


図8 SB1 平・断面図及び出土遺物

北)が1.94~2.1m、桁行(東西)が1.87~2.04mである。柱穴は円形で径30~50cm、深さ15~50cmで、2個を除き根石が残存している。

出土遺物(4・5)

遺物は、4個の柱穴からそれぞれ土師質土器11点、佛前焼1点、瓦器椀1点が出土している。4は土師質土器の杯であり、P790から出土している。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。口クロ成形、回転ナデ調整が施され、外底部に糸切り痕、ヘラ状の圧痕が認められる。内底部にわずかに糸切り痕が認められるが、全体的に指頭によるナデが認められる。器壁は全体的に薄く、硬質である。胎土は非常に緻密で、0.5~2mm大の砂粒を含む。5は瓦器椀であり、P706から出土している。内湾して立ち上がり、口縁部はつよいヨコナデにより外反する。底部には退化した高台が僅かに残る。体部外面下半に指頭圧痕が顕著であり、内面はヘラミガキによる暗文が認められる。軟

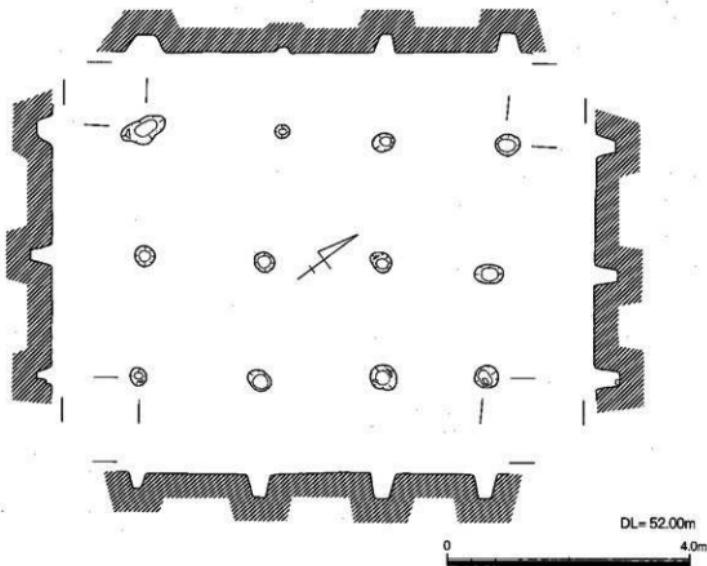


図9 SB 2 平・断面図

質であるため、外面はカーボンの剥離が著しい。

SB-4 (図11)

調査区のほぼ中央部に位置し、SB 23・24と一部重なっている。規模は梁間3間（5.21m）、桁行6間（10.01～10.44m）の東西棟建物である。棟方向はN-48°-W、面積は54.39m²と規模が大きい。西から1・3・5間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。柱間寸法は、梁（南北）が1.61～1.91m、桁行（東西）が1.58～1.75mである。柱穴は円形で径25～40cm、深さ12～50cmであり根石の確認できる柱穴は1個のみである。

出土遺物（6・7）

遺物は、5個の柱穴から土師質土器細片が20片出土しているが、図示できたのは2点である。6・7はそれぞれ土師質土器の小皿であり、P1044から出土している。6はロクロ成形であり、ナデ調整が施される。ベタ底から内湾し、口縁端部は尖る。底部外面は回転糸切り、内面にはロクロ痕が認められる。7は手づくね成形によるもので、口縁部を折り曲げ、短く直立させる。口縁部、内底部に指頭圧痕が顕著である。

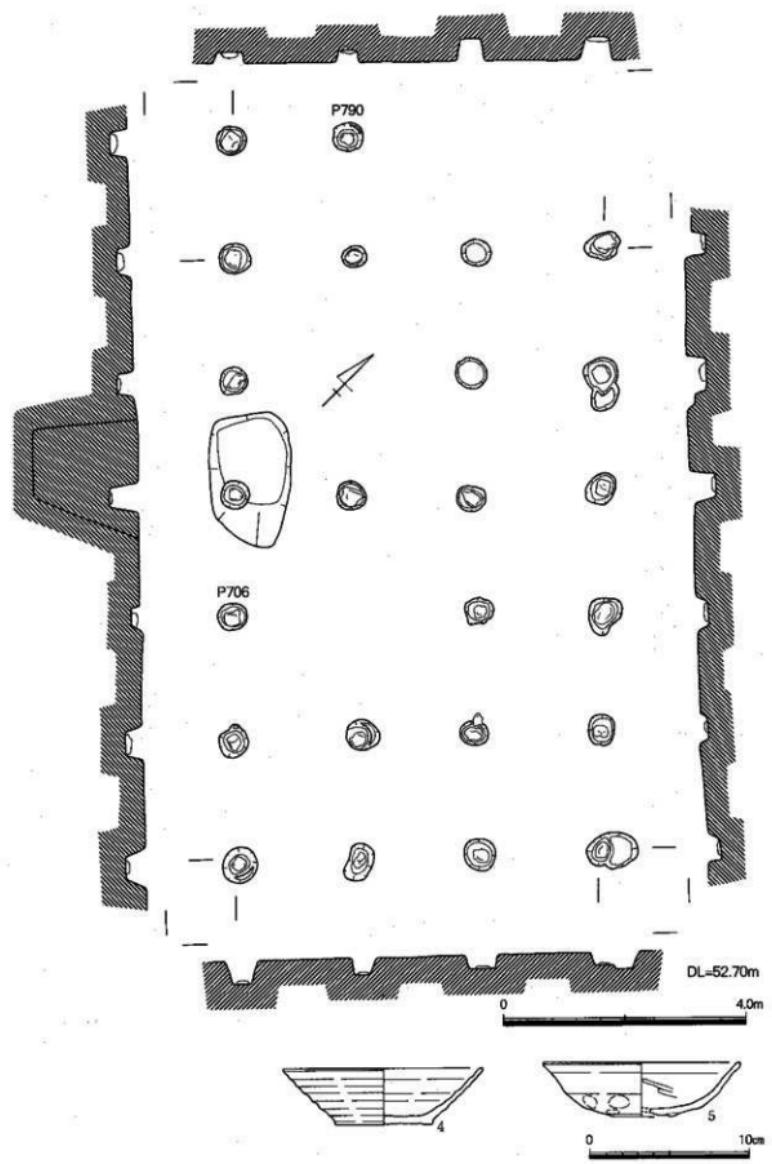


図10 SB 3 平・断面図及び出土遺物

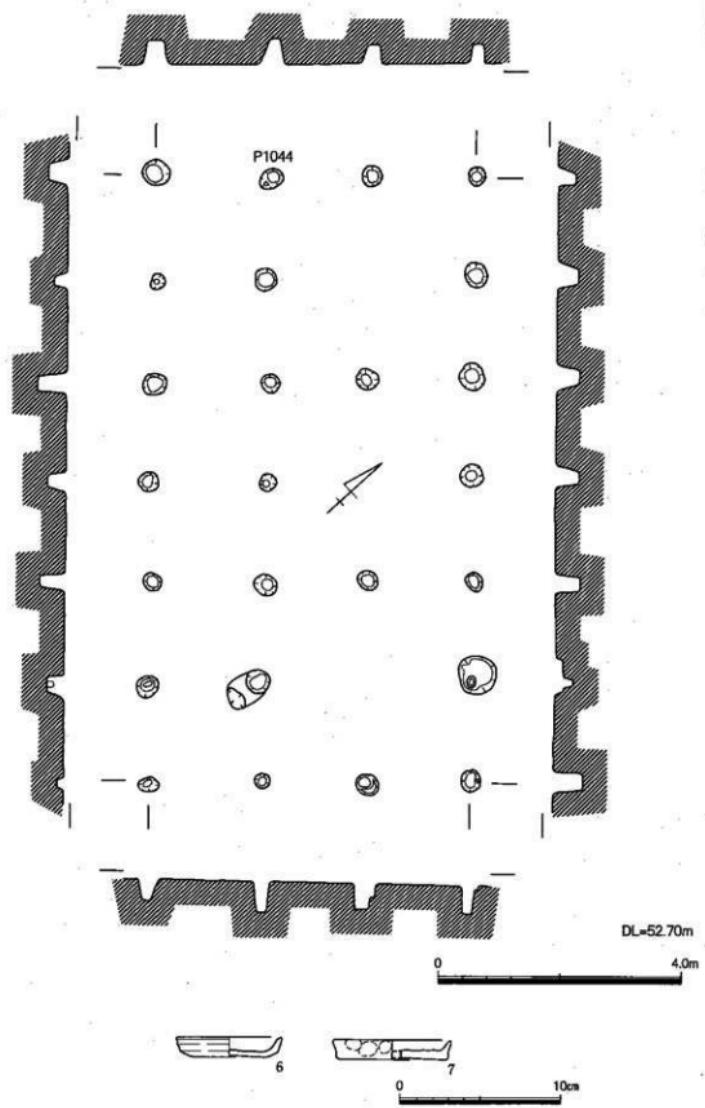


図11 SB 4 平・断面図

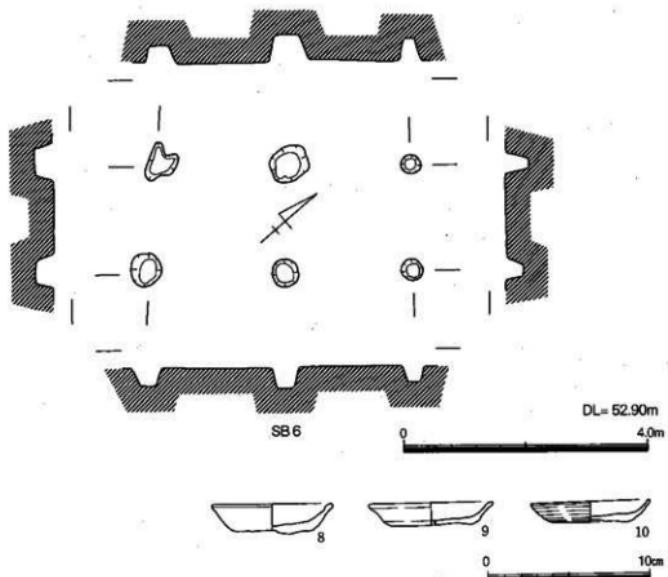
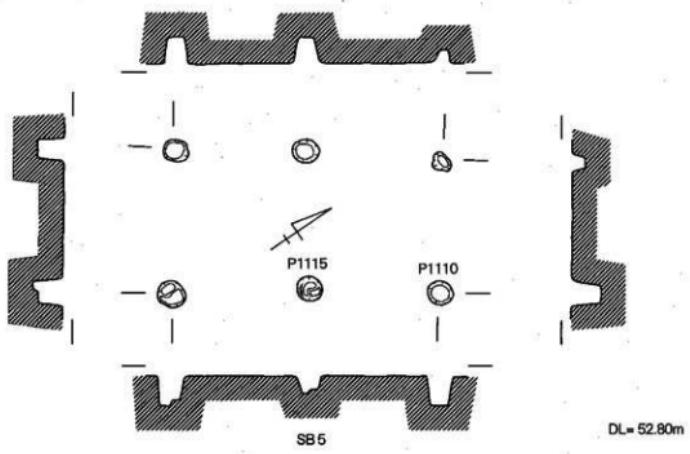
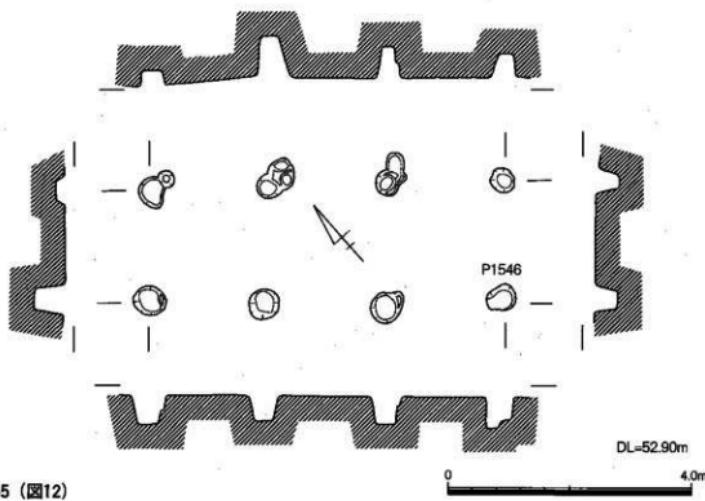


図12 SB 5・6 平・断面図及び SB 6 出土遺物



SB-5 (図12)

SB 4の南側に位置し、SB 6と棟方向をほぼ同一とする南北棟の建物である。規模は、梁間1間(2.18~2.34m)、桁行2間(4.38~4.44m)。

棟方向はN-40°-E、面積は10.29m²である。

桁行(南北)の柱間寸法は2.16~2.28mであり、円形の柱穴は径25~45cm、深さ22~50cmであり、

根石は確認できない。遺物は、土師質土器細片がP1110で2点、P1115で3点出土しているが図示できるものは無かった。

SB-6 (図12)

SB 4の南、SB 5の西側に位置する。梁間1間(1.73~1.77m)、桁行2間(4.13~4.28m)の南北棟建物で、SB 5と棟方向を並べる。棟方向はN-42°-E、面積は7.58m²である。桁行(南北)の柱間寸法は2~2.2mである。柱穴は、南西隅が不整形で他は円形の平面プランを有し、径30~70cm、深さ30~47cmである。根石は検出していない。

出土遺物(8~10)

遺物は、3個の柱穴から土師質土器細片が9点出土している。8~10は土師質土器の小皿である。全てロクロ成形、回転ナダ調整が施され、底部は回転糸切り、ヘラ状圧痕が認められる。8・9はベタ底から外反し、口縁端部は丸くおさめる。10はベタ底からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。全て、胎土は緻密で0.5~2mm大の砂粒を含み、硬質である。比較的丁寧なつくりである。

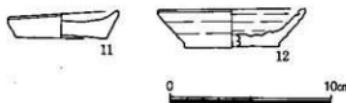


図13 SB 7 平・断面図及び出土遺物

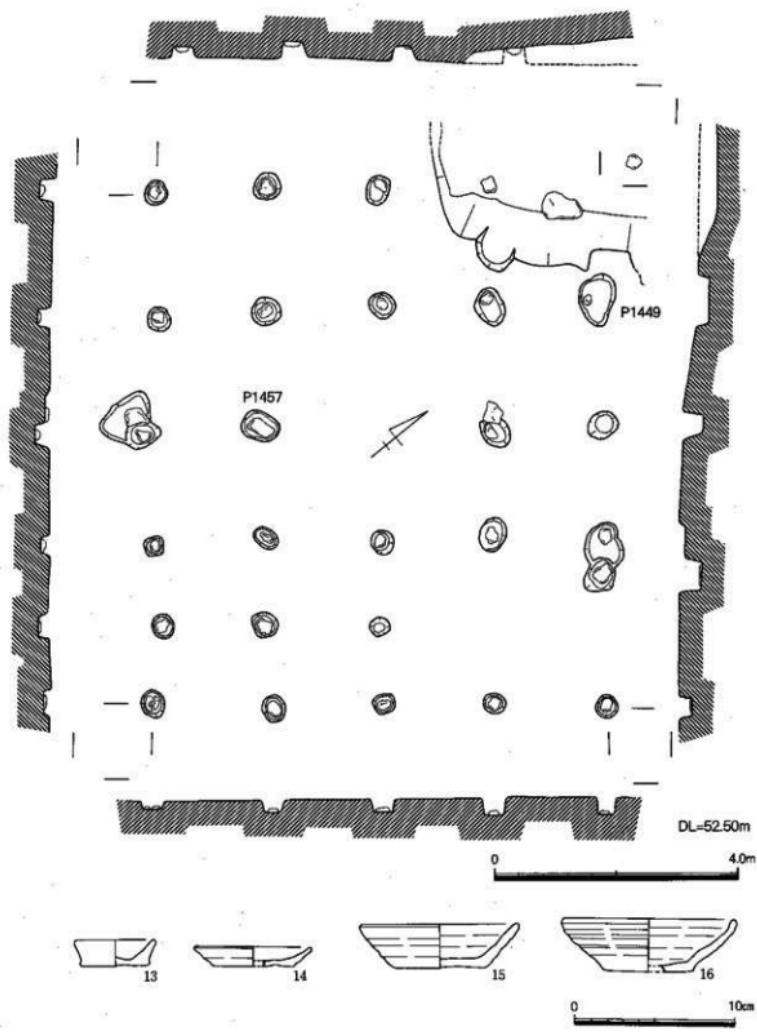


図14 SB 8 平・断面図及び出土遺物

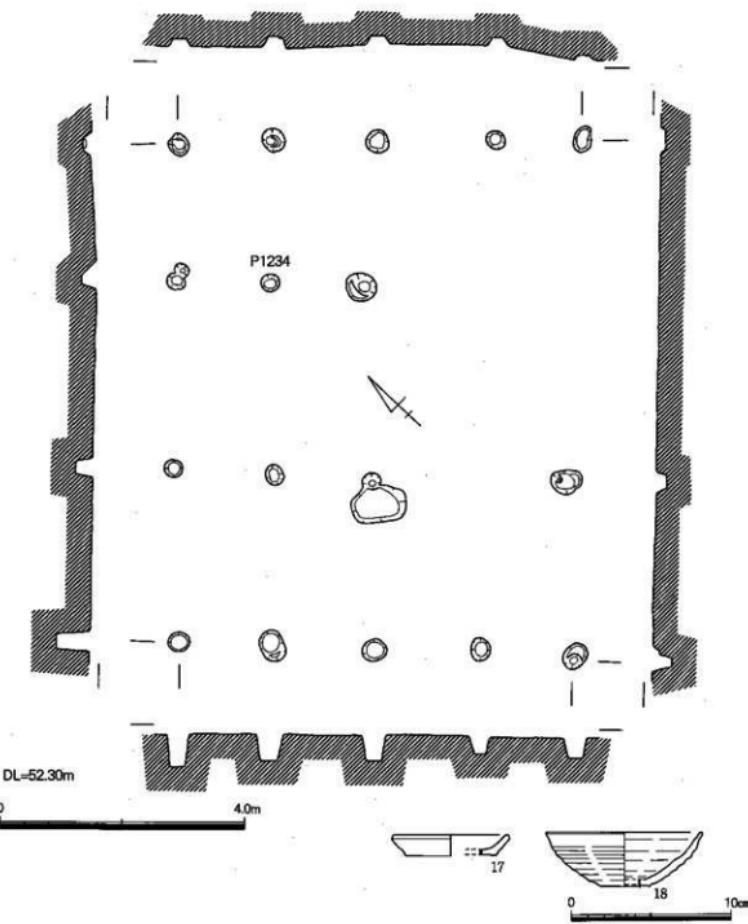


図15 SB 9 平・断面図及び出土遺物

SB-7 (図13)

南北方向から東西方向へ縦状に折れ曲がる構列SA 1.4の南西隅に位置する東西棟の建物である。規模は、梁間1間（1.84～1.99m）、桁行3間（5.82m）で棟方向はN-48°-W、面積は11.58m²である。桁行（東西）の柱間寸法は1.89～1.98mとなっている。柱穴は円形で、径40cm前後、深さ15～67cmである。根石は確認していない。

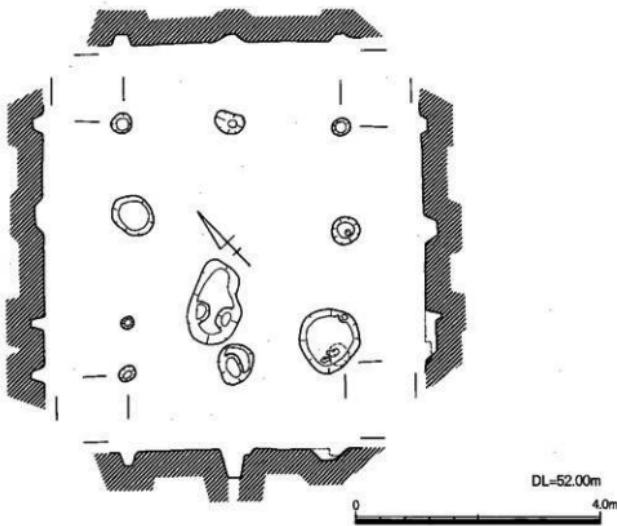


図16 SB 10 平・断面図

出土遺物 (11・12)

遺物は、6個の柱穴から土師質土器細片が14点出土している。11・12は土師質土器の小皿であり、2点ともP1546から出土している。11は厚いベタ底から僅かに直しと、口縁端部は尖る。ロクロ成形、ナデ調整が施され、底部は回転糸切りである。12は小杯とも呼べるような器形のものである。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。ロクロ成形であり、ナデ調整が施される。底部外面は回転糸切りである。内面は工具による調整のため、沈線状に線が巡る。胎土は細砂粒を含み、浅い黄橙色を呈する。

SB-8 (図14)

調査区北部に位置し、今回の調査で検出された掘立柱建物の中で最大規模である。しかし、検出された柱穴がやや変則的であるため、建物構造については断定しがたい。ここでは、次の2通りの可能性を指摘しておく。

まず、平面プランが正方形に近く、一部未検出の柱穴はあるもののすべての柱穴に根石が据えられていたと推定できることから、総柱建物の可能性が指摘できる。その場合には、重層構造を持つ建築物まで視野に入れたい。

次に、4間四方の身舎に東庇が付くことが考えられる。東から1間目及び2間目の柱間寸法が他と比較して短いことが根拠となる。いずれにせよ、この建物の北部（北西方向）には茶臼が出土し

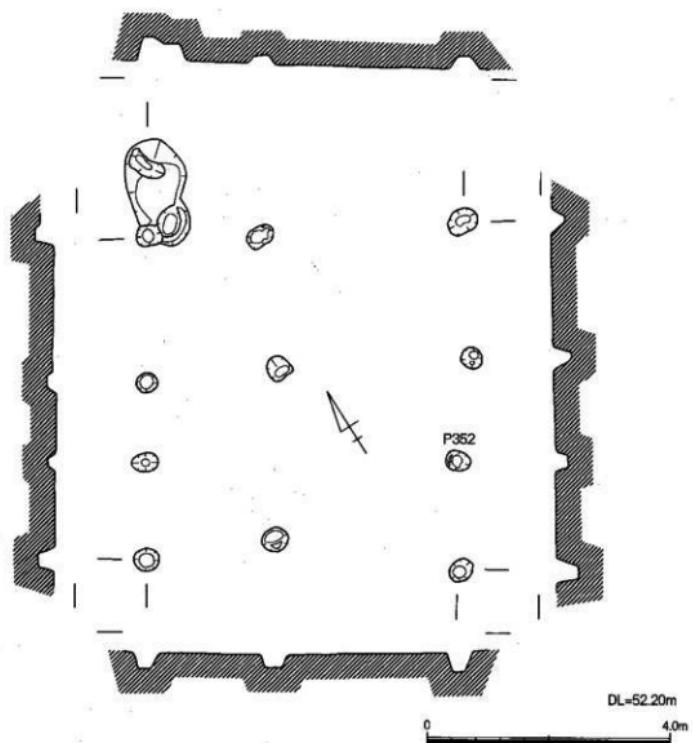
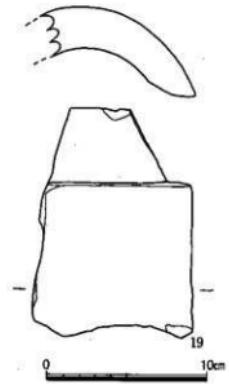


図17 SB 11 平・断面図及び出土遺物

た土坑（SK 202）が存在し、また、多量の土器をはじめ短刀の刀身も出土している廃棄土坑状の遺物集中地区が隣接しており、時期的ににもこの建物との同時存在が想定できることから一群の掘立柱建物の中心的な役割を果たしていたのであろう。

以下、総柱建物と想定した場合について報告する。

梁間4間（7.26～7.48m）、桁行5間（8.4m）の規模を有する正方形に近い東西棟の建物である。北側4間にに対して南側5間と変則的になる。棟方向はN-51°-W、面積は64.25m²である。東から1間目と2間目の柱間寸法（1.24～1.35m）が他（1.8～2.85m）と比較して短くなっている。一部未検出の柱穴及び根石のみ検出できた柱穴がある。柱穴は円形で、径29～85cm、深さ15～30cmと比較的浅い。すべての柱穴に根石が据えられていたと推定できる。



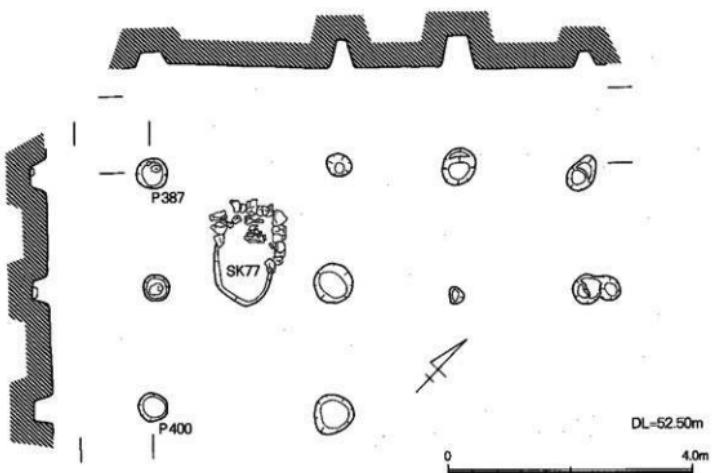


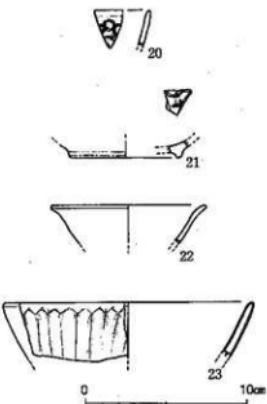
図18 SB 12 平・断面図

出土遺物（13～16）

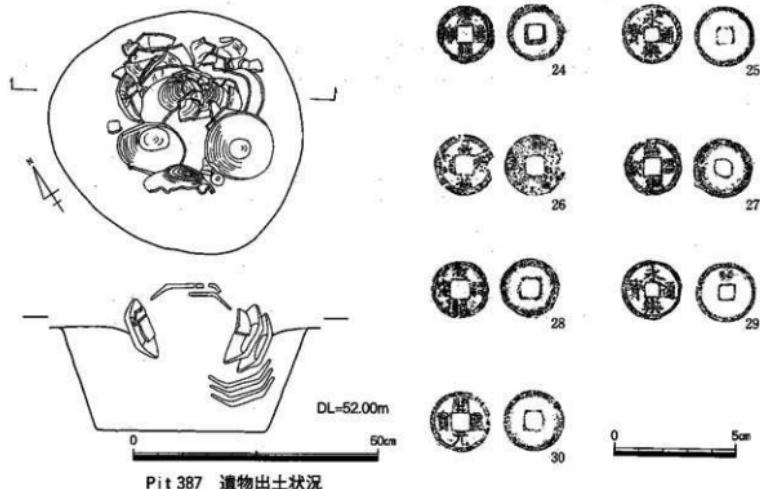
遺物は、5個の柱穴から土師質土器の細片が25点出土している。13～14は土師質土器の小皿である。13はP1457から出土している。ベタ底から直立気味に短く立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内底部中央が凸状に盛り上がる。14はP1449からの出土であり、ベタ底から外反する。外底部に糸切り後、ヘラ状の圧痕が認められる。胎土は緻密で、硬質である。15は小杯とも呼べる器形である。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。13と同じP1457からの出土である。16は土師質土器の杯である。ベタ底から外反し、口縁部は内底消し、縁部はつよいヨコナデにより尖る。外面は底部脇を指頭によるナデにより角に丸味を持たせ、体部はヨコナデ痕が残る。内面は丁寧なナデ調整が施される。外底部は糸切り後、ヘラ状の圧痕が認められる。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部外面は回転糸切り痕が認められる。

SB-9（図15）

SB 8の北に隣接する建物であるが、軸線の方向に差異があることから、同時期に存在していたもの



SB 12 Pit 400 出土遺物



Pit 387 遺物出土状況

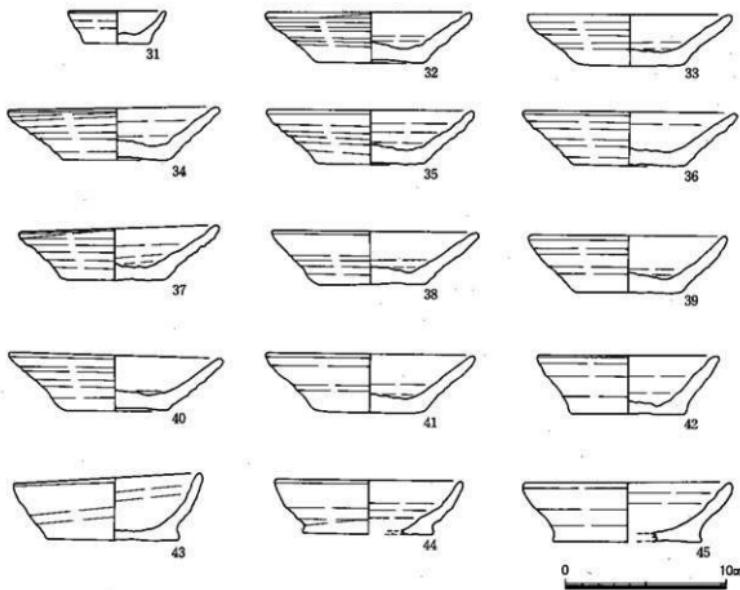


図19 Pit 387 出土遺物（銅錢・土師質土器）

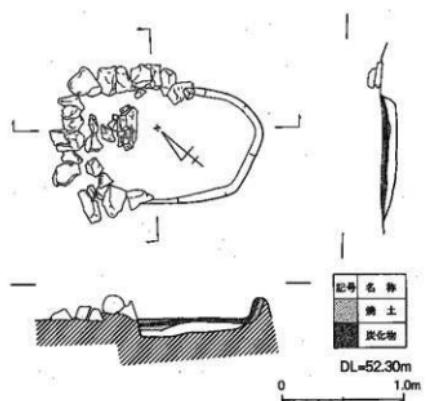


図20 SK 77 平・断面図

ある。17・18ともにP 1234からの出土であり、土師質土器である。17は小皿であり、ベタ底から斜上外方に短く立ち上がり、口縁端部は僅かに面を成す。18は杯であり、ベタ底から外反して立ち上がり、口縁部は内湾し、端部はつよいヨコナデにより尖る。器壁は薄く、硬質である。ロクロ成形であり、回転ナデ調整が施され、外面にはヨコナデ痕が残るが、内面は丁寧なナデである。

SB-10 (図16)

調査区東部に位置し、SB 11と一部重なる。2間四方（東西3.54m、南北3.27m）の身舎に南庇が付く東西2間（3.54m）、南北3間（4.12m）の東西棟建物である。棟方向は、N-45°-W、面積は14.58m²である。柱間寸法は、梁間（南北）が1.73~1.77m、桁行（東西）が1.5~1.77m、南庇幅は0.85mである。柱穴は径19~74cmの円形で深さは15~50cmとなっている。根石の残存している柱穴がある。

SB-11 (図17)

SB 10と一部重なる。梁間2間（5.06~5.17m）、桁行3間（5.31~5.69m）の南北棟建物である。棟方向はN-32°-E、面積は29.42m²である。南から2間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。柱間寸法は梁（東西）が1.83~3.34m、桁行（南北）が1.32~2.37mで、東側及び北から1間目の柱間寸法が長い。柱穴は円形で、径35~50cm、深さ17~36cmである。

出土遺物 (19)

遺物は2個の柱穴から土師質土器細片5点、瓦1点が出土している。19は丸瓦片であり、P 352からの出土である。凹面は側縁、側面、玉縁面、凸面玉縁側縁は、それぞれ1.4cm、1.8cm、2.3cm、0.8cmの面取りが施される。凹面には、細かな布目痕、凸面の一部に繩叩き痕が認められるが、ナデにより消されている。

ではないと考えられる。3間四方の身舎に西庇が付く、南北棟の建物である。東西の柱間寸法（1.4~1.93m）が南北（2.25~3.09m）より短いので、東西が梁、南北が桁方向であると思われる。棟方向はN-44°-E、面積は54.83m²、西庇幅は1.52mである。柱穴は一部未検出であるが、円形を呈し径30~50cm、深さ10~53cmである。1個のみ根石が残存していた。

出土遺物 (17・18)

遺物は11個の柱穴から、土師質土器細片が84点、備前播鉢1点、瀬戸梅瓶1点が出土しているが図示できたのは2点である。

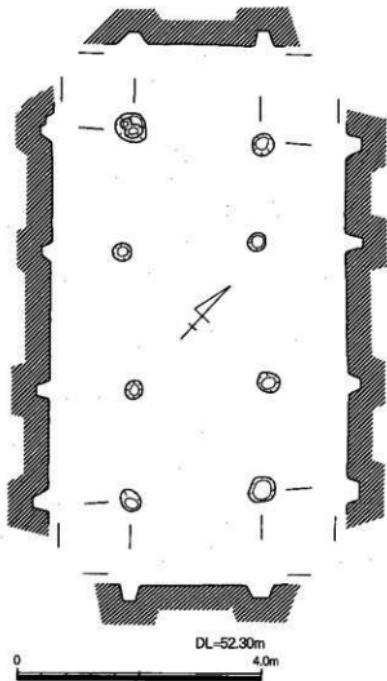


図21 SB 13 平・断面図

で施される。高台疊付の釉は削り取る。22は白磁の堆反り皿である。口縁部はゆるく外反する。透明感のつよい釉が全体に施釉されるが、ピンホール状に気泡の痕跡が認められる。23は青磁碗であり、片切彫りによる蓮弁文が劍頭が蓮弁としての単位を意識して施されている。全体的に透明感のつよい釉が施釉されており、貢入が認められる。

埋納遺構 (P 387) について (図19)

P 387はSB 12の南西隅角の柱穴である。直径50cmの円形プランを呈し、深さ22cm、底面幅35cmを測る。遺構検出レベルは51.98mで、SB 12の他の柱穴を検出したレベルと同様である。図19は、出土状況をあげているが、検出面上において、土師質土器の杯(42・45)が伏せられた状況で検出した。遺構埋土中には、小杯(31)を含め計12個体の杯と皿が重なるようにして埋納されており、特に、ピット東よりで皿(32~36)が上向きに5個体重なって出土しており、さらに皿と皿との間には銅錢(24~30)が1点ずつ入っていた。

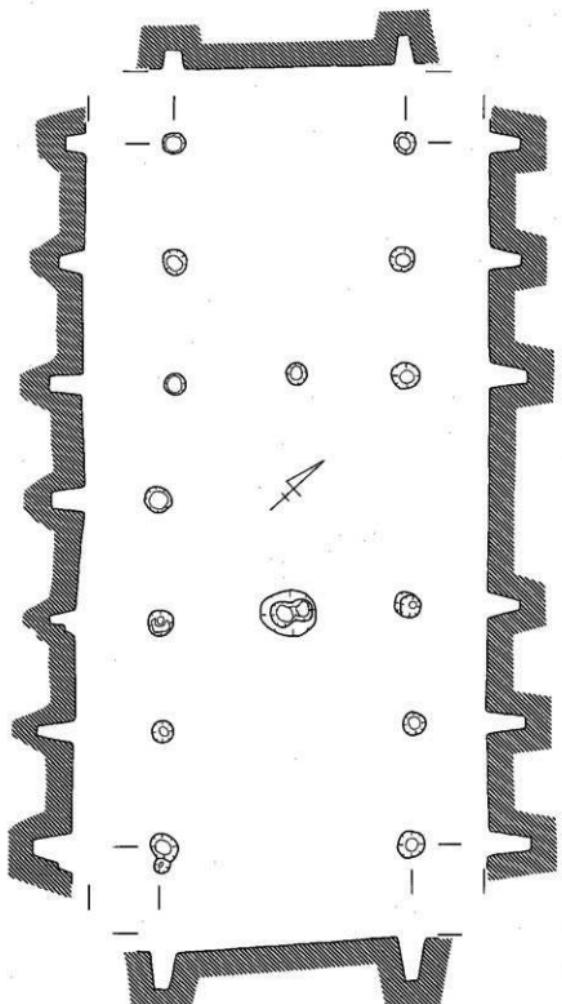
このような埋納遺構については、県内の中世関連遺跡では岡豊城跡(南国市)の詰ノ段で検出さ

SB-12 (図18)

調査区の東端部に位置し、焼成土坑SK 77を内部に抱える建物である。焼成土坑の覆屋的性格を持った梁間1間(3.1m)、桁行2間(3.87m)の東西棟身舎に東側(北東方向)1間×2間の張出部が付属した建物とするのが妥当であろう。身舎の桁行(東西)柱間寸法は1.91~1.96mで、張出部の柱間寸法は1.98~2.05mである。身舎棟方向はN-44°-W、面積は19.69m²である。柱穴は円形で、径22~69cm、深さ23~45cmである。また、南西隅角のP 387は土師質土器の皿の間に銅錢を入れ埋納している。

出土遺物 (20~45)

遺物は地鎮ビットを含め、土師質土器が25点、青磁碗1点、白磁皿1点、青花碗皿2点が柱穴から出土している。20~23はP 400(図18)からの出土である。20・21は青花である。20は碗の口縁部片であり、外面には口縁下端に1条の界線、密な唐草文くずれの文様が施される。内面は無文である。21は皿の高台部片であり、内面見込みに玉取り瓣子文様の一部が発色の悪いコバルト



DL=52.50m

0 4.0m

図22 SB 14 平・断面図

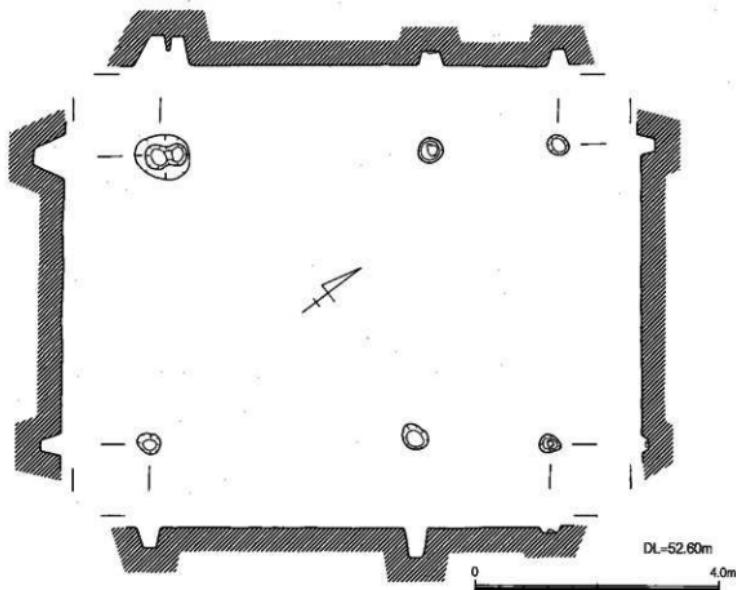


図23 SB 15 平・断面図

れたP1などがあげられるが、岡豊城跡の場合は、12個体の杯が上向きで整然と並べられ、その上に10枚前後の銅鏡をそれぞれの中に収めた状態で検出されており、その状況に違いがある。また計91枚にも及ぶ銅鏡が出土しており、量についても違いがみられる。前述したように、P387についてはSB 12の南西隅角の柱穴にあたり、柱痕等は確認されていない。おそらく、建物の廃絶の時に行われた地鎮行為のビットではなかろうか。

P 387出土遺物（24~45）

埋納鏡（24~30）については銅鏡計測表（P174）を参照されたい。31~45は土師質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。31は小杯であり円盤状底部から短く内湾する。32~41は皿である。32~41は口径12.0~12.9cm、器高3.2~3.6cmを測る。ベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面体部下半は丁寧なナデが施され、丸味を帯びる。内面は体部上半から口縁部にかけて丁寧なヨコナデが施されるが、体部下半から内底部にかけてはナデによる段が残り、内底中央部が盛り上がるものが多く見られる。胎土中にはチャートを含む0.5mm大の砂粒と、2~3mm大の角礫が若干含まれる。43~45は内湾するタイプの杯である。口径11.0~12.6cm、器高3.3~4.2cmを測る。ベタ底からやや段を持ちながら内湾して立ち上がる。内外面ともナデによる段が残り、内底中央部にロクロ目が残る。

底部切り離しは糸切りであるが、雑であり、静止状の糸切り痕(44)も認められる。色調は、前述した32~41に比べややに赤い褐色系である。

焼成土坑について(図20)

SK 77はSB 12の南西隅に位置する被熱した土坑である。長軸1.7m、短軸1.1mの楕円形プランを呈する。土坑の周縁の半分には、直径20~30cmの角礫が並べられ、土坑中央部には直径30cmの礫が立つように置かれている。検出面ではこれらの列石と土坑内部の焼土、炭化物を検出した。土坑内部は焼土層と炭化物層が互層になっており、深さ5cm~10cmを測る。壁は全体的に被熱しており、赤褐色に比熱している。列石は、奥壁にある中央部の石と、周縁部両側の石が被熱している。列石のレベル、土坑内部の状況からみて、検出面がほぼこの土坑の床面と考えられる。土坑内部からは遺物の出土は皆無であったが、周縁部から鉄釘、土師質土器片が出土している。

SB-13(図21)

SB 12の北側に隣接する。梁間1間(2.07~2.13m)、桁行3間(5.71~6.01m)の東西棟建物である。棟方向はN-42°-W、面積は12.8m²である。桁行(東西)の柱間寸法は1.65~2.3mで、南北両側とも中央部の柱間寸法が左右に比べて広い。柱穴は円形で、径30~45cm、深さ20~30cmである。

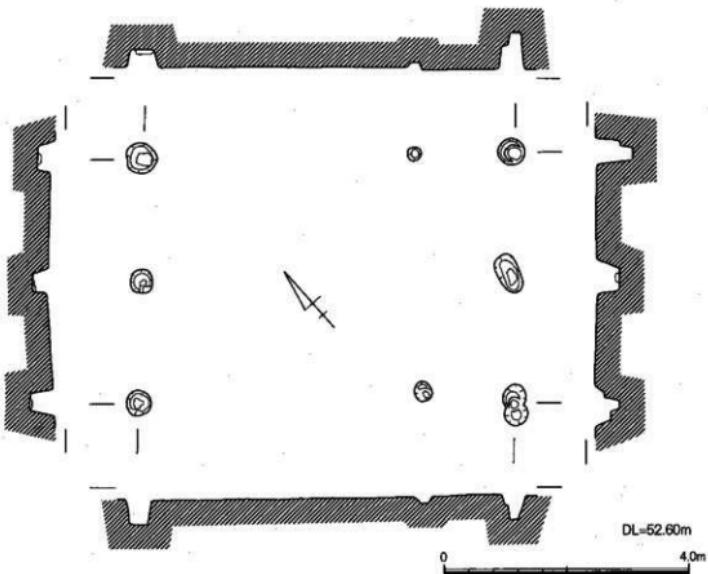


図24 SB 16 平・断面図

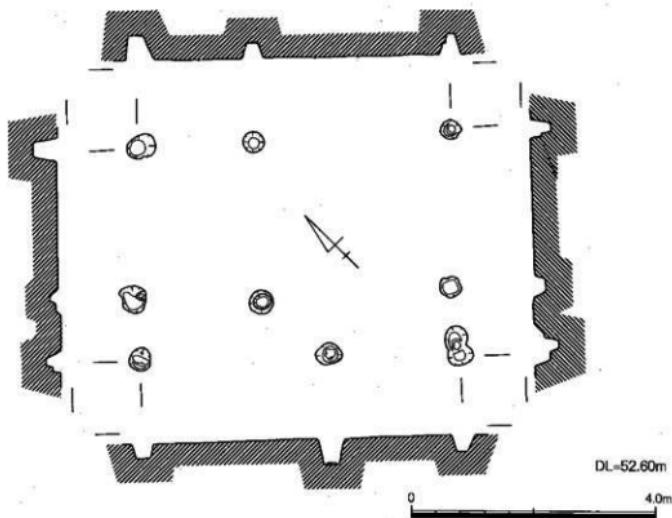


図25 SB 17 平・断面図

出土遺物は無かった。

SB-14（図22）

SB 3・15・17と一部重なりあっている。SK 122とも重複しているが、平面プランのうえでは時期的前後関係は不明である。梁間1間（3.58～3.79m）、桁行6間（11.53m）、面積43.74m²の東西棟建物で棟方向はN-46°-Wであるが、柱穴の配置状況が特異である。まず、桁行は南側が6間であるのに対し北側は5間で、あたかも南側中央の柱が欠損した状況となっている。また、1間の梁間の柱間距離が異常に長い。そして、西から2間目及び東から2間目の柱通りにあたかも間仕切り柱状の柱穴が確認できる。未検出の柱穴が存在する可能性を否定することはできないが、検出状況からすると強い規格性を感じられる柱穴プランである。この建物構造について、次のように推定する。

北側中央部及び東西両方向については、柱間距離からして壁様の構造物があったとは考えにくい。外に対して開かれた空間であった可能性が強い。それに対して、南側は柱間距離（1.82～2m）が比較的良好く揃い柱通りも整然としていることから、すべての柱間に壁様構造物の想定が可能である。そして、間仕切り柱状の2個の柱穴については、棟持柱の機能を想定したい。東西両端に棟を支えるべき柱跡が確認できず、この2本の柱で上部の主となる棟柱を支えなければ建築物として機能しないと考えるからである。なお、その場合東西両端部については梁に棟の荷重をかけたと推測する。

柱穴については円形で形状が1個を除いて良く揃い、径34～45cm、深さ35～74cmである。根石は確認していない。遺物は、柱穴から土師質土器細片が9点、備前焼壺片が1点出土している。

SB-15 (図23)

SB 3・14・16・17と重なっている、梁間1間 (4.71~4.88m)、桁行2間 (6.53~6.55m) 面積は31.96m²の南北棟建物である。棟方向はN-44°-Eである。梁の柱間寸法が長い。西側の柱間寸法 (2.1~2.22m) が東側 (4.33~4.44m) の約半分程度であるため、1間四方の身舎に北庇が付く可能性もある。柱穴は円形で径29~90cm、深さ10~52cmで一部根石が確認できる。柱穴からの出土遺物は無かった。

SB-16 (図24)

SB 3・15・17と一部重なっており、SB 16と軒を接するように並ぶ。梁間2間 (3.98~4.08m)、桁行2間 (6.08~6.18m) の東西棟建物である。棟方向はN-49°-Wで、面積は25.13m²である。柱間寸法は、梁 (南北) が1.97~2.05m、桁行 (東西) は東側が1.43~1.64m、西側が4.44~4.73mと、差が大きい。柱穴は円形で、径21~65cm、深さ11~60cm。根石の残存する柱穴が4個ある。遺物は、柱穴から土師質土器9点が出土している。

SB-17 (図25)

SB 3・15・16と一部重なる。梁間1間 (3.47~3.71m)、桁行2間 (5.14m) の東西棟身舎に南庇が付く。棟方向はN-46°-W、面積は19.37m²である。南庇幅は1.07mとなっている。円形の柱穴

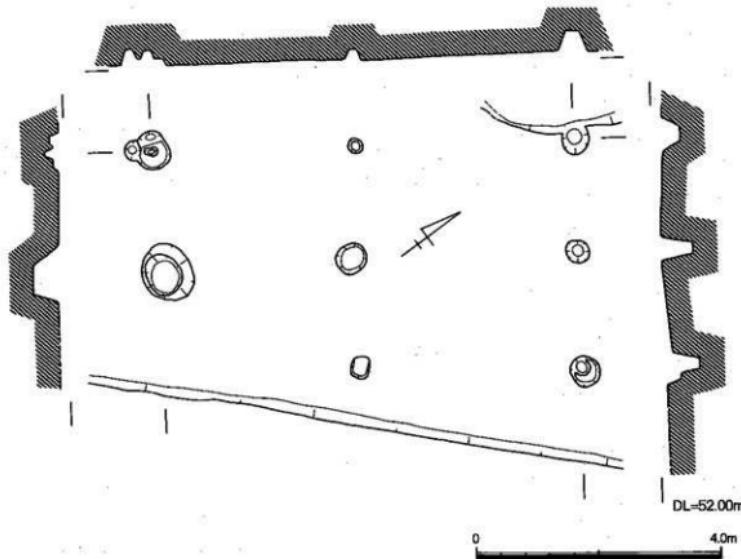


図26 SB 18 平・断面図

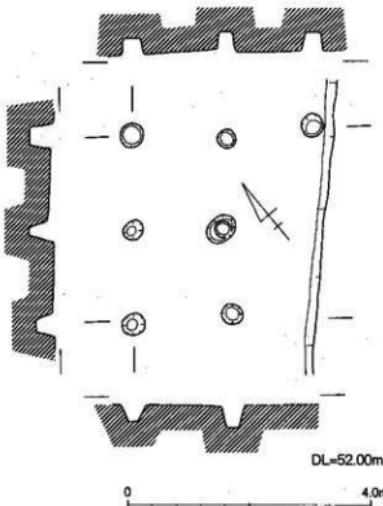


図27 SB 19 平・断面図

SB-19 (図27)

SB 18の南に隣接し、東側が調査区外で確認できていない。南北は2間(3.01m)、東西2間(2.96m)以上の建物である。現況ではほぼ正方形のため棟方向はわからない。東西方向に規模が拡大すれば東西棟となり、棟方向はN-50°-Wであるが、2間四方の総柱建物の可能性もある。柱間寸法は南北が1.48~1.53m、東西が現況1.42~1.63mである。柱穴は円形で、径31~52cm、深さ27~40cmとしっかりしている。柱穴からの遺物出土は無かった。

は一部根石が確認でき、径34~47cm、深さ15~42cmである。柱穴からの遺物出土は無かった。

SB-18 (図26)

調査区を南西から北東方向に私道部分として未調査区域が残るが、そのため東部分について未調査の掘立柱建物である。南北は2間(6.91m)、東西2間(3.71m)以上の規模である。東西棟か南北棟か判別しがたいが、南北棟と仮定すれば、棟方向はN-34°-Eとなる。柱間寸法は南北が3.32~3.59m、東西が現状で1.82~2.06mと南北の柱間寸法が東西に比較して長い。柱穴は円形で、径24~98cm、深さ19~52cmである。柱穴からの遺物出土は無かった。

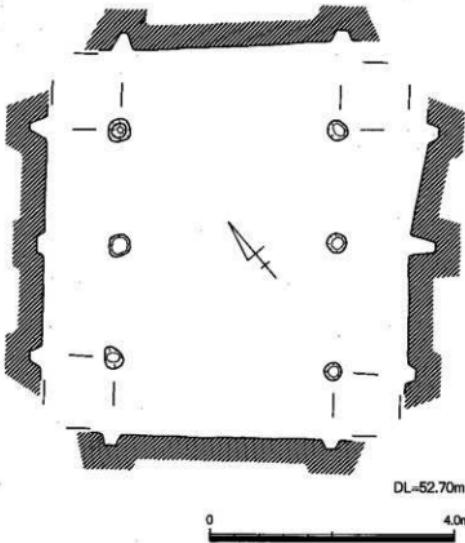


図28 SB 20 平・断面図

SB-20 (図28)

SB 5の東側に並んで検出した。渠

間1間（3.57～3.58m）、桁行2間（3.7～3.92m）の南北棟建物である。棟方向はN-42°-E、面積は14.03m²である。柱間寸法は桁行が1.81～2.07mで梁と比較して短い。柱穴は円形で、径27～40cm、深さ17～43cmである。遺物は、柱穴から土師質土器片7点、瀬戸灰釉鉢片が1点出土している。

SB-21（図29）

SB 22と一部重なる。梁間1間（1.89～1.9m）、桁行2間（4.26～4.41m）の南北棟建物である。棟方向はN-46°-E、面積は8.38m²である。桁行柱間寸法は2.01～2.40mとなっている。円形の柱穴は径24～31cm、深さ16～35cmである。遺物は、柱穴から土師質土器細片が2点出土している。

SB-22（図29）

SB 21と一部重なる。梁間2間（4.01～4.38m）、桁行3間（6.08～6.31m）の東西棟建物である。棟方向はN-46°-W、面積は27.64m²である。柱間寸法は梁（南北）が1.82～2.47m、桁行（東西）が1.3～2.71mで、東西の中央部の寸法が左右に比べて短い。このため柱穴プランからは梁間1間、桁行2間の南北棟建物が2軒並列している可能性もある。柱穴は円形を呈し、径22～46cm、深さ15～42cmである。遺物は、柱穴から土師質土器細片が4点出土している。

SB-23（図30）

SB 22の西に位置し、SB 24と一部重なる。1間四方（3.72～4.68m）の東西棟身舎に北庇が付く。棟方向はN-51°-Wで、面積は27.98m²である。桁行（東西）の柱間寸法が通例より長いという特徴を有する。北庇幅は2mである。柱穴は円形で、径27～45cm、深さ14～55cmである。1個の柱穴で根石を検出した。遺物は、柱穴から土師質土器片が4点出土している。

SB-24（図30）

SB 23と一部重なる。梁間1間（4.44～4.47m）、桁行2間（3.92～4.11m）の南北棟建物である。棟方向はN-28°-Eで、面積は18.37m²である。桁行柱間寸法は1.9～2.08mで、通例より梁間が長い。これは、SB 23とも共通する特徴である。柱穴は円形で、径22～56cm、深さ8～40cm、西側柱通りの柱穴にはすべて根石が入っていた。遺物は、2個の柱穴から土師質土器片が2点出土している。46はP1036からの出土であり、ベタ底から斜上外方に大きく開く。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。内底部に平行に指頭によるナデが認められる。

SB-25（図31）

調査区北東端部に位置するため北側の一部が調査区外で全容は不明である。梁間は1間（3.68m）、桁行2間（3.19～3.27m）以上の規模を有する南北棟建物であると思われる。棟方向はN-34°-E、面積は現状で12.03m²である。桁行（南北）柱間寸法は1.51～1.72mで、梁間の約2分の1である。柱穴は円形で、径34～66cm、深さ25～48cmである。遺物は、4個の柱穴から土師質土器片9点、瓦質火鉢片が1点出土している。47は杯であり、P880からの出土である。ベタ底からやや段を持ちな

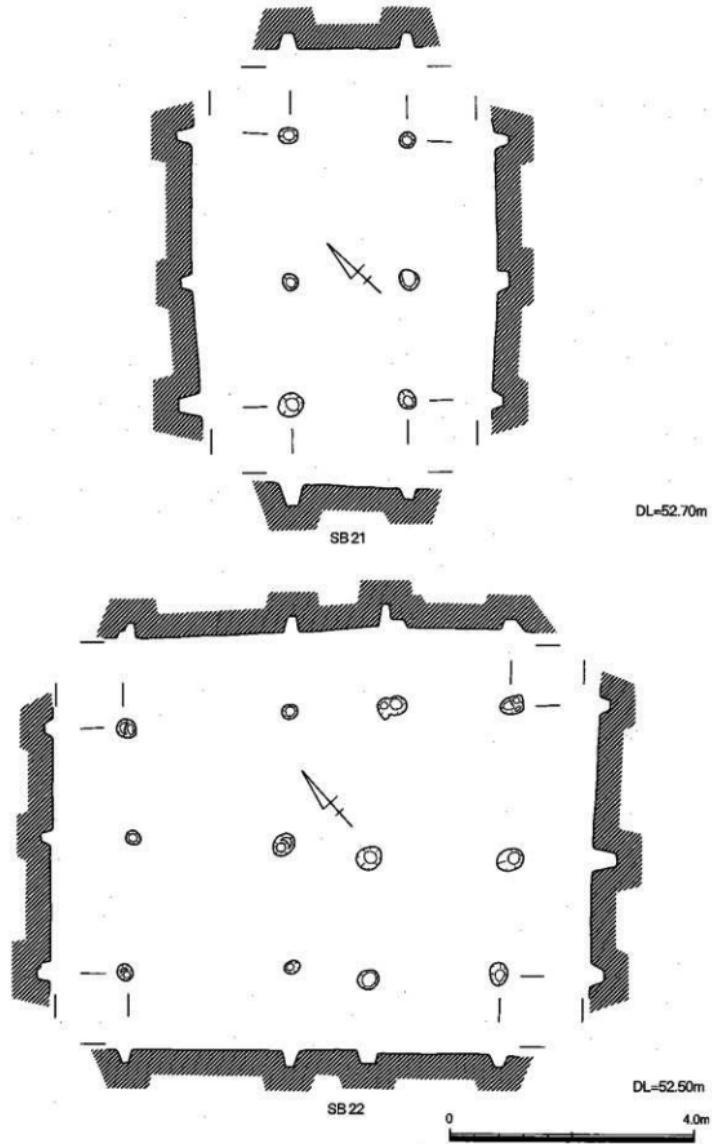


図29 SB 21・22 平・断面図

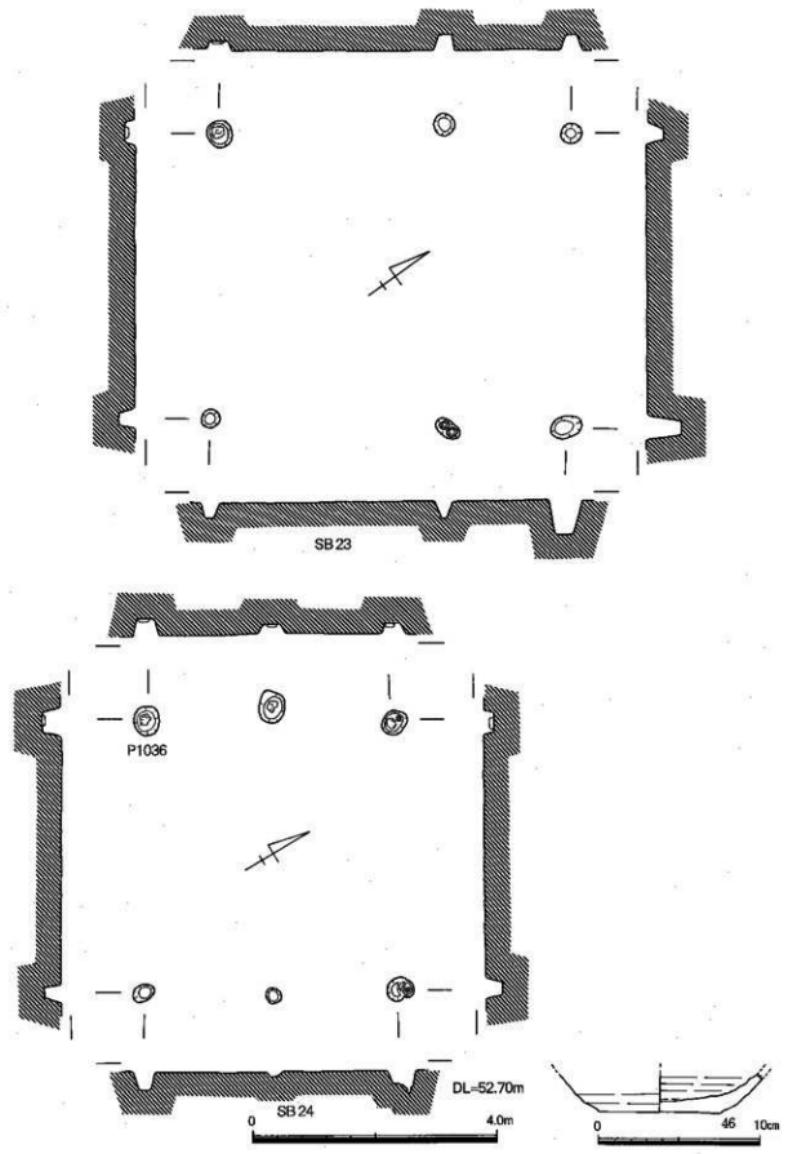


図30 SB 23・24 平・断面図及び SB 24出土遺物

がら立ち上がり、内湾する。口縁端部は丸まる。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。内外面ともナデによる段が明瞭である。胎土中にはチャート0.5mm大の砂粒、及び3~5mm大の角礫が若干含まれ、色調はにぶい褐色系である。比較的器壁が厚い。

SB-26 (図31)

SD 3をまたぐように配置されているが、平面プランからは前後関係は不明である。また、西側柱通りの柱穴1個が未検出であるが、SK 176に切られている可能性がある。梁間1間(4.4~4.71m)、桁行2間(6.71~7.07m)の南北棟建物で、棟方向はN-38°-E、面積は33.3m²である。桁行(南北)柱間寸法は2.2~2.37mで、梁間柱間寸法は通例より長い。柱穴は円形で、径30~45cm、深さ13~25cmと比較的浅い。柱穴からの遺物出土は無かった。

SB-27 (図32)

SB 26・28と一部重なる。梁間1間(4~4.28m)、桁行2間(8.22~8.23m)の南北棟建物である。棟方向はN-38°-E、面積は35.22m²である。桁行(南北)柱間寸法は3.8~4.43mとなっている。柱穴は円形で、径30~50cm、深さ15~44cmである。この建物については以下の疑問が残る。梁間が通例より長い。東側柱通りがSD 3の東岸に整然と並び、また、柱穴径も比較的小さい。柱径については柱痕が残存しないため確定できないが、中央の柱穴底径が約22cmであるため、それ以下であると考えられる。これらのことから、東側柱穴列については柵列の可能性がある。西側柱穴列については判然としないが南西隅の柱穴底径が約12cmと小さく、その柱通り南側に柱間寸法でも対応するピットが存在するため、やはり柵列の可能性が残る。遺物は、3個の柱穴から出土している。48・49はP 968からの出土である。48は東播系捏鉢の口縁部片である。口縁端部は上下に肥厚する。49は土師質土器の杯である。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がるラッパ形を呈する。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。

SB-28 (図32)

SB 26・27と一部重なる。その北半部にSK 176が存在するが切り合い関係がないため、平面プラン状は前後関係が不明である。梁間1間(1.94~1.97m)、桁行2間(4.08~4.09m)の南北棟建物である。棟方向はN-44°-E、面積は8.04m²である。桁行(南北)柱間寸法は、2~2.08mとなっている。柱穴は円形で、径22~48cm、深さ20~36cmである。遺物は、SK 176、柱穴から出土しているがSK 176出土遺物については土坑の項でとりあげる。

SB-29 (図33)

SB 8の南西に位置し、SB 7と一部重なる。梁間2間(3.87~3.9m)、桁行2間(5.23~5.38m)の南北棟建物である。棟方向はN-45°-E、面積は20.98m²である。柱間寸法は梁(東西)が1.85~2.67m、桁行(南北)が2.59~2.71mとなっている。円形の柱穴は、径26~35cm、深さ12~34cmである。遺物は、P 1508から土師質土器細片17点、備前焼窯片1点、鉄釘1点が出土している。

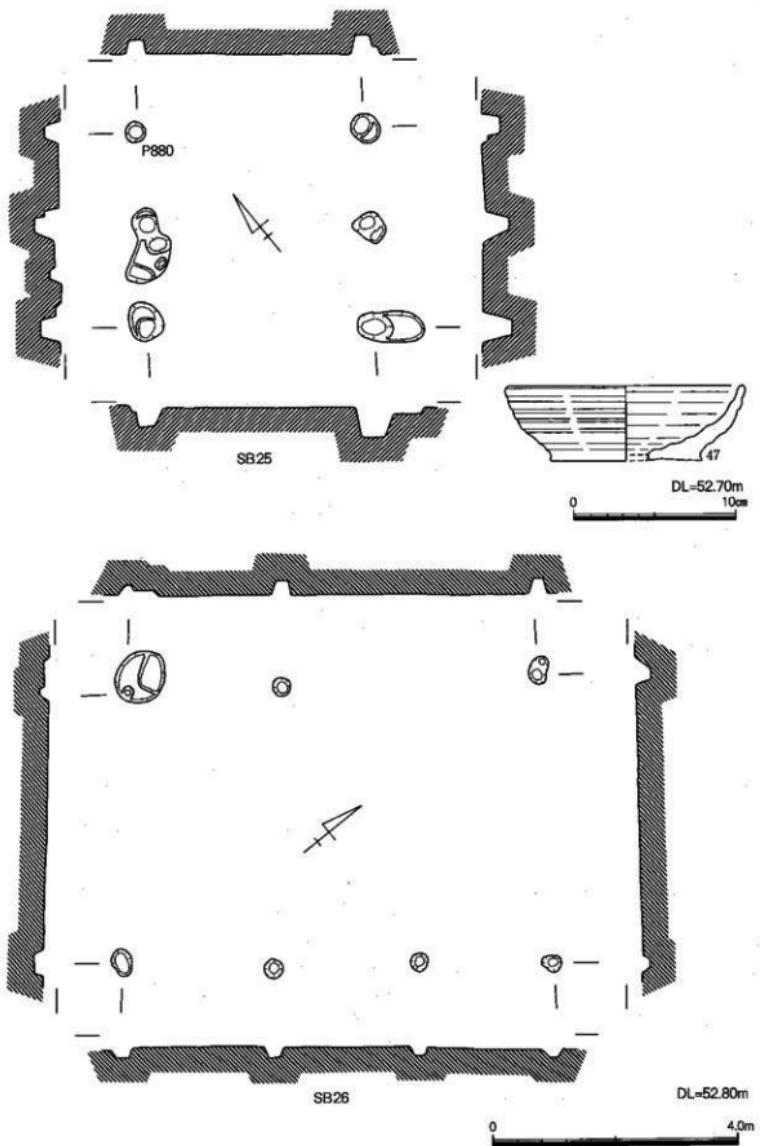


図31 SB 25・26 平・断面図及び SB 25出土遺物

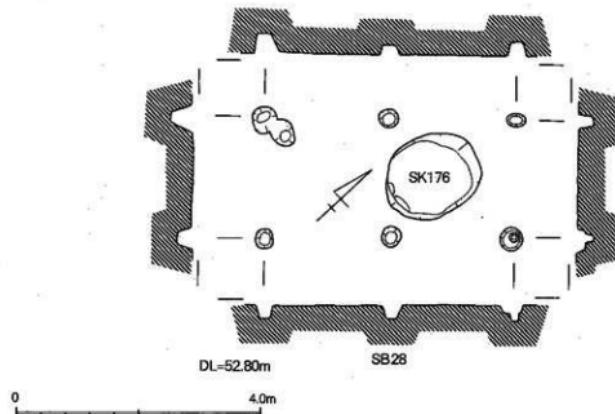
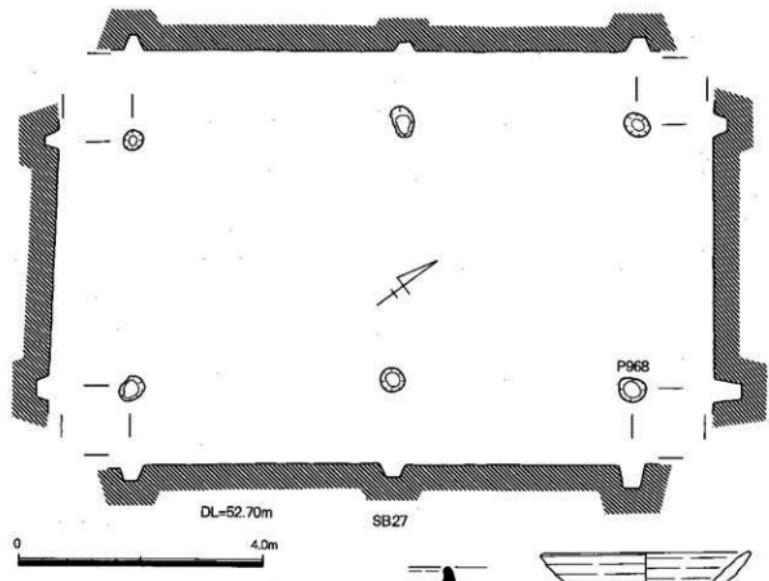


図32 SB 27・28 平・断面図及び SB 27出土遺物

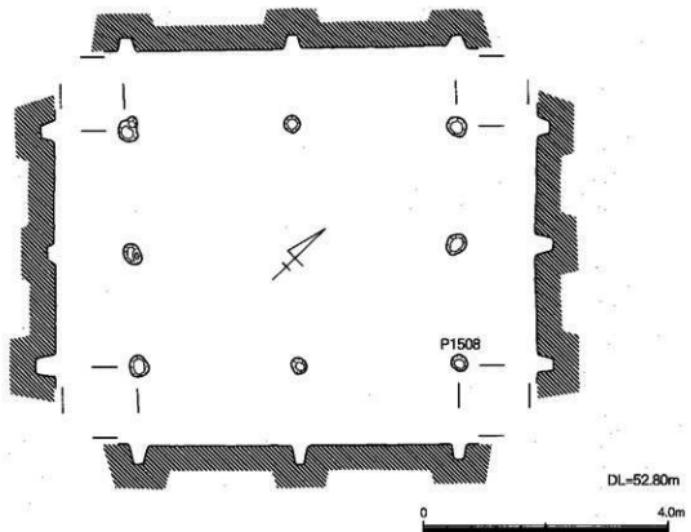


図33 SB 29 平・断面図

SB-30(図34)

調査区北端部に位置する。梁間2間(6.25~6.41m)、桁行4間(9.04~9.33m)の東西棟建物である。北側の柱穴が一部未検出である。建物中央部に根石が残存する間仕切り柱が立つ。棟方向はN-48°-W、面積は59.81m²となっている。柱間寸法は、梁(南北)が2.7~3.55m、桁行(東西)が1.58~2.64mである。柱穴は円形で、径18~53cm、深さ12~61cmである。遺物は、柱穴から土師質土器細片が16点出土している。

SB-31(図35)

SB 8・9・26・27・28と重なりあっている。梁間2間(2.67~2.73m)、桁行2間(4.61~4.62m)の東西棟建物である。棟方向はN-47°-W、面積は12.34m²である。柱間寸法は、梁(南北)1.24~1.43m、桁行(東西)1.47~3.15mとなっている。桁行西側の柱間寸法が、東側の約2分の1と短い。また、北から1間目の柱通りは3間となっている。検出された柱穴構成からすると、この柱通りの性格については不明と言わざるを得ない。柱穴については、北東隅及びその西の柱穴に明らかに柱痕跡が焼土として残存していた。それからすると、柱径は両方共約9cmである。南西隅からは根石が検出されている。円形を呈する柱穴の径は29~70cm、深さ19~50cmである。遺物は、柱穴から土師質土器細片が10点出土している。

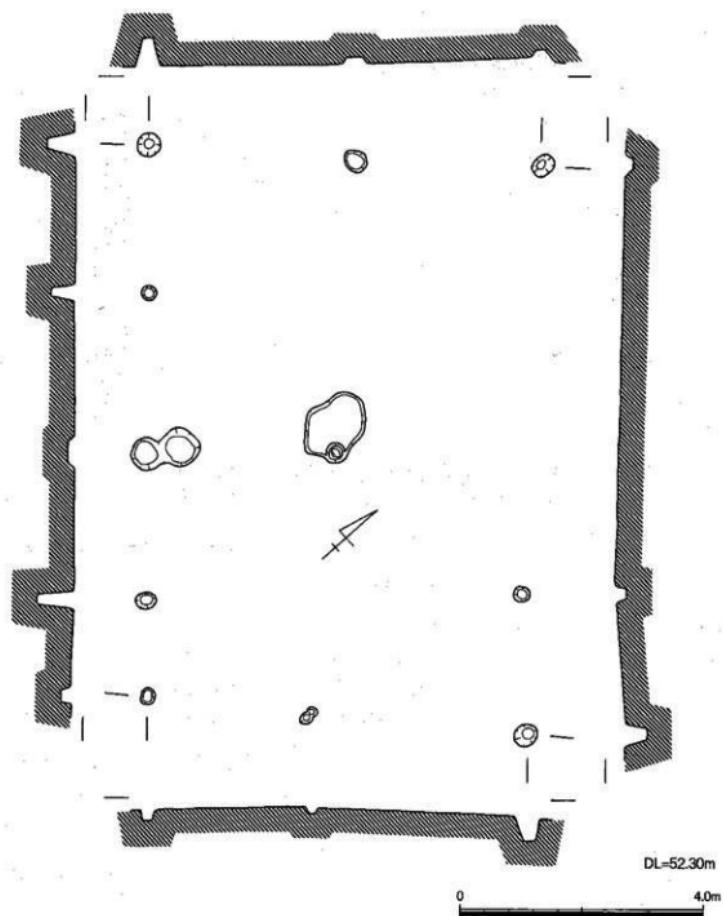


図34 SB 30 平・断面図

(2) 土 坑

SK-9 (図36)

I 10グリッドに位置している。直径約1mのほぼ円形の平面プランをもつ。深さ約20cm、底はフラットで断面逆台形を呈す。埋土は灰褐色粘質土である。人骨と歯が出土した。人骨は土と同化状態が進み取り上げは困難であった。

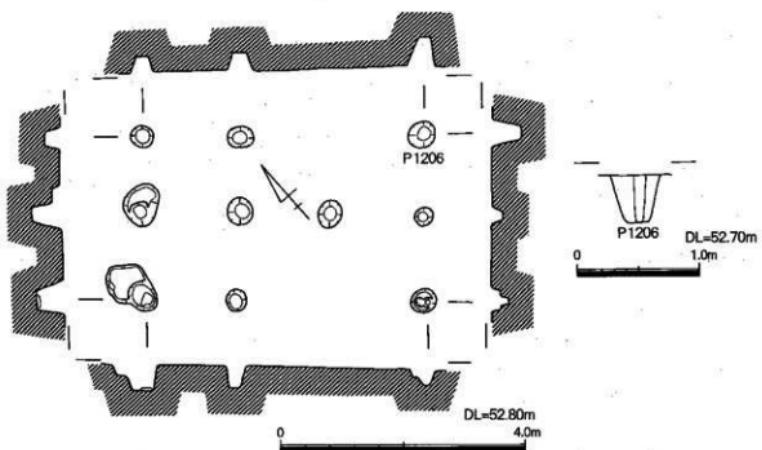


図35 SB 31 平・断面図及び Pit 1206断面図

出土遺物 (50~52)

遺物は土師質土器が14点出土している。50~52は土師質土器の杯である。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。50はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。丁寧なナデが施される。胎土は緻密で細砂粒を含み、色調は、白色系を呈する。51はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。

内外面ともナデによる段が認められる。52はベタ底から斜上外方に大きく開く。丁寧なナデ調整が施される。胎土は緻密で細砂粒を含み、色調は、白色系を呈する。器壁は比較的薄い。

SK-10 (図37)

SK 9の北西方向に近接している。直径約70cmで円形を呈す。深さ22cm前後、底はフラットで断面逆台形を呈す。埋土は灰黄褐色粘質土である。

出土遺物 (53)

53は内野山窯産の皿である。外方に立ち上がりながら内湾する。逆台形状の低い高台が付く。施釉は、銅緑釉がツケガケされ、外面は高台脇まで施釉される。内面見込みは蛇の目状の釉剥ぎが施され、三日月状の砂目が4ヶ所認められる。高台疊付に砂目痕が付着する。

SK-11 (図37)

SK 10の北に隣接している。直径約80cmの円形を呈す。ほぼフラットな底部までの深さ約80cmで西側に平坦な段を有す。埋土は灰黄褐色粘質土である。

出土遺物 (54・55)

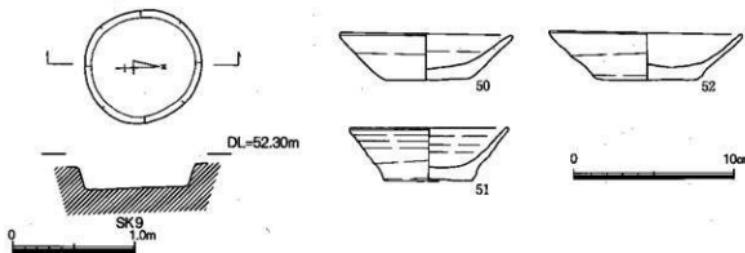


図36 SK 9 平・断面図及び出土遺物

54は内野山窯産の皿である。外方に立ち上がりながら内湾する。逆台形状の低い高台が付く。施釉は、銅緑釉がツケガケされ、外面は高台脇まで施釉される。内面見込みは蛇の目状の釉剥ぎが施され、三日月状の砂目が4ヶ所認められる。高台疊付に砂目痕が付着する。55は小杯である。断面

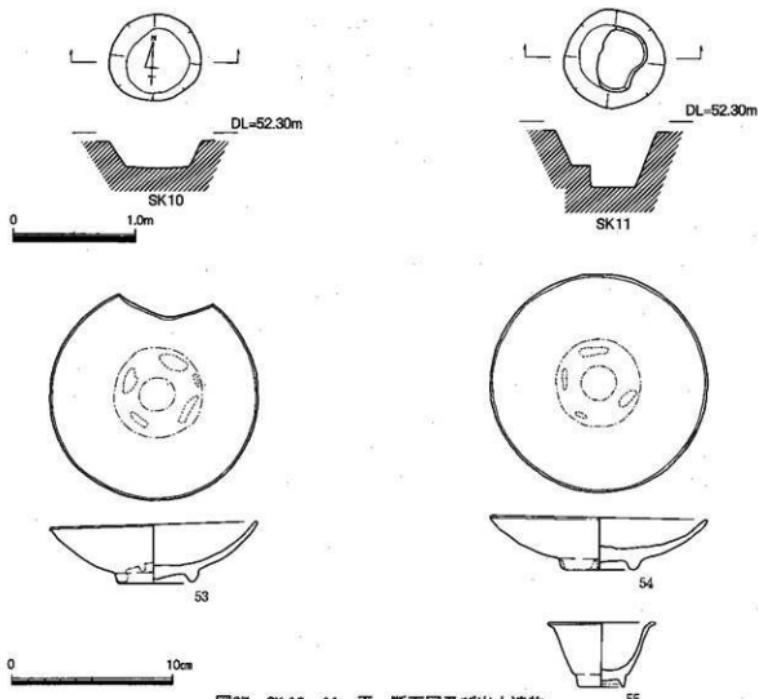


図37 SK 10・11 平・断面図及び出土遺物

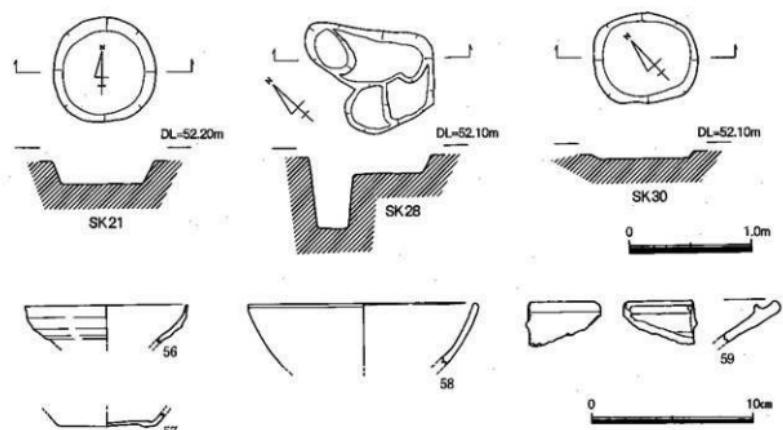


図38 SK 21・28・30 平・断面図及び出土遺物

三角形の低い高台から上方に立ち上がり、口縁部は外反する。灰白色を呈した灰釉が全面施釉され、高台内面から疊付の釉は削り取る。

SK-21 (図38)

J 17グリッドに位置する。直径約85cmの円形を呈する。断面逆台形で深さ約20cm、底面はフラットである。埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土である。

出土遺物 (56・57)

遺物は、土師質土器 6 点が出土している。56・57は土師質土器の杯である。56は体部上半から口縁部にかけ内湾し、口縁端部はつよいヨコナデにより尖る。ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。内面は丁寧なナデが施されるが、外面はナデによる段が残る。胎土は緻密で、色調は、白色系を呈する。57は底部片である。外底部は糸切り後、ヘラ状の圧痕が認められる。内底部は指頭によるナデ痕が認められる。胎土は緻密で硬質である。色調は白色系を呈し、器壁は薄い。56と同一個体の可能性がある。

SK-28 (図38)

L 19グリッドに位置する。不整形の土坑で、最大長約1.2m、張り出したような北部隅に深さ約80cmのピットを有する。埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土である。

出土遺物 (58)

58は、青磁碗である。内湾し、口縁部は直立する。内外面ともに無文であり、全体的に透明感のある釉が薄く施釉され、貯入がみとめられる。E類碗（上田分類）である。

SK-30 (図38)

L19グリッド、SK 28の南西に位置する。長軸85cm、短軸約70cmの梢円形を呈する浅い皿状の土坑である。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物 (59)

遺物は、土師質土器 2点と瀬戸・美濃系陶器が 1点出土している。59は瀬戸産の大皿の口縁部片である。口縁内面に鋭い稜を有し、端部は面を成す。釉は内面では口縁部下まで灰釉が施釉され、下部は露胎である。卸目付大皿の口縁部片と考えられ、古瀬戸後期新段階（藤澤編年）の所産のものである。

SK-44 (図39)

調査区東端部 V20グリッドに位置する。長軸1.4m、短軸1.2mの卵型プランの中に 2個のピットが存在する。うち、1個には根石が確認できる。底面はほぼ平らで深さ約10cmと浅い。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物 (60~62)

遺物は、土師質土器10点が出土している。60~62は土師質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。60は小杯と呼べるタイプの底部片である。ベタ底から外反する。器壁が薄い。61・62は杯である。61はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。胎土は緻密で硬質である。62は口縁部片であり、内湾気味の体部から外反する。胎土は緻密で、色調は白色系を呈する。

SK-45 (図40)

SK 44の北側、V19グリッドの約半分の面積を占める大型の土坑である。長軸4.15m、短軸側の最長寸法は2.9m余りの不整形を呈する。中に 5個のピットを有する。深さは10cm内外と浅く底面は平らになっている。埋土は灰褐色粘質土に炭化物及び焼土が混入する。

出土遺物 (63~66)

遺物は、土師質土器74点、備前焼窯片 1点、砥石 1点、貿易陶磁器 1点が出土している。63~65は土師質土器である。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。63は小皿であり、ベタ底から斜上外方に外反する。内底部にはロクロ目が残り、内底中央部が盛り上がる。胎土は緻密で硬質である。64・65は杯である。64はベタ底から斜上外方に立ち上がる。外底部に回転糸切り後、ハケ状工具でナデた痕が認められる。65はベタ底から外反する。内底部にロクロ目が残る。66は中国産の天目茶碗である。高台部は欠損する。釉は、外面体部下半まで厚く施釉され、一部釉が溜る。下半以下は露胎である。釉調は、黒褐色を呈し、禾目状になる。

SK-46 (図41)

SK 45の東側に近接している。長軸側約90cm、短軸側約70cm程度の不整梢円形を呈する。中央部深さが約30cm内外で、その周囲が段状になっており深さ10cmと浅い。埋土は灰褐色粘質土である。

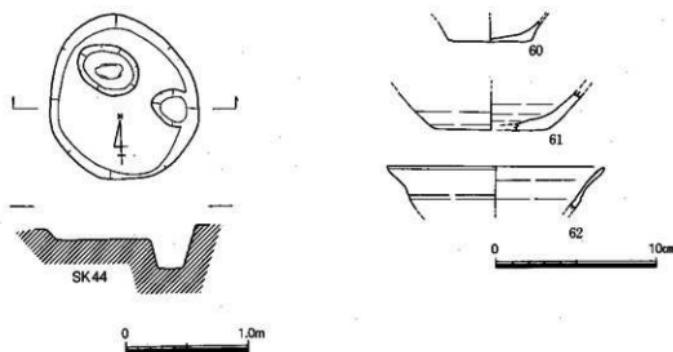


図39 SK 44 平・断面図及び出土遺物

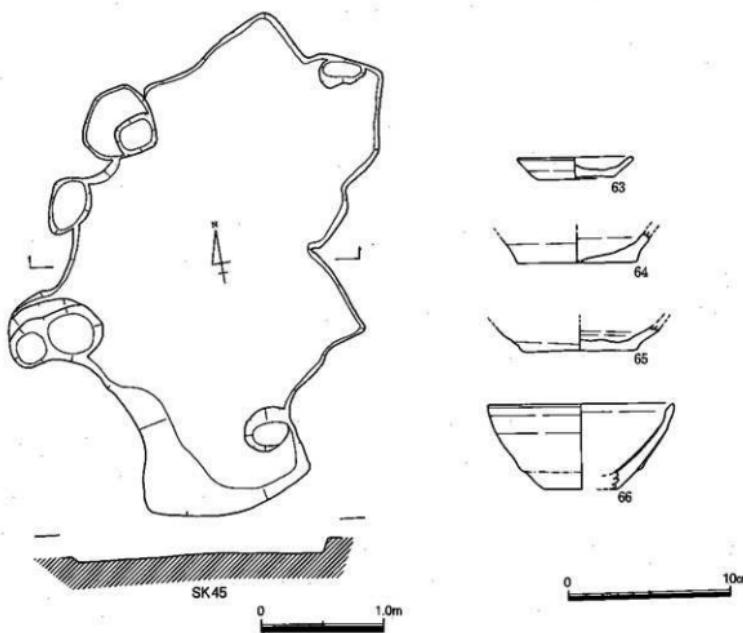


図40 SK 45 平・断面図及び出土遺物

出土遺物（67～69）

遺物は、土師質土器11点、瓦器碗1点、備前焼播鉢1点、東播系須恵器1点、砥石1点が出土している。67は備前焼播鉢片である。口縁端部は内傾する面を成す。ヨコナデが施され、全体的に暗灰色を呈し須恵器質である。68は砥石である。全長9.83cm、幅3.46cm、厚み2.35cmを測り、長方形状を呈する。砂岩製であり、仕上砥と考えられる。69は東播系の捏鉢である。口縁端部は玉縁状を呈する。全体的にヨコナデが施され、特に、口縁部はつよいヨコナデにより、端部が上向く。内面体部下半は使用により摩耗が著しい。軟質である。

SK-47（図41）

SK 45の西側に隣接する不整形の土坑である。長軸2.5m、短軸1.5mと大型であり、断面は浅い皿状を呈する。内部に4個のピットを有する。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（70～76）

遺物は、土師質土器29点、貿易陶磁器2点が出土している。貿易陶磁器は白磁では口禿げの皿が1点、合子1点出土している。70～76は土師質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。70～72は小皿である。70はベタ底から斜上外方に直線的に短く立ち上がる。71はベタ底から短く内湾し、口縁端部は尖り気味になる。内面はロクロ目が残る。胎土中に3～5mm大の砾を含む。72はベタ底から上方に短くつまみ上げ、口縁端部は尖る。73・76は皿である。73はベタ底からやや内湾気味に立ち上がる。内面はナデによる段が残る。器高が2.6cmと低い。74・75は杯である。74はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸味を持ち、箱形を呈する。内面はナデによる段が顕著である。75はベタ底からやや段を持ちながら立ち上がり、体部は内湾する。内外面ともにナデによる段が顕著である。76はベタ底からやや内湾気味に立ち上がる。内面はナデによる段が残る。73と同じタイプの皿である。

SK-67・68（図41）

X16・17グリッドにまたがるところに位置する。2基の土坑が切り合っていると思われるが、平面プラン及び埋土のどちらでも確認できない。長軸1.6m、短軸1.05mで、平面形は不整形である。南側は深さ約40cmで、立ち上がりは北側に比べてゆるやかになっている。北側底部はフラットで、壁の立ち上がりはきつい。埋土は灰褐色粘質土一層である。

出土遺物（77～80）

遺物は土師質土器8点、砥石1点出土している。77～80は土師質土器である。77・78は小皿であり、ロクロ成形、回転ナデ調整、底部切り離しは糸切りである。ベタ底から短く直立し、口縁端部は尖る。内底部周縁及び見込みは凹む。色調は白色系を呈する。79・80は皿である。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。内底部周縁は凹み、見込みは隆起する。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。内面は丁寧にナデ、外面はナデによる段が顕著である。

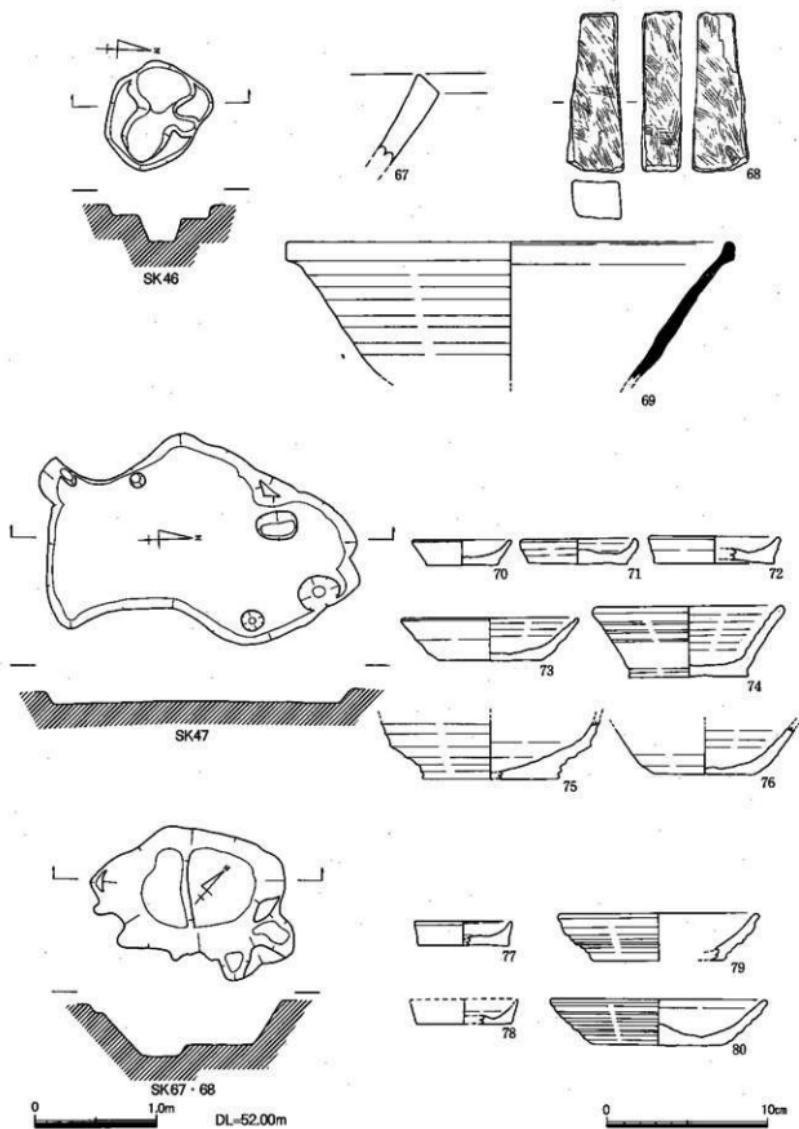


図41 SK 46・47・67・68 平・断面図及び出土遺物

SK-80 (図42)

Z18グリッドに位置する。SB 12との切り合いは不明である。長軸1.35m、短軸0.8mの楕円形を呈する。土坑内部はピットと切り合っている可能性があるが、プラン及び埋土では確認できない。南側は浅く皿状を呈し、中央部に最深部である柱穴状の落ち込みがあり、深さ40cmを測る。

出土遺物 (81)

81は備前焼の擂鉢である。口縁部は上方に拡張され、端部は丸味を帯びる。胎土中には5~8mmの大の角礫を含む（間壁IV b期）。

SK-94 (図42)

Y16・Z16グリッドにかけて位置する。長軸1.5m、短軸0.8mの楕円形の西側が不整形となっている。土坑内部にあるピットと切り合っている可能性があるが、プラン及び埋土では確認できない。東側の楕円形部分の底部はフラットで、深さ約8cmと浅い皿状を呈す。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物 (82・83)

遺物は、土師質土器3点が出土している。82・83は土師質土器である。82は小皿であり、ベタ底から上方に直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。83は皿でありベタ底から斜向外方に開く。内底周縁部は凹む。82・83ともロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。

SK-117 (図42)

P13・14、Q13・14グリッドにまたがる大型の土坑である。北東側は直線的で、北西から南東にかけて不整円形を呈し、円形を切ったような平面プランである。円の直径にあたる長軸約4.7m、短軸約4mである。底部は尖底状となっており、平坦部をもたない。最深部までの深さは約60cmである。埋土は灰黄褐色粘質土である。なお、東側隣の小ピットのある平坦な底部をもつ部分は本土坑と切り合い関係にあるが、時期的前後関係は不明である。この平坦な底部には、炭化物と灰が船底状に堆積していた。

出土遺物 (84~87)

遺物は、土師質土器138点、貿易陶磁器3点、鉄器1点が出土している。84は白色系を呈した土師質土器の皿である。斜上外方に大きく開き、口縁端部はヨコナデにより凹む。85は龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗（上田B1類）である。体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。内外面ともオリーブ灰色を呈する釉が施釉され、口縁端部は釉が厚い。外面には片影りによる鎬蓮弁文が施されるが鎬の稭はやや不明瞭である。86も内外面無文の青磁碗（上田E類）である。内湾し、口縁部は直立する。二次焼成により被熱し、釉の発色が黄味を帯び、細かい貫入が認められる。87も青磁碗の底部である。断面長方形状の高台が付く。釉は高台外面まで施釉、疊付を含めて外底は無釉である。内面見込みには印花文が施される。全体的に灰味のある透明感の強い釉が薄く施釉される。

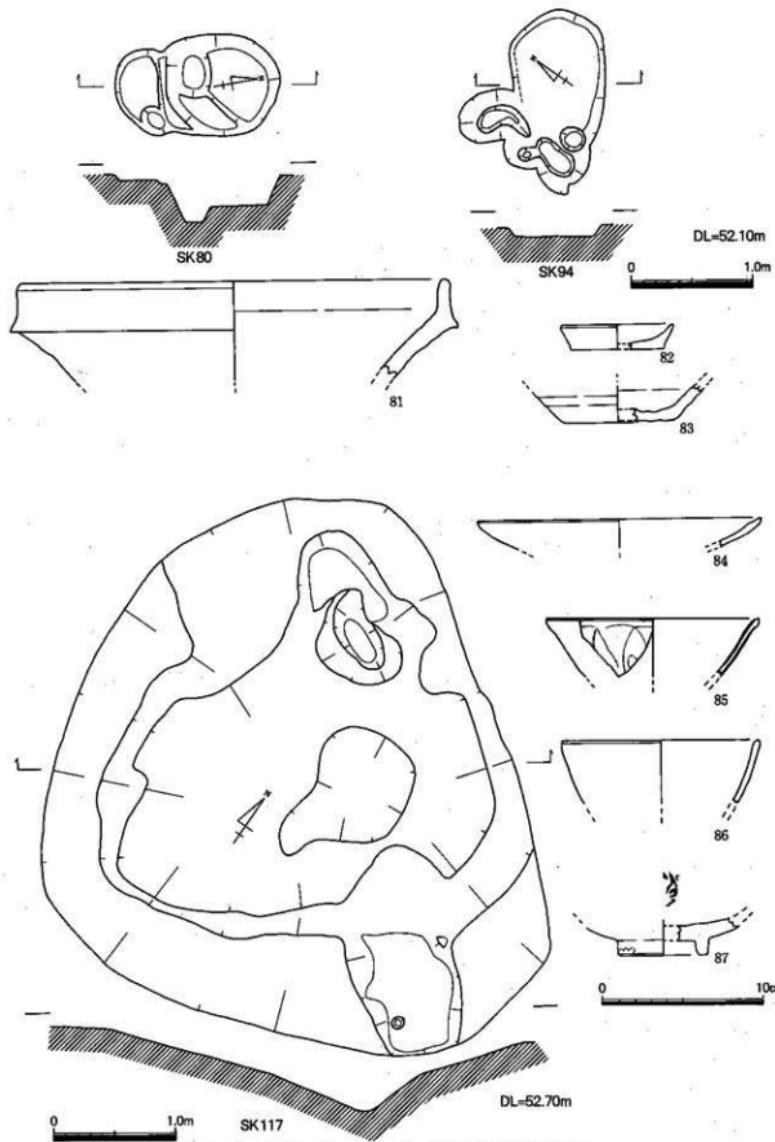


図42 SK 80・94・117 平・断面図及び出土遺物

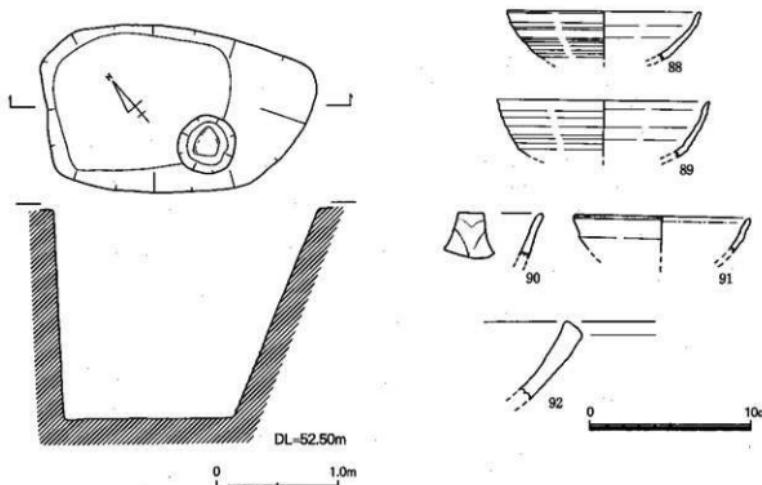


図43 SK 122 平・断面図及び出土遺物

SK-122 (図43)

S 12及び13グリッドにまたがる。SB 3の柱穴に切られているので、時期的にSB 3より前に形成された土坑である。平面形は不整椭円形を呈す。長軸2.2m、短軸1.4m、底部はフラットで深さ約1.75mと深い。西側の立ち上がりは垂直に近く、東側はやや緩やかとなっており、断面逆台形状である。埋土は粘性が強い黒褐色土であり、トイレ遺構の可能性がある。

出土遺物 (88~92)

遺物は、土師質土器8点、貿易陶磁器2点、備前焼1点が出土している。88・89は土師質土器である。ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。内湾しながら立ち上がり、口唇部はつよいヨコナデにより尖る。器壁は薄く、色調は褐色系を呈する。胎土中に角閃石、チャートが認められ、硬質である。90は龍泉窯系青磁の鎧蓮弁文碗（上田B 1類）である。口縁部はやや外反する。外面に片彫りによる鎧蓮弁文が認められる。91は口禿げの白磁皿（森田A群）である。口縁部はヨコナデにより、やや外反気味である。口縁端部内面は釉を削り取り、外面は口錆びが認められる。92は備前焼擂鉢の口縁部片である。端部は外傾する面を成す。間壁Ⅲ期にあたる。

SK-144・145・146・147 (図44)

O 12からP 13グリッドにかけて位置する北西から南東方向に伸びる細長い土坑であるが、いくつかの土坑が切り合っており、その前後関係は不明である。長軸が5.5m、最狭部約1mで、深さはSK 144-20cm、SK 145-11cm、SK 146-25cm、SK 147-20cmとなっている。各土坑の底部はほぼフラットで、断面逆台形状を呈するものが多い。埋土は灰黄褐色粘質土でしまりがない。

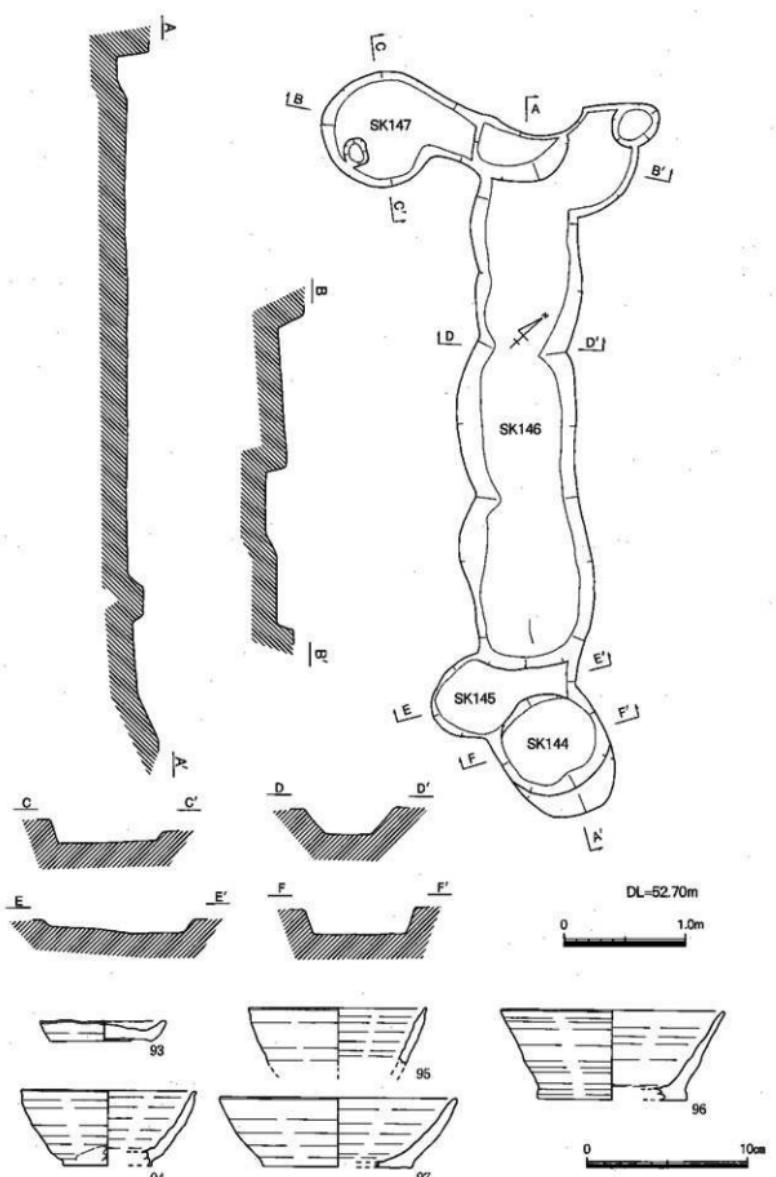


図44 SK 144～147 平・断面図及び出土遺物

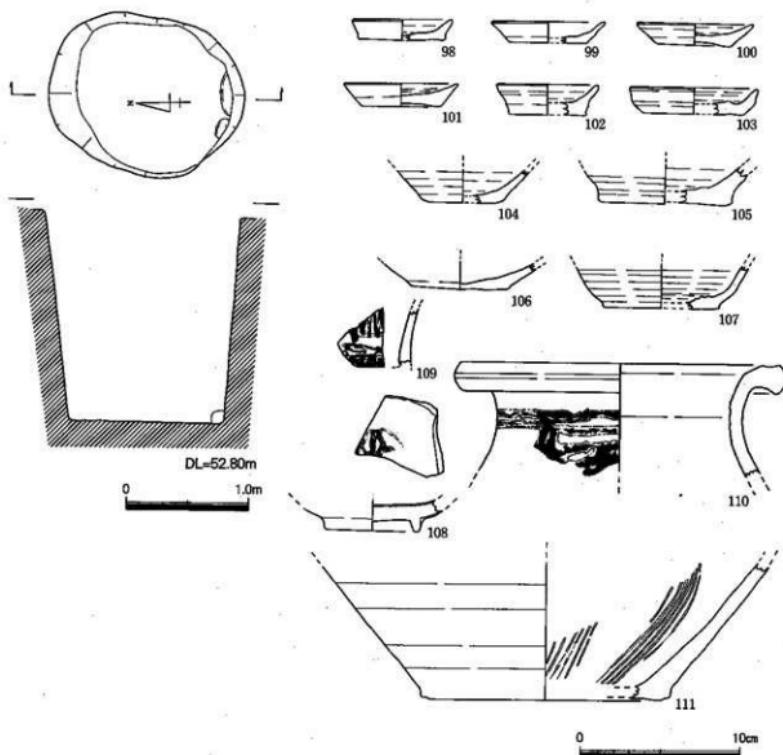


図45 SK 176 平・断面図及び出土遺物

出土遺物（93~97）

遺物は、土師質土器61点、貿易陶磁器（青磁）2点、鉄器1点が出土している。93~97は土師質土器である。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。93は小皿である。ベタ底から斜向外方に短く立ち上がる。内底部見込みは盛り上がる。底部切り離しは回転糸切りである。94~97は杯である。94は円盤状の底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は尖る。内外面ともナデによる段が顕著である。色調は褐色系を呈し、胎土は緻密で硬質である。95の口縁端部は尖る。色調は褐色系を呈し、胎土は緻密で硬質である。94と同じタイプである。96は底部にやや段を持ちながら、外方に直線的に立ち上がる。口縁部に向って、器壁が薄くなり、口縁端部は尖る。内底部は粘土紐巻き上げの痕跡が認められ、粘土紐のつなぎ目が同心円状に沈線状に凹む。外底部に回転糸切り痕が認められる。97はベタ底から内湾して立ち上がる。底部は薄い。外底部に回転糸切り痕が認められる。

SK-176 (図45)

SB 28の内部にあり、SB 28の性格について類推させるようなところに位置する。長軸1.6m、短軸1.3mの楕円形のプランをもつ。断面は逆台形状を呈し、東側はほぼ垂直に立ち上がる。西側はやや緩やかとなる。底部まで1.7mと深く、底部に河原石が2個残る。埋土は暗灰黄褐色粘質土で、肉眼では一層しか確認できない。埋土上部中には自然石が放り込まれており、下部は粘性が強く、最下層には炭化物が多い。遺物は上層から下層までまんべんなく確認できる。この土坑については、平面プラン、断面、埋土ともSK 122との類似が多く見られ、やはりトイレ遺構の可能性を指摘しておきたい。

出土遺物（98～111）

遺物は、土師質土器158点、貿易陶磁器7点、備前焼臺片3点、擂鉢2点、鉄器1点が出土している。98～107は土師質土器である。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。98～103は小皿である。98はベタ底から直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。色調は白色系を呈し、硬質である。99～101はベタ底から外反する。99の色調は白色系を呈し、器壁は薄く硬質である。丁寧なナデ調整が施される。100・101は99に比べ底部器壁が厚く口縁端部は尖る。ナデによる段が残る。102は器壁の厚い底部から斜上外方に短く立ち上がる。内外面ともナデによる段が顕著である。103はベタ底から上方に短く立ち上がる。ナデによる段が顕著である。内底周縁部は凹む。104～107は杯である。104はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。105は厚みのある底部から段を持ちながら立ち上がる。ナデによる段が顕著である。106はベタ底からわずかに段を持ちながら外方に大きく開く。107はベタ底の底部からわずかに段を持ちながら内湾気味に立ち上がる。内底部は粘土紐巻き上げの痕跡が認められ、粘土紐のつなぎ目が同心円状に沈線状に凹む。褐色系を呈し、硬質である。108は龍泉窯系の青磁碗である。断面長方形状の高台が付く。内面見込みに印花文が施される。釉は、灰オリーブを呈した釉が高台内面まで施釉される。胎土は明灰白色を呈する。109は青花である。下部は蓮弁文くずれ、上部は芭蕉葉文らしき模様が施される。杯か猪口の体部下半部であると考えられる。110は掲釉壺である。頸部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁部は横向きに外反する。壺部はナデにより玉縁状に肥厚する。胎土は赤褐灰色を呈し、黒色の砂粒を含む。タイのノイ川窯系の四耳壺と考えられる。111は備前の擂鉢である。内面に5条単位の摺り目が認められるが、使用のため摩耗が著しい。

SK-202 (図46・47)

調査区北端部、O3グリッド附近に位置する。東西方向に長軸をもつやや不整な長方形の土坑である。長軸2.5m、短軸1.6m、断面は東側が深く尖底状の最深部まで1.2mある。浅い西側との境には自然石が残存するが、その配置状況から人為的に左右を区画する石とは考えにくい。埋土と同時期に投棄されたものであろう。西側底部は平坦で、深さは55cmである。埋土は上層が灰黄褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。この土坑は廃棄土坑の性格を有すると考えられる。

出土遺物（112～124）

遺物は、土師質土器171点、貿易陶磁器5点、瀬戸・美濃系陶器2点、備前焼6点、土師質鍋1点、

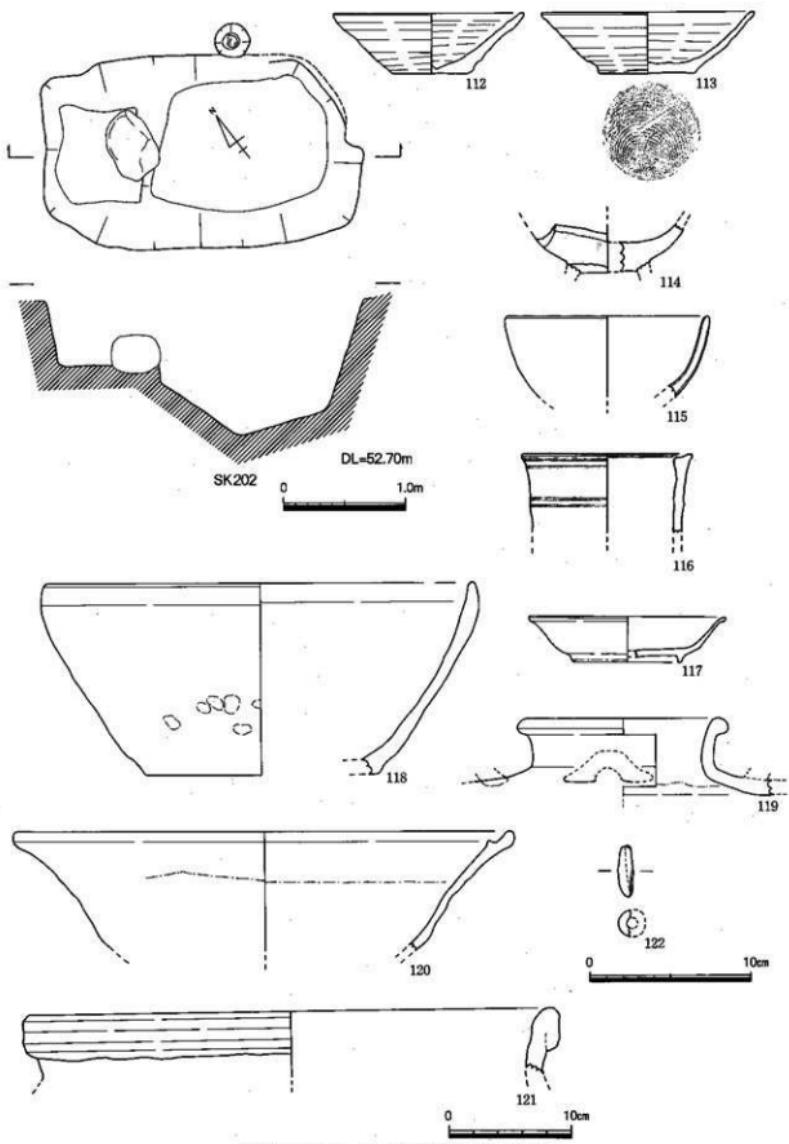


図46 SK 202 平・断面図及び出土遺物

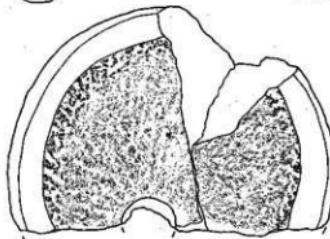
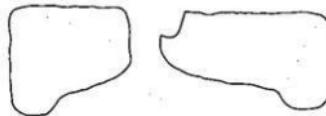
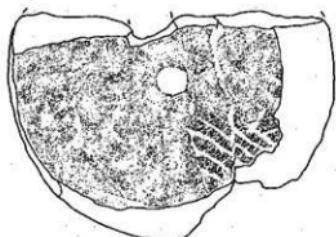
鉄器1点、石臼2点が出土している。112・113は土師質土器の杯である。ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。底部切り離しは糸切りである。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反しながら上方に引き上げる。内外面ともにナデによる段が残る。軟質である。ベタ底からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内外面ともにナデによる段が残り、器壁は薄い。色調は褐色系を呈し、胎土は緻密で硬質である。114~116は青磁である。114・115は龍泉窯系の青磁碗である。114は高台部が欠損している。厚みのある底部から内湾する。外面に丸彫りによる蓮弁文が施される。115は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。内外面とも無文である（上田E類）。116は香炉である。体部は筒状を呈し、外面体部中央が稜を持つ。口縁部は内外に拡張され上面は凹む。外面口縁部と体部中央部に2条づつ沈線が巡る。117は白磁の端反り皿である。低い高台から内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。高台疊付の軸は削り取り、砂目の付着は認められない。118は土師質の鉢である。斜上外方に立ち上がり、口縁部は僅かに内湾する。端部はヨコナデにより内面は凹む。外面体部下半には指頭圧痕が残る。119は褐釉四耳壺である。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反気味になる。口縁端部は玉縁状を呈する。体部は外方に開き、外面肩部の一部に把手が剥離した痕跡が認められる。胎土は暗灰色を呈し、0.5~1.2mm大の白色砂粒が目立つ。外面全体に黒褐釉が施釉される。120は瀬戸の折縁大皿である。体部上半から口縁部にかけて外反し、口縁端部は上方に折り曲げる。内外面とも体部上半から口縁部にかけて施釉される。被焼し、色調は灰釉が白濁した発色を呈する（藤沢編年：古瀬戸後IV期新）。121は備前焼の甕である。口縁部は外側に折り曲げ、玉縁状を呈する。外面はヨコナデにより、平坦な面を成す。122は土錘である。全長3.0cm、全幅0.9cm、全厚0.5cm、孔径0.6cmを測り、重量は3.0gである。管状を呈する。123は粉挽き白の上臼である。上縁幅は2.0cmで、くぼみの深さは1.8cmを測る。供給口の孔径は4.3cm、芯棒受け部は2.4cmを測り、摺り合わせ部には目がない。砂岩製である。124は茶臼の下臼である。受皿外面全体にハツリによる整形痕が残っている。受皿内部はミガキがかけられ丁寧な作りである。2/3以上欠損しており、全体の形状は不明である。

SK-203（図48・49）

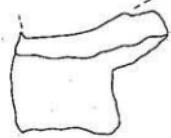
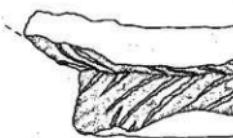
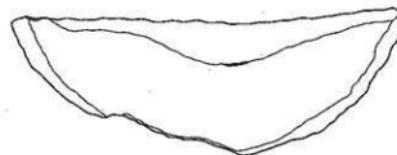
SK 202の北西に位置し、調査区外にも統一しているため全容は不明である。確認長軸方向3.4m、短軸方向2.1mで断面浅い皿状の土坑である。内部と外縁部にピットを有する。土師質土器が一括廃棄された状態で出土している。

出土遺物（125~175）

遺物は、土師質土器2139点、貿易陶磁器3点、瀬戸・美濃系陶器4点、東播系須恵器2点、備前焼甕片9点、鉄器13点、銅鏡1点が出土している。125~172は土師質土器である。125~143は小皿であり、ロクロ成形のもの125~138と、手づくねのもの139~143がある。ロクロ成形のものは、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りである。125~129は内湾するタイプである。125~127は丁寧なナデ調整が施され、器壁は薄く、硬質である。内底見込みが凹むものが多い。130~134は外反するタイプである。130は内面にタールの付着が認められる。131はナデ調整が施されるが、内底の一部に指頭の痕跡が認められる。硬質である。132・133は口径7.7cm以上を測り、他に比べ法



123



124

0 10cm

図47 SK 202 出土遺物 (石臼)

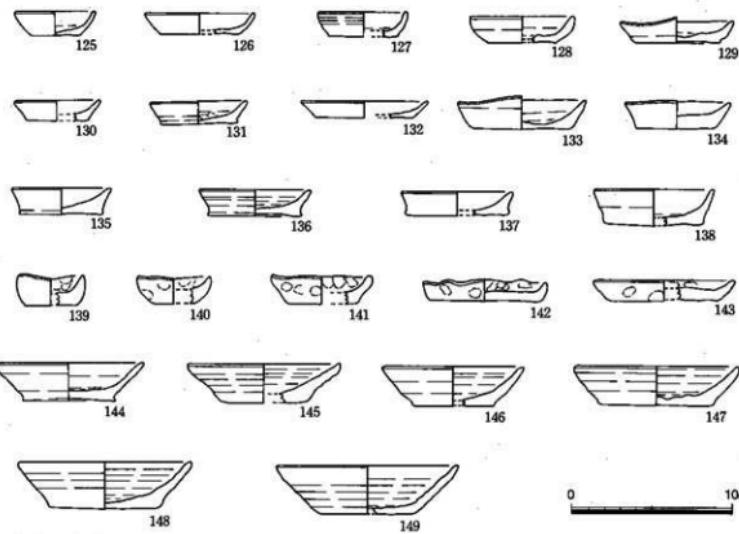
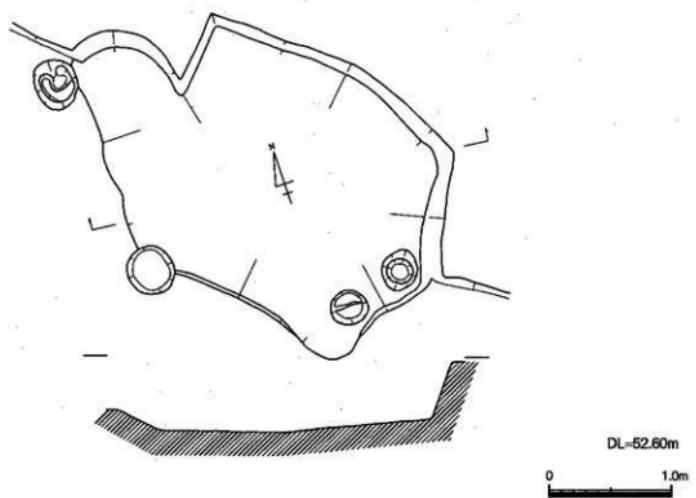


図48 SK 203 平・断面図及び出土遺物

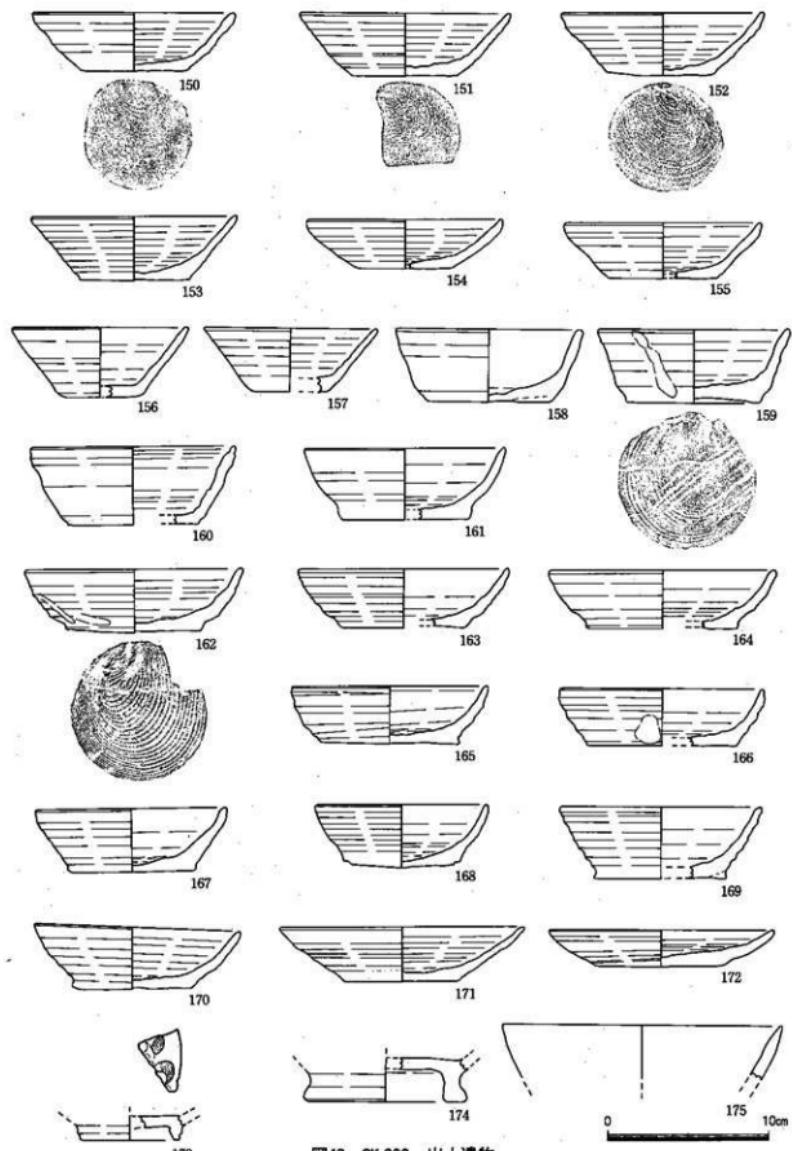


図49 SK 203 出土遺物

量が大きい。133の底部は薄く、特に内底周縁部は凹む。134は厚みのある底部で口縁部までの立ち上がりは短い。135～138は直立するタイプである。135～137は内底見込みから口縁にかけて、つまり上げるようにナデる。口縁端部は尖る。138は他に比べ器高が高い。139～143は手づくねである。端部を上方に折り曲げる。法量が小さいタイプ（139・140）、中タイプ（141）、大きいタイプ（142・143）がある。色調は橙色を呈する。144～171は杯である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。144～149は法量が小さく小杯である。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。145は器壁がやや厚く、口縁端部は、やや上向く。内外面ともにナデによる段が顕著である。146は内底部から体部中位にかけては被熱により赤褐色に変色する。147～149は、144～146に比べ、法量が若干大きい。内面のナデによる段をそのまま残すタイプのものが多い。147は内底部のロクロ目が顕著である。149は全体的に器壁が薄く、摩耗が著しい。色調は白色系を呈する。150～153は器高が3.6～4.0cmと高く、口径は12.0cm前後を測る。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は丸まる。内外面ともナデによる段が顕著である。底部切り離しは比較的高速の回転糸切りによる。154・155は口縁端部が上向くタイプである。器高が低いタイプ（154）と、高いタイプ（155）がある。色調は褐色系を呈する。ベタ底から外反して立ち上がり、口縁端部はつまり上げ、上向く。155は体部上半から口縁部にかけ内湾気味になる。156・157は器高が高く、ラッパ形を呈するタイプである。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。158～160は器高が高く、箱形を呈する。158は底部に粘土紐巻き上げの痕跡が認められる。内底部凹む。159はベタ底からやや丸味を持って立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面ともナデによる段が顕著であり、外面の一部に下方から上方に向かって指頭でナデた痕跡が認められる。160は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。内面はナデによる段が顕著である。161～170はベタ底からやや段を持ちながら立ち上がり、内溝するタイプである。内外面ともにナデによる段が顕著である。171は他に比べ法量が大きい。器高3.4cmを測り、口径15.0cmを測る。ベタ底から斜上外方に大きく外反する。内外面ともにナデによる段が顕著である。172は、段皿である。ベタ底から斜上外方に大きく開く。内底部に粗いハケ状工具によるハケ目が認められる。外底周縁部は被熱し、赤っぽく変色する。173は青磁碗である。高台外面下部は面取りされ、沈線状の段が認められる。釉はオリーブ灰白色を呈した釉が高台外面まで薄くかかる。高台内面及び外底部は露胎。内面には木葉状の文様が認められる。174は瀬戸産の壺か花瓶の高台部分である。高台疊付部は外側に拡張され、平らな面を成す。藤澤編年古瀬戸中Ⅱ期。175は瀬戸産の灰釉平碗である。口縁端部は尖り気味に仕上げる。透明感のある灰味を帯びた釉が全面施釉される。

SK-217（図50）

Q11からR11グリッドにかけて位置する不整形の土坑である。最長寸法3.9m、最狭寸法1.5mで、最深部まで約15cmの浅い落ち込み状断面を有する。内部にピットが5個存在する。埋土は暗灰黄褐色土であった。

出土遺物（176～181）

遺物は、土師質土器63点、備前焼擂鉢1点、瓦3点、鉄器1点が出土している。176～180は土師

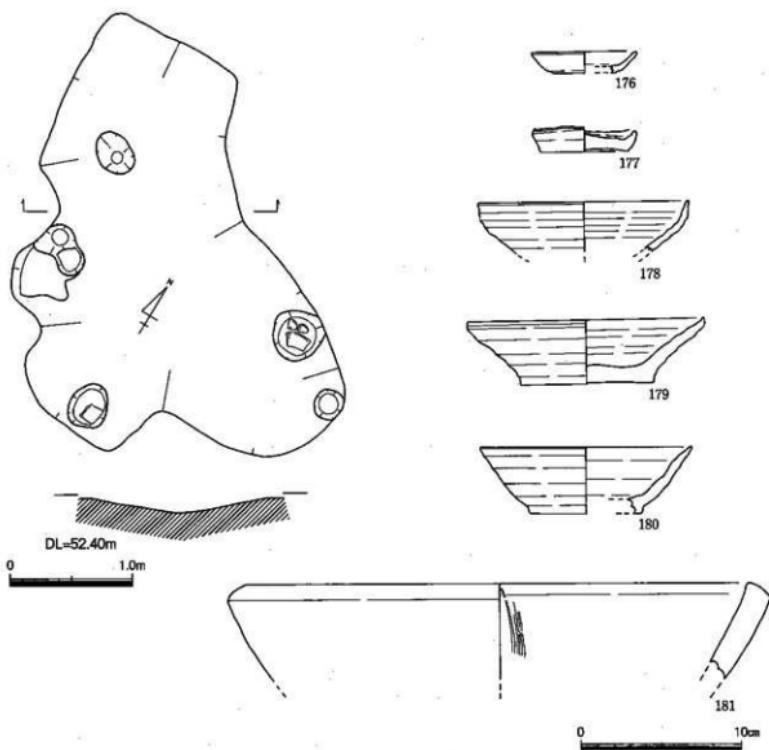


図50 SK 217 平・断面図及び出土遺物

質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施される。176・177は小皿であり、176はベタ底から短く外反する。内面にタールの付着が認められる。灯明皿として使用された可能性がある。177はベタ底から短く直立する。内底ロクロ目残る。178～180は杯である。178の口縁部は内湾する。内外面ともにナデによる段が顕著であり、口縁端部はつよいヨコナデにより尖る。器壁は薄い。179はベタ底から外反し、口縁端部はつよいヨコナデにより上方に屈曲、尖り気味に仕上げる。底部切り離しは静止糸切りである。180はベタ底から段を持ちながら内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、端部は尖る。181は僧前產擂鉢である。口縁端部は外傾する面を成す。胎土は赤褐色を呈し、白色の砂粒、角礫が認められる。間壁編年僧前Ⅲ期のものである。

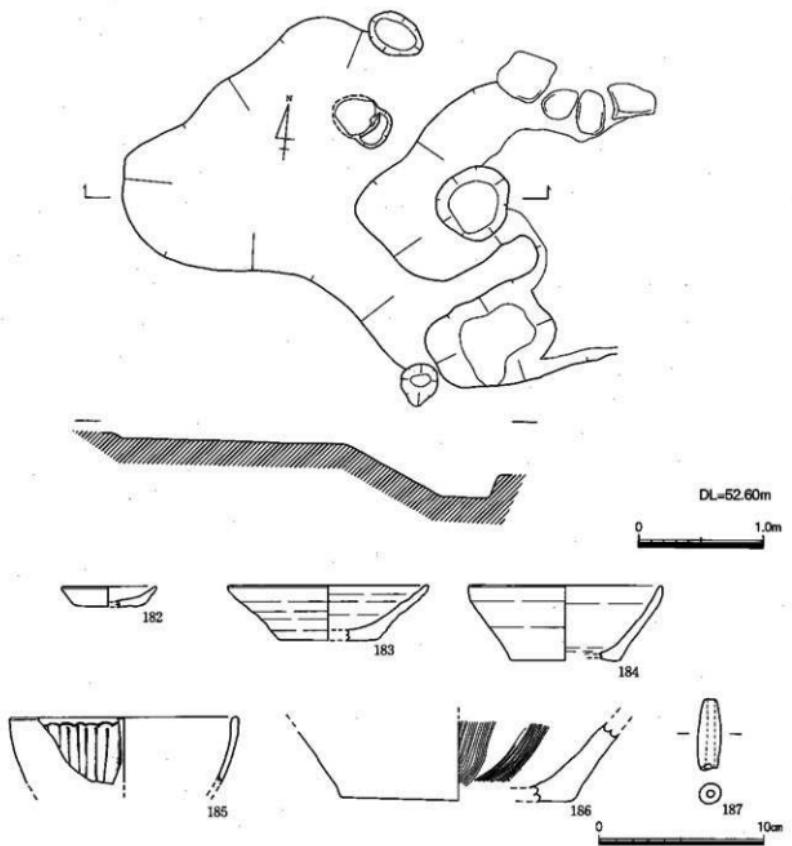
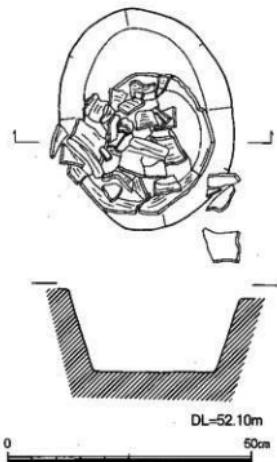


図51 SK 219 平・断面図及び出土遺物

SK-219 (図51)

P9グリッドの大部分を占める大型の落ち込み状土坑である。プランは不整形で、断面は西側が非常に浅い落ち込みから底部は平坦に続き、中央部から東側に向かって落ち込む。東端部はさらに石組みの溝（配石遺構1）に続いていることから、これと一体として捉えるべきかもしれない。東端部に2基の土坑状の穴があるが、これの最下部には砂が入っていた。このことからSK 219は、溝に続く池状の施設で、2基の土坑状の穴は配石の抜き取り穴の可能性があることを指摘しておきたい。埋土は、検出面に焼土及び炭化物が縮った状況で残存しており、その下に遺物を多く含むした灰黄褐色粘質土が堆積していた。

出土遺物 (182~187)



遺物は、土師質土器283点、貿易陶磁器4点、備前焼擂鉢1点、土鍤1点が出土している。182~184は土師質土器である。ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。182は小皿である。ベタ底から短く外反する。183は皿であり、ベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部中位～口縁部にかけて外反する。184は杯であり体部上半から口縁部にかけては内湾気味になり、口縁端部はつよいヨコナデにより尖り、上向く。丁寧なヨコナデによりナデの段は認められない。185は龍泉窯系の青磁碗（上田B4類）である。外面に細線刻蓮弁文が施される。透明感のあるオリーブ灰色を呈した釉が全面施釉される。186は備前焼擂鉢である。内面に7条を基調とした摺目が認められる。胎土には、白色砂粒、角礫は含まれない（間壁編年IV b期）。187は土鍤である。全長4.2cm、全幅1.4cm、全厚0.5cm、孔径0.45cmを測り、重量は7.0gである。管状を呈する。

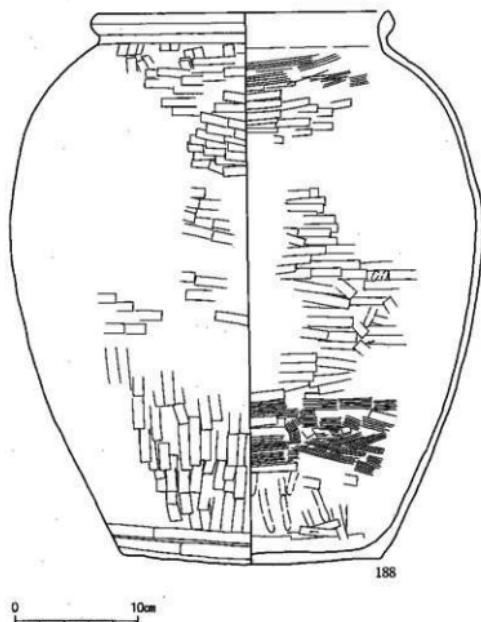


図52 SK 89 遺物出土状況・断面図及び出土遺物

SK-89 (図52)

調査区南東端 b17・18グリッドに位置する。椭円形を呈し長軸90cm、短軸70cmである。断面は逆台形状で、平坦な底部までの深さ約35cmである。備前焼大甕が据えられた状況で出土しているが、甕底部直下は地山層であった。

備前焼大甕 (188)

底部から丸味を持ちながら立ち上がり、上胴部が最大径48.5cmを測る。上胴部からは内傾し、口縁部は直立する。口縁部は外側に折り曲げ、玉縁状を呈する。端部は強いヨコナデにより、尖

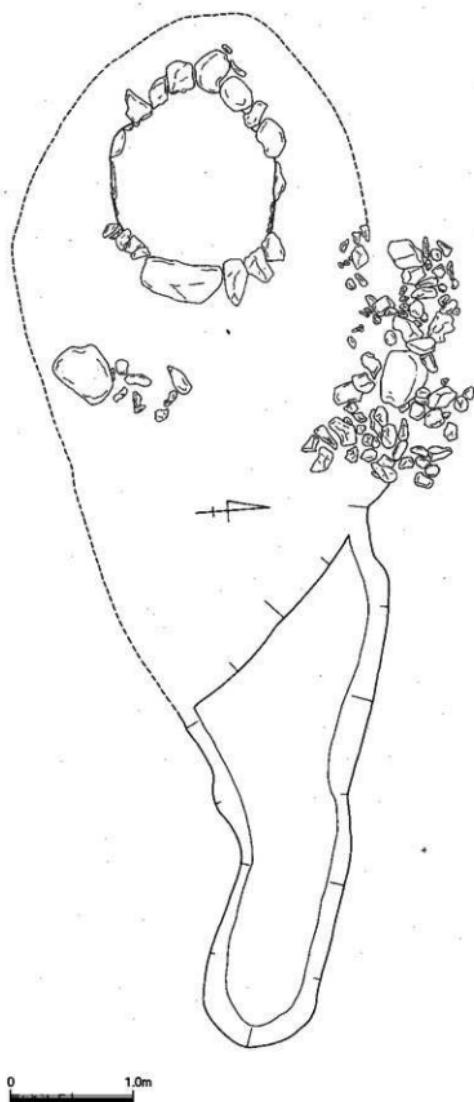


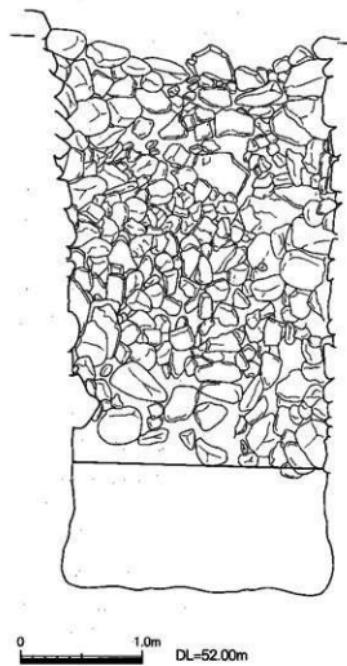
図53 SE 1 平面図

り気味になる。外面は底部はヨコ方向にヘラ状工具によるケズリが施され、胴部下半はタテ、上半部はヨコ方向を基調とするケズリが施される。内面はハケ状工具によるナデ調整が施され、底部から胴部下半はタテ、上部はヨコ方向を基調とするハケナナデが認められる。

(3) 井戸

SE-1 (図53・54)

J 18グリッドで検出した石組みの井戸である。掘方は長軸方向約6.5m、短軸方向約3mと長楕円形を呈す。井戸の本体は砂岩を主体とし、補助的に石灰岩とチャートが用いられている石組井戸で、石を組んだ後、砂利を裏込めしている。上端の内面1.3~1.4m、現ウォーターレベルでの内径2.05mと下部が広い。検出面からウォーターレベルまでの深さは約3.7mである。使用されている石は、こぶし大から人頭大の比較的小さい石材が多く円盤及び角礫の両方が用



いられ、積み方には法則がなく乱雑である。井筒は確認できない。

出土遺物 (189~202)

遺物は、土師質土器78点、貿易陶磁器5点、備前焼壺16点、備前焼擂鉢1点、鉄器6点が出土している。189~196は土師質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施される。189・190は小杯であり、ベタ底から段を持ち、短く内湾する。191は小皿であり、ベタ底から短く直立する。口縁端部は内面に面を成す。192~196は杯である。192・193はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。内面は丁寧なナデ調整が施される。194の口縁部は尖り気味に仕上げる。外面にはナデによる段が顕著である。195・196は円盤状を呈した底部から斜上外方に立ち上がる。内外面ともにナデによる段が顕著である。197・198は白磁の端反り皿である。197の口縁部は外反する。198は底部であるが、比較的広い。断面三角形状の高台が付く。疊付の釉は削り取る。砂目の付着は認められない。199は龍泉窯系の青磁碗である。高台部は欠損する。厚みのある底部から内湾する。内面見込みには片彫りによる花弁文と、中央部に○に囲まれた「大」の字が施される。外

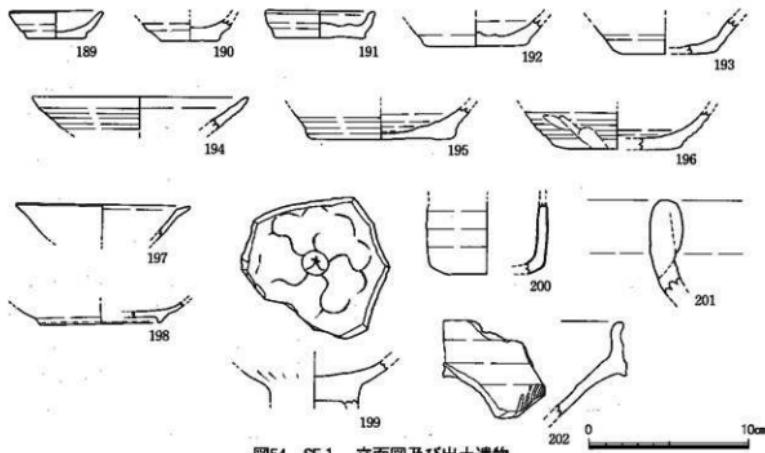


図54 SE 1 立面図及び出土遺物

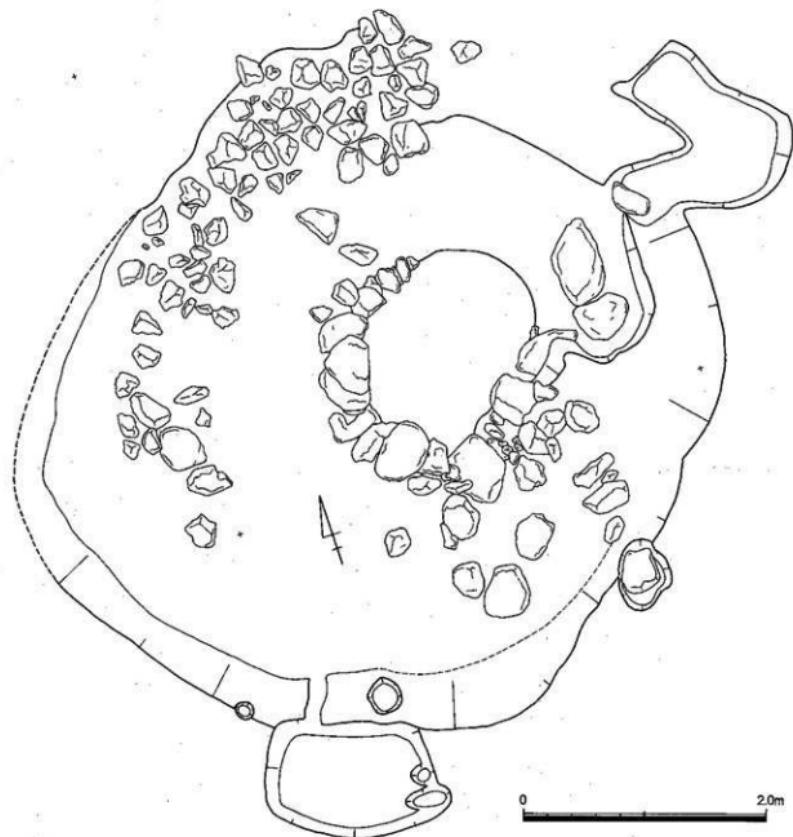
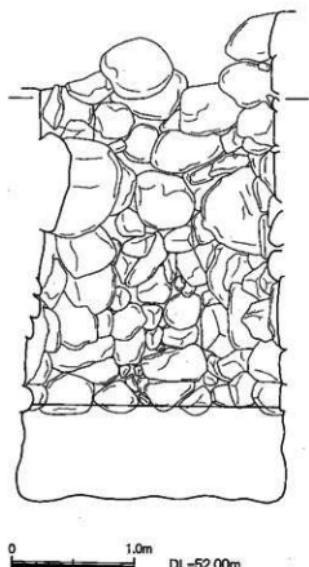


図55 SE 2 平面図

面には線描きの細蓮弁文が認められる。施釉範囲は高台部が欠損しており不明であるが外底部の一部に軸が認められることから高台内面まで施釉されているものと考えられる（上田B 4類）。200は青磁の筒形香炉である。底部から直立する。二次焼成を受け被熱している。201・202は備前産の壺と擂鉢片である。201は口縁部を外方に折り曲げ、玉環状を呈する。202は口縁部は上方に拡張され、端部はやや外反しながら丸まる。201・202とも胎土には角礫をほとんど含まない。



SE-2 (図55・56)

S 10~11グリッドにかけて検出した石組みの井戸である。掘方はほぼ円形で径4.8~5.5mであり、堀方埋土には遺物が多数検出できた。井戸の本体は砂岩を主体としており、石灰岩・チャート等は僅少である。上端の内面1.1~1.5m、現ウォーターレベルでの内径2.05mとやはり下部が広い。検出面からウォーターレベルまでの深さは約3.25mである。使用されている石はSE 1に比べて大きく、丁寧に積まれた様子が見て取れる。岩盤まで掘り込まれており、石積みは岩盤上面まで認められる。

出土遺物 (203~211)

遺物は、土師質土器362点、貿易陶磁器5点、備前焼壺片1点、備前焼擂鉢6点が出土している。203~207は土師質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。203~205は小杯であり、ベタ底からやや段を持ちながら外反する。203・205は内面の一部に煤とタールの付着が認められ灯明皿としての使用が認められる。206・207は杯

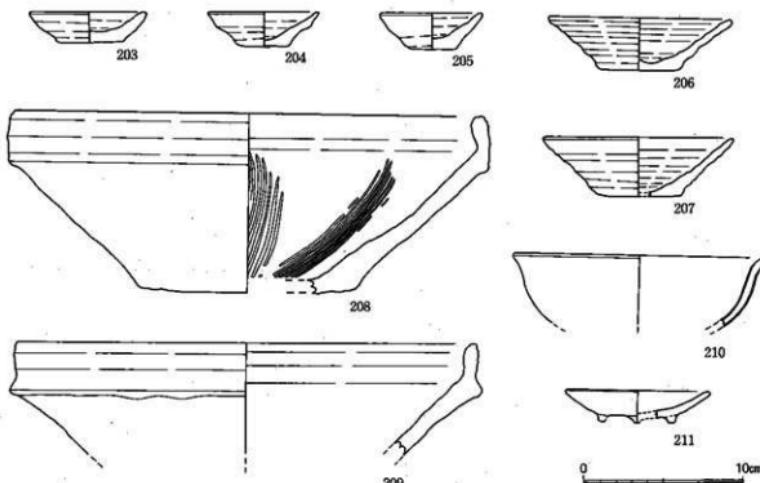


図56 SE 2 立面図及び出土遺物

である。ベタ底から斜向外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。ラッパ形を呈する。208・209は備前産の擂鉢である。208は斜向外方に立ち上がり、口縁部はやや内傾し、端部は丸まる。内面には7条を基調とする摺目が認められる。209の口縁部は、つよいヨコナデにより直立気味に拡張される。208・209とともに、胎土中にはほとんど角礫を含まないなめらかな胎土である。210は龍泉窯系の青磁碗である。内湾する体部から口縁部は外反する。内外面無文であり、オリーブ灰色を呈する釉が全面施釉される（上田D類）。211は白磁皿である。アーチ状の切高台から内湾気味に立ち上がる。白濁した釉が全面に施釉される。内面見込みには目痕が認められる（森田D類）。

(4) 堀

検出された2条の「堀」については、その規模・配置・付属遺構等を勘案すれば明らかに他のSDとは様相が異なる。すなわち、生活及び生業用の用排水・地割りを主張する区画溝等ではなく、緊張状況における防衛的機能を強く意識した所産であると認められるため、ここでは「溝」として取り扱わず、「堀」として報告する。

堀-1（図57）

調査区西端を北から南西方向に直線的にのびる。主軸方向は、N-41°-Eである。北側部分が調査区外となっているが、さらに北方の山際に向かって確実に延びている。南はだらだらと浅くなり終わる。確認延長57.5mである。形状その他の特徴については、以下各セクションポイントごとに報告する。

①セクションポイント1（図57①）

幅3.1m、深さ0.65mある。底はほぼフラットで赤ホヤ下の黒褐色地山層まで掘込んでおり、断面の形状は箱堀である。表土下の包含層中では堀の肩は確認できず、赤ホヤ層から確認できる。埋土は4層に分層される。2層には遺物が多く混入し、炭化した木材片や炭化物も混じる。堀の東側からいきに埋められた様相を呈している。最下層には若干の地山混じりの粘質土層が認められるが、基本的に空堀として使用されたと想定できる。遺物は、堀東側からの埋土に圧倒的に多い。

②セクションポイント2（図57②）

幅3.25m、深さ0.78mで断面形状は箱堀である。埋土は4層に分層できる。3層は明黒褐色の地山が混じり、堀の肩が崩れた部分と見られ、その後、遺物が入る4層が堆積している。2層は遺物及び炭化物を多く含み、堀の東西両側から人為的に埋められたと思われる。その後、1層がいっしきに堆積している。また、セクションポイント北側の堀底に一抱えもありそうな大石が確認されているが、その岩陰から土器が出土しており、この岩は堀が埋められる際に土と一緒に投棄されたと推測できる。なお、この部分からも空堀的様相が看取できる。また、遺物はここでも堀東側からの埋土に多い。

③セクションポイント3（図57③）

幅3.94m、深さ0.77mである。堀の東西両側に段状の地山部分がある。西側幅約0.5m、底からの高さ約0.15m、東側幅約0.45m、底からの高さ約0.25mである。両側共堀の中央部に向かって傾斜

しているが、東側の傾斜がきつい。埋土は3層に分層できる。3層はセクションポイント2の3層に相当するが、前者では遺物が未確認であるのに対し、ここでは遺物が検出され、堀の東側から投棄された状況を呈している。2層は赤ホヤのブロックを少量含み、遺物も包含する。堀の西側から投棄された埋土と捉えるのが妥当であろう。その後、1層が形成されている。この層は、セクションポイント2の1層に相当する。遺物は、1層中に多い。

土橋（図58）

また、ここでは土橋を検出した。堀の幅方向にあたる土橋長約3.8m、土橋幅約2.8m、堀底からの高さ約0.65mである。堀延長方向における土橋の位置は、土橋南端部から堀南端部まで約29.5m、土橋北端部から調査区内堀北端部まで約25mである。堀が北方向へ延長されるのは確実であるが、それを考慮にいれても堀の中央部近くといえる。土橋は堀を掘り残して構築されており、後から埋めて造られたものではない。よって、土橋を構成している土壤は、上部が赤ホヤ火山灰層、下部が黒褐色地山層である。両側面は、石組みにより補強されている。石組みは、土橋から続く堀西側南面にも一部残存していた。この石組みは、堀及び土橋の検出面である赤ホヤ火山灰層上面にも残されており、石組みが堀内部に使用されたと考えるかぎりにおいて、やはり実際の堀の深さ（土橋の堀底よりの高さ）は検出状況より深い（高い）ものと思われる。堀底には、側面補強に使用されていたと考えられる石が崩れ落ちた状態で一部検出されているが、西側に多く東には少ない。なお、土橋上にピット等他の遺構は確認できない。

④セクションポイント4（図57④）

堀2との交差地点北側のポイントである。ここでの堀幅3.51m、深さ0.80mである。側面の傾斜が堀北端部に比べやや緩やかとなるが、基本的な箱堀形態は維持されている。埋土は4層に分かれ、I及びII層でははっきりしないが、III層及びIV層は堆積状況から堀の東側から投げ込まれたものであろう。遺物は各層とも平均して検出でき、また、III層にはそのカーブに沿って礫が多量に堆積している。

次に、堀2との交差地点について報告する。この地点附近には拳～人頭大の礫が多量に投棄されていた。礫は東西方向の断面では、堀中央部に船底型に入っているが、堀の肩部分までは届いていない。またその最低部は堀底より20～30cm上部で止まっている。よってこの礫群は、堀がある程度埋められてからいきに投棄されたものである。南北方向の断面では、堀2を西側に延長したラインよりもかなり南側まで礫群が確認できる。よって、堀2ではなく堀1を埋めるために使用されたと判断される。堀2の西端部も礫によって埋められているが、その礫は堀1の埋土中には入ってこずに堀1の礫群との間には距離がある。これらから、堀1と堀2の時期的前後関係については、すくなくとも埋められた時期は堀1が新しく、機能していた時期についても、堀2が埋められた後、堀1が堀られて機能していた可能性が高い。その場合、堀2西端部の礫群については、堀1の側面の補強のためと考えることが可能である。

⑤セクションポイント5（図60）

堀2との交差地点南側になる。基本層序については、この地点より南側（南西方向）に行くにつれ赤ホヤ火山灰層が薄くなり、下層の黒灰色粘質土層及びその下層の灰黄色砂礫層が地表近くに顕

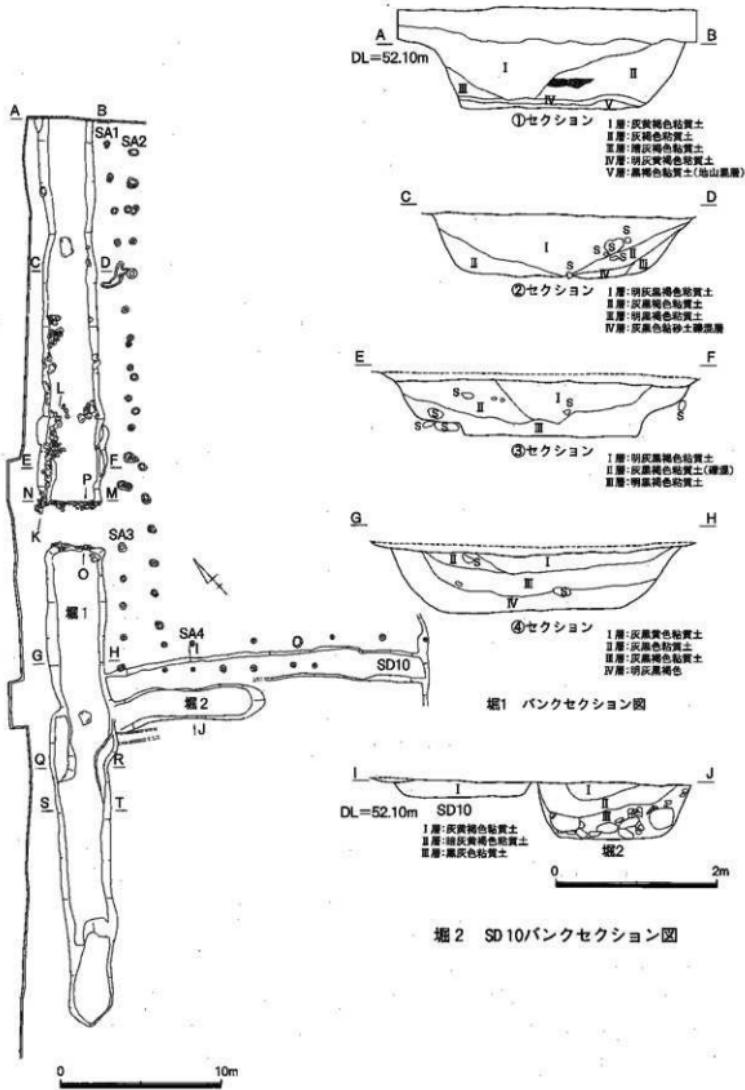


図57 堀1・2 SD 10、SA 1～SA 4平面図バンクセクション図

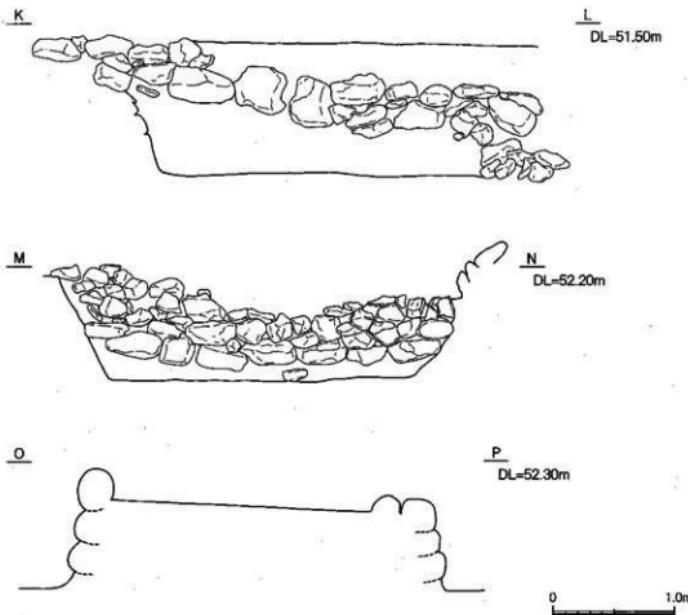
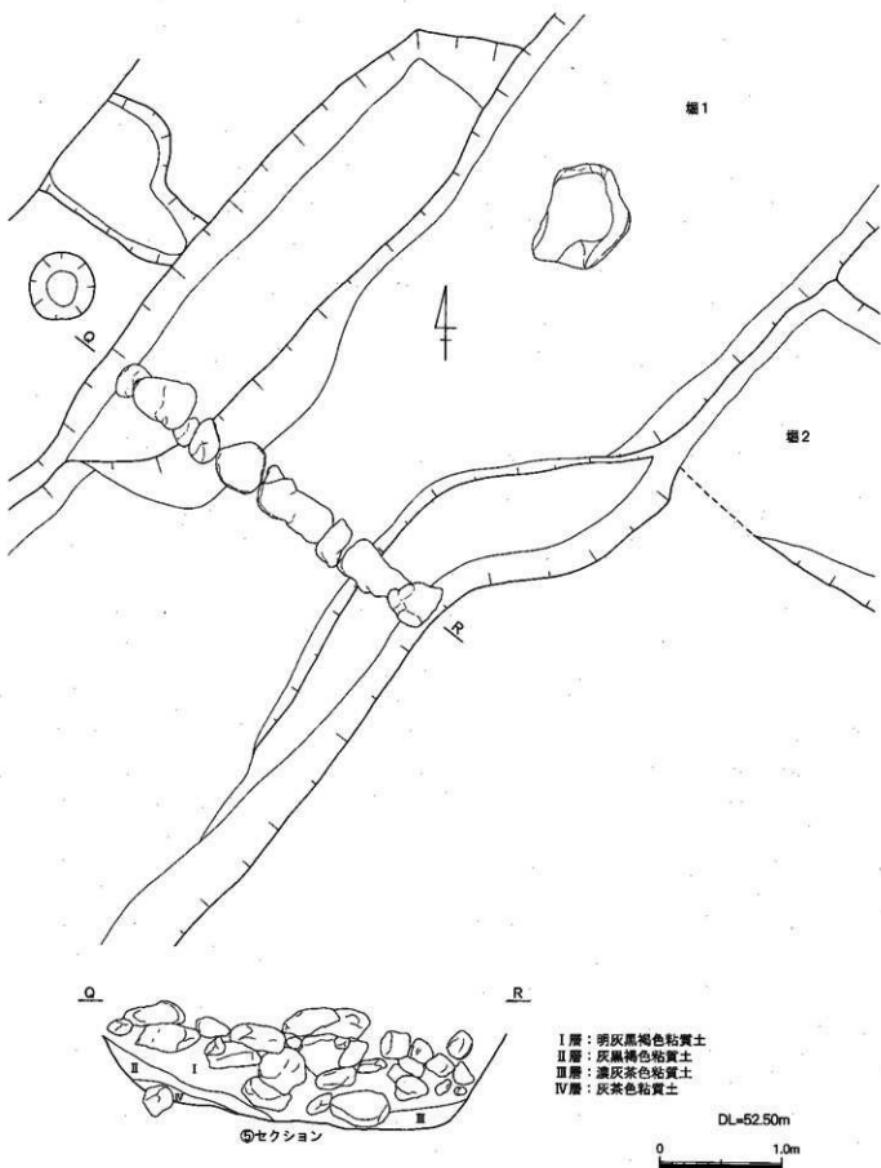


図58 堀1 土橋立・断面図

を出すようになる。そして、堀の最南部は砂礫層に掘込まれた状況となっている。堀の状況は、南端部に近づくにつれだらだらと浅くなり、断面形態も箱堀から崩れていき終わる。

また、この地点北側の堀埋土中に集石状況が認められ（図59）、それを境に北側と南側では埋土の様相が大きく違うため、まずその状況について述べる。集石最上部は堀の検出面上部であり、平面状況は堀を一列に横断しており石列をなす。石は河原石である。その下部にも集石が存在するが、人為的に積み上げた状況は認めがたく、埋土と同じように放り込んだ様相を呈する。集石が入る埋土I層中には遺物も確認でき、石及び埋土I層の一部は堀の底部まで続く。II～IV層では遺物は確認できない。石質は砂岩を主とし、一部チャートと石灰岩が認められ、焼けた石もある。この集石の性格については確定しがたいが、ここを境に堀の北側と南側で利用状況が異なることは間違いない。大胆に推測すれば、後述する堀2が南にカーブして堀1に先行して利用されており堀1を機能させる際にこの集石から南側を埋めて利用したことも選択肢のひとつになる。上記④ですでに述べた堀2西端の集石状況とも合致し、堀2の西側を延長した部分の堀1西側面にみられる段状部分が堀2の残存した遺構であると考えることもできる。なお、ここから北にサブトレンチを設定して、この集石の性格決定に努めたが、土橋その他の可能性に繋がる結果は得られなかった。

ここでの堀幅3.50m、深さ1.08mである。西側側面が丸みをおびたカーブとなっている。埋土は



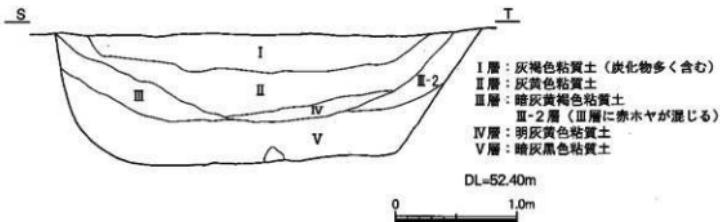


図60 堀1 バンクセクション図

5層に分かれる。遺物はI・III・III'及びV層で検出した。埋土の色調は灰黄色あるいは灰黄褐色に分類されるものが多く、堀北部分の埋土とは明らかに異なる。地山として砂礫層が地表近くまであり、水脈等の影響があることも考慮するべきであるが、土質の違いも存在し、さらに埋土の形成過程において、東西のどちらか片側から埋められたという状況はこのセクションからは読み取れないことも北側部分とは異なる。

出土遺物(212~309) (図61~64)

212~229は小皿である。212~217はベタ底から短く外反する。器壁が薄く、硬質で、外底部に糸切り後ヘラ状の圧痕が認められるタイプのものである。内面は丁寧なナデが施される。218~220は内湾するタイプである。218・220は、器壁が薄く、硬質で、外底部に糸切り後ヘラ状の圧痕が認められるタイプのものである。221~223は斜上外方に短く立ち上がり、口縁端部が尖るタイプのものである。224~227は口縁部が直立し、粗雑なつくりの物が多い。229は、他に比べやや法量が大きく、斜上外方に立ち上がり、口縁端部は丸まる。230~233はベタ底からラッパ状に開く小杯である。底径が3.0~3.2cm前後と規格が揃っている。234~239・240は非ロクロ成形であり、手づくりの製品である。234は厚めの底部から上方に折り曲げる。内外面とも指頭圧痕が顕著である。239・240は皿であり、斜上外方に開き、口縁端部はヨコナデにより尖り気味に仕上げる。体部下半に指頭圧痕が認められる。色調は浅橙色から白色系を呈する。235~238は耳皿である。ロクロ成形の小皿であり、両端を中央につまみ上げ、成形している。241~246は小杯と呼べるタイプである。241・242・244はベタ底から内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。243は底部から斜上外方に直線的に立ち上がり、ラッパ状を呈する。内底中央部はハソ状に盛り上がる。245・246はベタ底から上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。247~249はベタ底から段を持ち、内湾するタイプである。内底部が凹む。底部切り離しは回転糸切りであるが、静止状のものも認められる。250~252はベタ底からラッパ状に開く。内底中央部が凹むもの(250)と、凸になるもの(251)とあり、前者は色調が白色系を呈する。252は体部下半にやや段があり、口縁端部はヨコナデにより外向く。色調は白色系を呈する。253~255は、やや、法量が大きいタイプの杯である。253・254のように口縁部が少し外反気味になるもの、255のように内湾するものとある。器壁は比較的厚く、特に底部は分厚い。

256~269はSD 1の南部から出土した土師質土器の一群である。北の一群に比べ組成が違う。257~

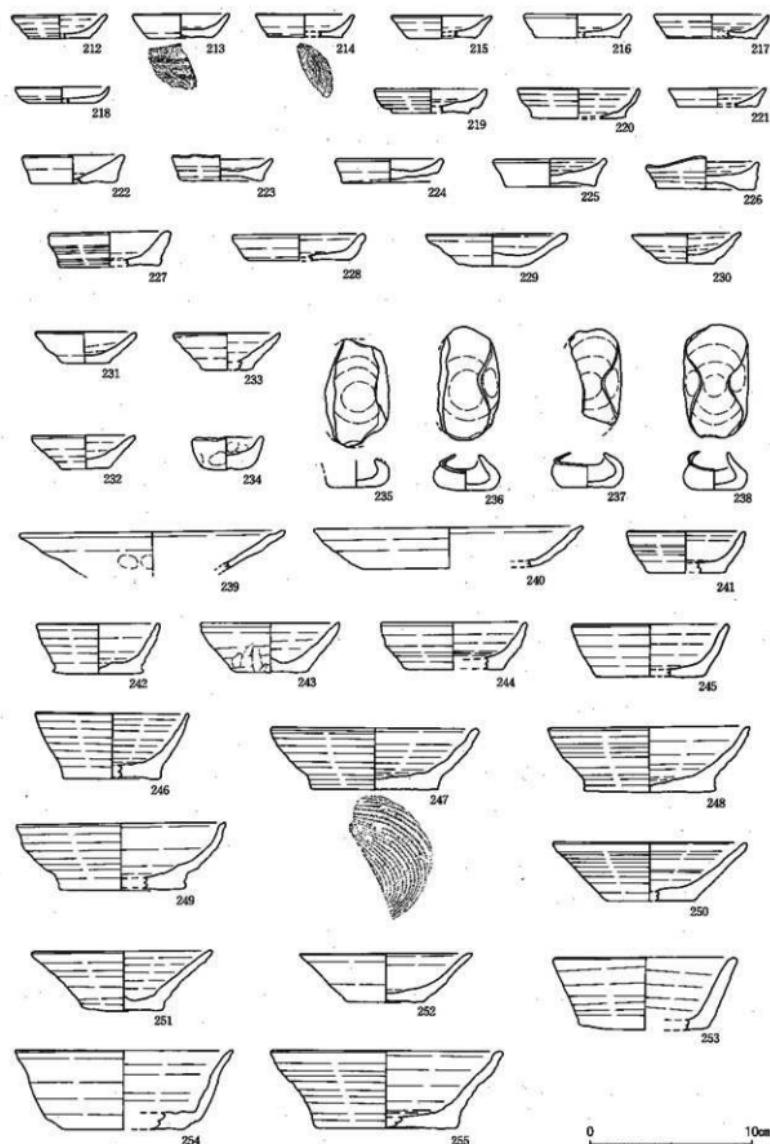


図61 堀1 出土遺物

259は小皿である。256はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内外面とも丁寧なナデ調整が施される。257はベタ底から上方に短く内湾する。内面は丁寧なナデ調整が施され、外面はナデによる段が残る。258・259は短く外反する。259の内底周縁部は凹む。260は小杯でありベタ底から、やや段を持ちながら内湾する。ミガキの様に丁寧なナデ調整が施される。精緻な胎土で色調は褐色系を呈する。法量がやや大きい。261～265は杯である。261はベタ底から内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。底部から体部下半にかけては丸味を持たせる。内面は丁寧なナデ調整が施され、内底部は平行なナデにより平らになる。底部切り離しは、摩耗が著しく不明である。胎土中に2～3mm大の角鱗を含む。262・263はベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部上半がつよいヨコナデによりやや内湾気味になる。265はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り上向く。内底中央部がヘソ状に盛り上がる。266～269は皿である。266はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。体部内面は丁寧なナデ調整が施され、内底部はナデによる段が残り、中央部が凸状を呈する（P387出土杯タイプ）。267～269はベタ底からやや丸味を持ちながら斜上外方に立ち上がる。体部内面は丁寧なナデ調整が施され、内底部は未調整のため段が残り、中央部は凸状に盛り上がる。体部外面はナデによる段が顕著である。270は柱状を呈する底部片である。外底部には回転糸切り痕が認められる。見込み中央部には、直径3mmの竹管状の凹みが認められる。燭台的なものか。271は、天目茶碗である。高台脇を水平に削り出し、体部は斜上外方に直線的に開く。黒褐色を呈する釉が全体的に厚くかかり、禾目状を呈する。建窯産である。272～285は青磁である。272・273は端反り碗（上田D類）である。透明感のある淡いオリーブ灰色を呈した釉が薄く施され、貫入が認められる。274は線描蓮弁文碗である。剣頭と蓮弁の単位がずれている。内面は体部下半に草花文風の線描が施される（上田B IV類）。275～279は青磁碗の底部である。275は高台外面下端を丁寧に削る。高台外面まで施釉される。276は丸味を持つ高い高台が付く。高台からやや腰折れ気味に内湾する。全体的に明オリーブ灰色を呈した釉が高台外面まで厚く施釉される。高台内面は、胎土中の鉄分が赤褐色に発色しているのが認められる。277の内面見込みには草花文が施される。全体的に透明感のある釉が全面施釉されており、外底部は輪状に釉を剥ぎ取る。278は断面四角形の低い高台が付く。内面見込みに草花文のスタンプが施される。淡オリーブ灰色を呈した釉が豊付まで施釉され、高台内面及び外底部は露胎である。279は逆台形状の高台が付く。厚みのある底部で、外底中央部は凸状に盛り上がる。全体的にオリーブ灰色を呈する釉が薄く高台外面まで施釉される。内面見込みには草花文の模様が線刻される。280～282は青磁碗の口縁部片である。280・281は錦蓮弁文が施される（上田B I類）。280は幅広で口縁端部はやや外反気味になり、281は蓮弁文の幅が狭く内湾する。282は外面に細線刻蓮弁文が施される。剣頭は省略されている。内面は線描きによる草花風の模様が描かれる（上田B IV類）。283は青磁穂花皿である。体部は腰折れ、口縁部は外反する。口縁端部には抉りが入り、内面には波状文が施される。284は象眼青磁である。雲文、唐草文くずれの文様が施される。上位には扁平な凸帯が付く。花瓶か水注の一部ではないかと思われる。被熱し、黄味を帯びたオリーブ色を呈する。285の器種は不明であるが酒会壺の蓋か青磁螺旋形水注の一部ではないかと思われる。断面を観察すると、単位が肥厚する部位に一部、貼付が認められ、青磁螺旋形水注であれば、胴部に表現されているヒレの部分ではないかと思われる。全体的に、

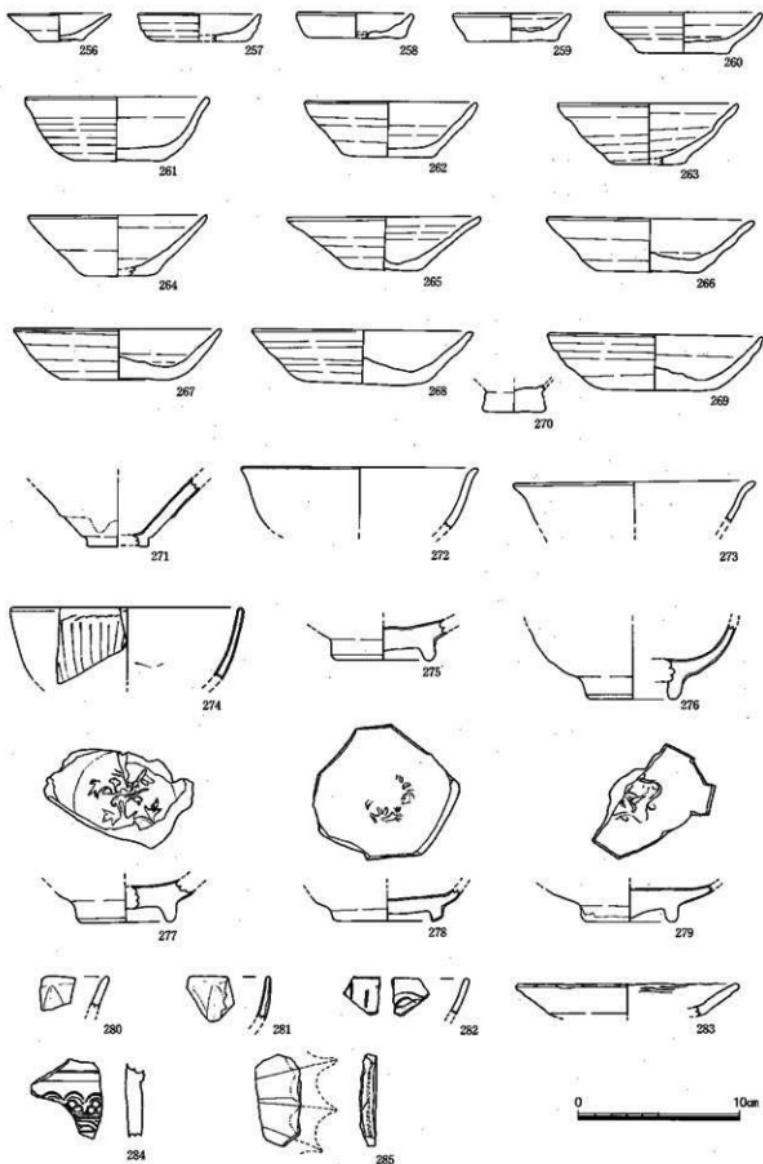


図62 堀1 出土遺物

釉は被熱し、黄味を帯びたオリーブ色に変色しており、稜を成す部分は釉が剥がれ、肥厚する部分には釉が溜まる。286～289は瀬戸・美濃系陶器である。286は折縁皿である。口縁部は外方に折り曲げ、端部はわずかに拡張され水平な面を成す。外面はナデの単位が顕著である。全体的に淡い灰色を呈した灰釉が薄くかかる。287は碗形の鉢である。内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。内面は全面施釉、外面は体部下半は露胎である。ツケガケによる。288・289は折縁の大皿である。斜上外方に立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。口縁内側は突起状の稜を成す。288は施釉は体部上半から口縁部にかけ灰釉が施されるが、被熱し、白っぽく変色している。290～301は備前焼である。290～298は擂鉢である。290の口縁部はわずかに拡張が見られ、端部は水平な面を成す。内面に6条を基調とする摺目が認められる。291は口縁部を上方に拡張し、端部は尖り気味に仕上げる。7条基調の摺目が認められ、胎土中には角礫が含まれる。292の口縁部は上方に拡張され、端部は水平な面を成す。口縁内面下端につよいヨコナデが施され凹む。口縁部まで摺目が認められる。293の口縁部は上方に拡張され、端部は内傾する面を成す。内面はヨコナデ痕が顕著である。胎土は角礫を含まず滑らかである。294は底部から斜上外方に直線的に立ち上がる。内面に7条を基調とする摺目が放射状に施される。295は体部下位に直径6mmの円孔が認められる。色調は赤っぽい橙色を呈する。296は底部から斜上外方に立ち上がり、体部下半でやや外反する。内面は7条を基調とする摺目が放射状に施される。使用頻度が高く、内面はツルツルしている。胎土は角礫を含まず滑らかであり、色調は赤っぽい橙色を呈する。297は外底部端の一部に、擂鉢片が高台状に貼り付いている。底部脇はつよいヨコナデにより凹む。298は口縁部を上方に大きく拡張し、端部はつよいヨコナデにより内傾する面を成す。外面はナデの単位が凹線状を呈する。299～301は壺である。299は口縁部を折り曲げ、長丸い玉縁を呈する。外面はヨコナデ痕が顕著であり、頸部は凹む。300は壺の底部である。平らな底部から上方に直線的に立ち上がる。外面ハケ調整が施されている。301は大壺の口縁部である。頸部は直立し、口縁部は外側に折り曲げ、玉縁状を呈する。302・303は東播系の捏鉢である。302の口縁部は、上下に拡張が見られる。口縁部内面、体部外面にヨコナデ痕が顕著である。303は斜上外方に立ち上がり、口縁端部は三角形状に肥厚する。体部内面は斜位にナデの単位が認められる。体部外面はヨコナデが施されるが、一部に指頭圧痕が認められる。全体的に粗雑なつくりである。304は器形は不明であるが、須恵質の底部片である。断面逆三角形状の高台が付く。体部は斜上外方に直線的に立ち上がる。体部外面は横方向のケズりが認められる。305は土師質土器の鍋である。口縁部下に突蒂が付き、口縁端部をつよくナデ、やや内傾する面を成す。306・307は瓦質土器である。306は擂鉢であり、直線的に斜上外方に立ち上がり、口縁端部はナデにより面を成す。口縁部はヨコナデ、外面体部には指頭による圧痕が残る。内面には、単位の粗いハケ状工具による6条基調の摺目が認められる。307は茶釜である。体部下半は直線的に開き、上半部は大きく内湾する。口縁部は直立し、端部はつよいヨコナデにより細くなり、やや外反する。上面は面を成す。体部中位に鈎がほぼ水平に貼り付けられ、端部はやや上方に折れ、面を成す。内面は細かい単位のハケ調整が施される。外面の鈎より下に煤の付着が認められる。308・309は土錘である。管状を呈する。308は一部欠損している。既存の長さ4.5cm、全幅1.7cm、全厚0.6cm、孔径0.55cmを測り、重量は9.2gである。309は既存の長さ4.95cm、全幅1.4cm、全厚0.55cm、孔径0.4cmを測り、重量は7.2gである。

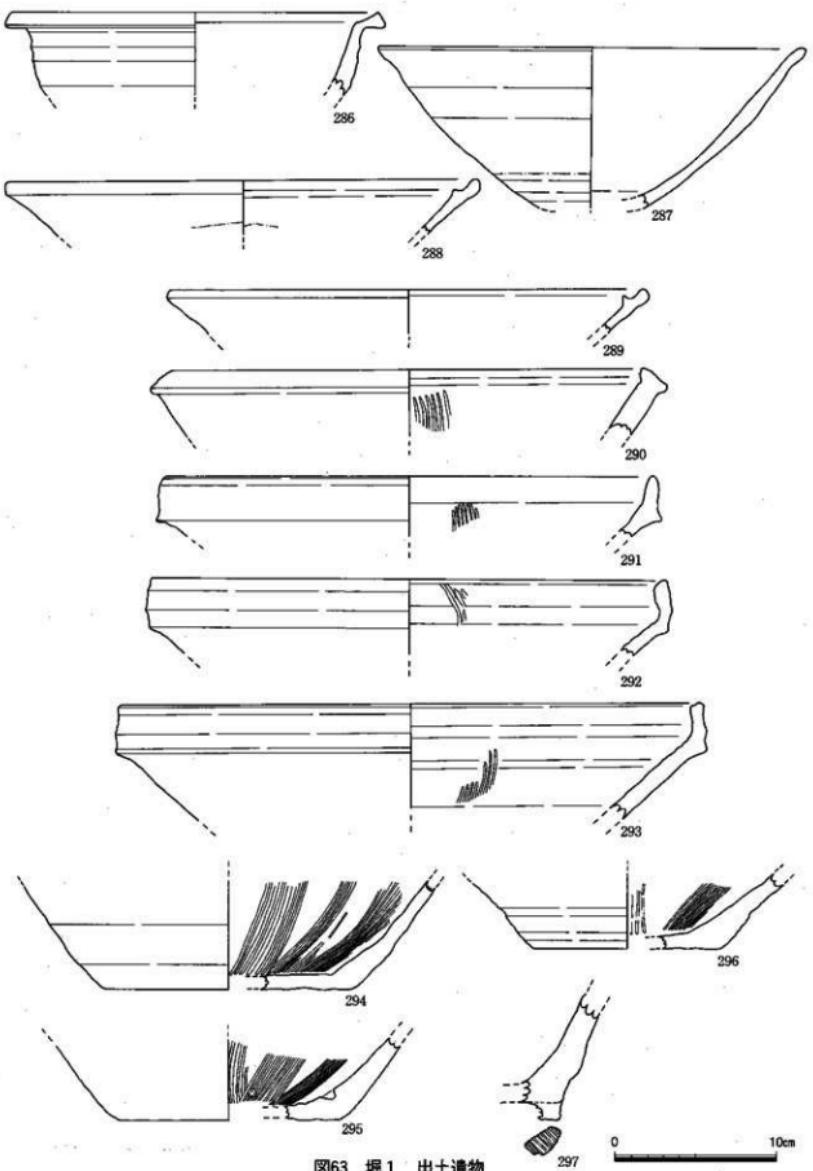


図63 塚1 出土遺物

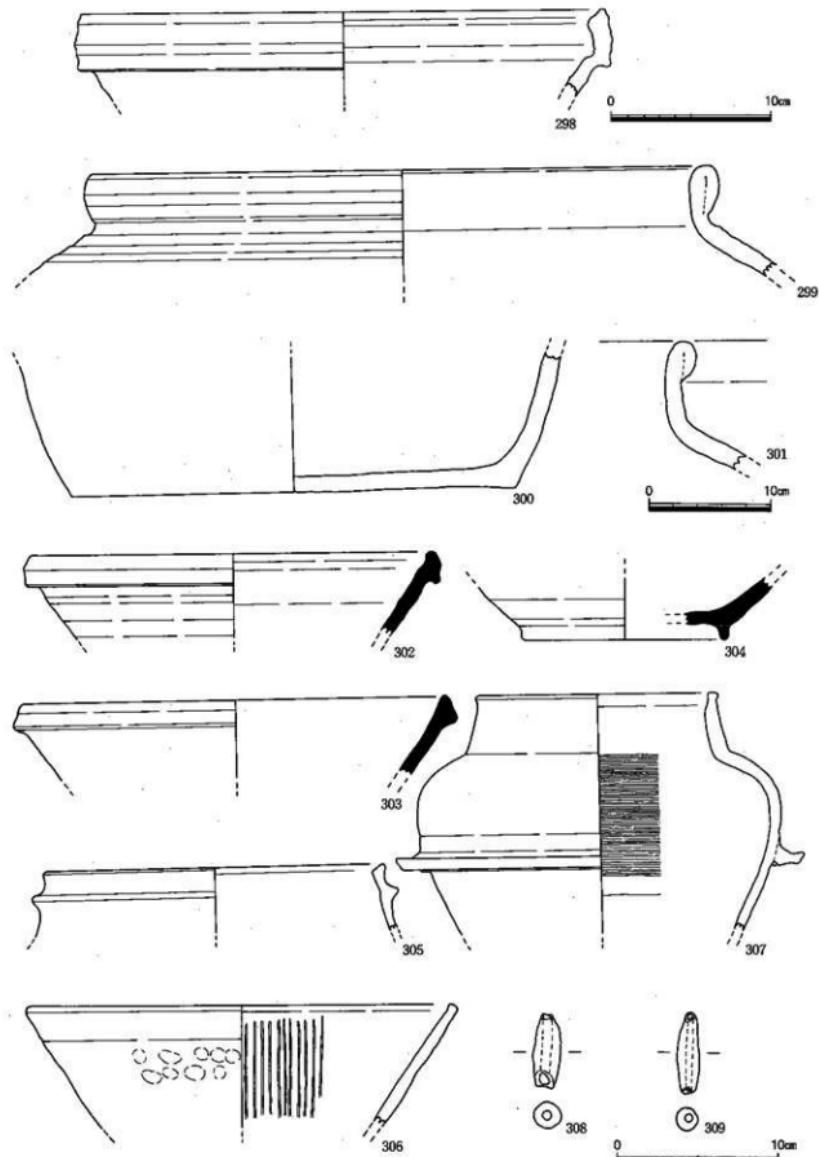


図64 堀1 出土遺物

堀-2 (図57)

堀1の主軸方向中央部よりやや南から南東方向に延びており、堀1とほぼ直交している。西端はすでに述べたように堀1により切られているが、重なるように南に延びていた可能性がある。主軸方向はN-52°-W、確認延長10.01mである。また、北側にSD10が並行して延びているが、堀との間に赤ホヤ層が確認できるためセクションで見る限り切り合い関係はなく、時期的前後関係は平面プランのうえでは不明である。断面形状は全域にわたり箱型で推移しており、遺構検出面の赤ホヤ下層の灰黄色層まで掘込まれている。堀東端部はやや内湾しながら急傾斜で立ち上がり終わる。

埋土は3層に分かれる。Ⅲ層には拳大~人頭大の自然石が大量に放り込まれており、被熱痕跡は認められず炭化物も含まない。また、最下層にも砂質の土壤は残存していないため空堀として機能していた可能性が高い。この層に限り堀の南側からの埋土投棄が想定できるが、I・II層についてはどちら側から埋められたものか想定することはできない。むしろ、自然堆積と考えるのが妥当かもしれない。遺物は各層から認められるが、特にⅢ層中に多い。堀の東端部では、放り込まれた石の下から大量に土器が出土している。

出土遺物 (312~344) (図55)

312~340は土師質土器である。全て、回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転糸切りによる。312~330は小皿である。全て、斜上外方に開く器形であり、口縁端部は尖る。底部内面中央部は凸状に盛り上がり、周縁部は凹むタイプのものが多い。329・330は底部が厚く、器高が他に比べ高い。331~339は、器高が低く皿とも呼べる器形である。斜上外方に大きく開き、口縁端部は尖る。底部内面中央部は凸状に盛り上がる。体部内面は外面に比べ比較的丁寧なナデが施される。外面はナデによる段が著しい。340は331~339に比べ器高が深く、ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸まる。341・342は青磁碗である。341は無文の端反り碗である(上田D類)。342は粉青沙器である。内湾し、口縁部は外反する。端部は僅かに玉縁状を呈する。胎土は灰白色を呈し、細かいピンホールが目立つ。釉調は灰白~灰緑色を呈する釉が全体的に薄く施釉される。李朝期の製品である。343は常滑産の甕である。口縁端部は折り返し縁帯をつくる。縁帯は垂下し、頸部に接着する(中野9型式)。344は瓦質土器の風炉である。口縁部は直立し、端部は水平な面を成す。口縁部外面は断面三角形の隆起が短冊状に巡る。内外面とも黒灰色を呈する。

(5) 溝

SD-3 (図66)

調査区を北東から南西に向け直線的に延びる溝である。北東端が調査区外に確実に延長できるが、確認延長約52m、幅1.3~2.2mで主軸方向はN-36°-Eである。

セクションポイント1での断面は逆台形状を呈し、赤ホヤ層及びその下層の黒褐色土層を掘込んでいる。1層は灰黄褐色粘質土層、2層は明灰黄褐色粘質土層に赤ホヤがブロック状に混入する。

セクションポイント2での断面は船底型を呈し、赤ホヤ層を掘込んでいる。埋土は灰黒褐色粘質土層単純一層に赤ホヤが僅かに混入する。

セクションポイント3での断面は西側に傾斜した船底型で、黒灰色疊層及び灰黄色の地山を掘込

んでいる。1層は灰黒褐色粘質土層、2層は暗黒褐色粘質土層に地山の灰黄色土壤が混じる。

出土遺物（345～357）

345～349は土師質土器の杯である。345はベタ底からやや段を持ちながら斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。内外面ともナデによる段が顕著である。内底部は粘土紐の単位がナデにより細かい凹凸を成す。346は比較的薄いベタ底の底部から斜上外方に直線的に立ち上がり、体部上半から口縁部にかけてはやや、内湾する。口縁端部は尖る。内面はナデによる段が顕著である。347は体部上半から口縁端部にかけてやや内湾し、端部は尖る。比較的丁寧なナデが施される。口縁端部の一部に赤橙色を呈した化粧土が認められる。345～347は色調が白色系を呈する。348はベタ底から段を持ち、内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反気味になる。内外面ともナデによる段が顕著である。349は348の器高が低いタイプである。ベタ底から僅かに段を持ち、内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。348・349は橙色を呈する。350～355は瓦器碗である。350は内湾しながら立ち上がり、口縁部はヨコナデが施され外反する。内面は渦巻き状のミガキが施され、外面は口縁部下から体部下半にかけて指頭圧痕が顕著である。微隆起帯状の低い高台が貼付されている。351は内湾し、口縁部はヨコナデによりわずかに外反、端部は丸くおさめる。内面は暗文の単位は認められずナデ調整が施されるが、底部に指頭圧痕が認められる。352は口縁部下に結合痕が認められ、結合部には連続する指頭圧痕が顕著である。内面は暗文の単位は認められずナデ調整が施される。幅の狭い低い高台がドーナツ状に貼付される。353は内面に渦巻き状のミガキが認められる。口縁部はつよいヨコナデにより外反する。微隆起帯状の高台が貼付される。354は内湾し、口縁部は丸くおさめる。内面は渦巻き状のミガキが認められる。355は内湾し、口縁部は僅かに外反、端部は丸くおさめる。口縁部下に結合痕が認められ、結合部には連続した指頭圧痕が顕著である。内面は暗文の単位は認められず、口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけては縱方向のナデが施される。退化した高台が貼付される。356は龍泉窯系青磁碗である。内湾し、口縁部は外反する。外面には幅の狭い鑄造弁文が施される。357は土師質土器鍋である。直立気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。端部は面取りされ、やや外傾する面を成す。

SD-9（図66）

SD 3北半の北西に位置している。延長約8.7m、幅0.7～1.1mの浅く短い溝である。北端部はSK 175、南端部はSK 212と接する。延長全域赤ホヤ層に掘込まれており、底面も起伏が激しい。セクションポイント1及び2どちらも埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

出土遺物（358・359）

358・359は土師質土器の杯である。359はベタ底から斜上外方に立ち上がる。外底部にヘラ状の圧痕が認められる。器壁が薄く、白色系を呈する。359はベタ底から段を持ち、内湾気味に立ち上がる。内底部は粘土紐の単位がナデ調整により細かい凹凸を成す。

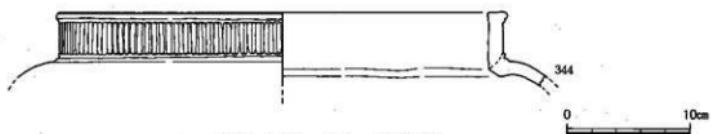
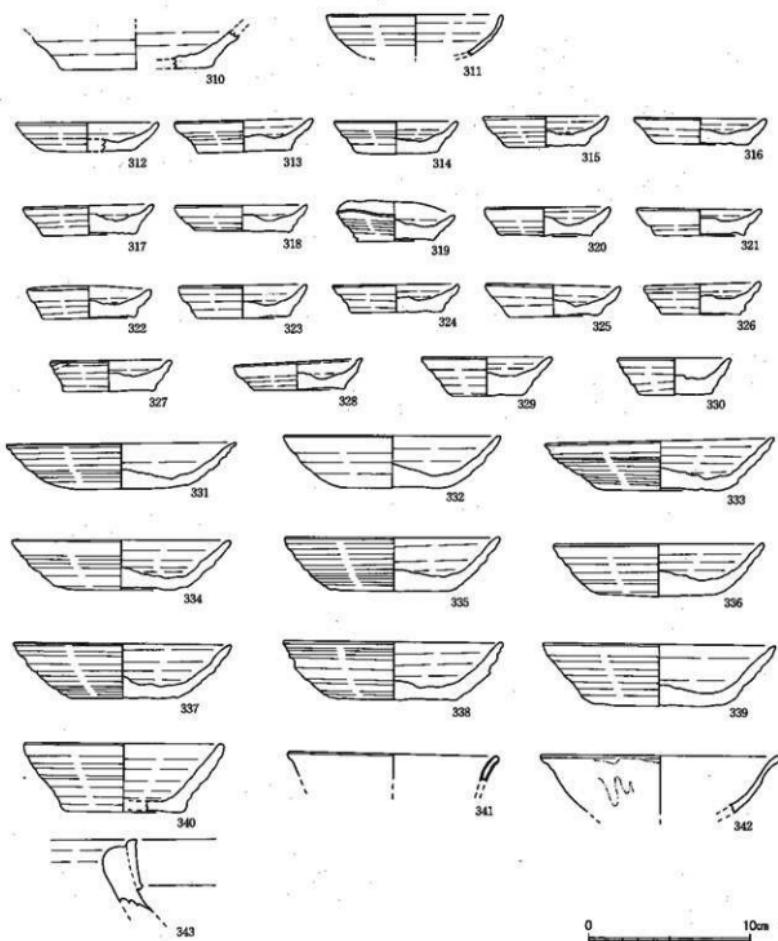


図65 SD 10 堀2 出土遺物

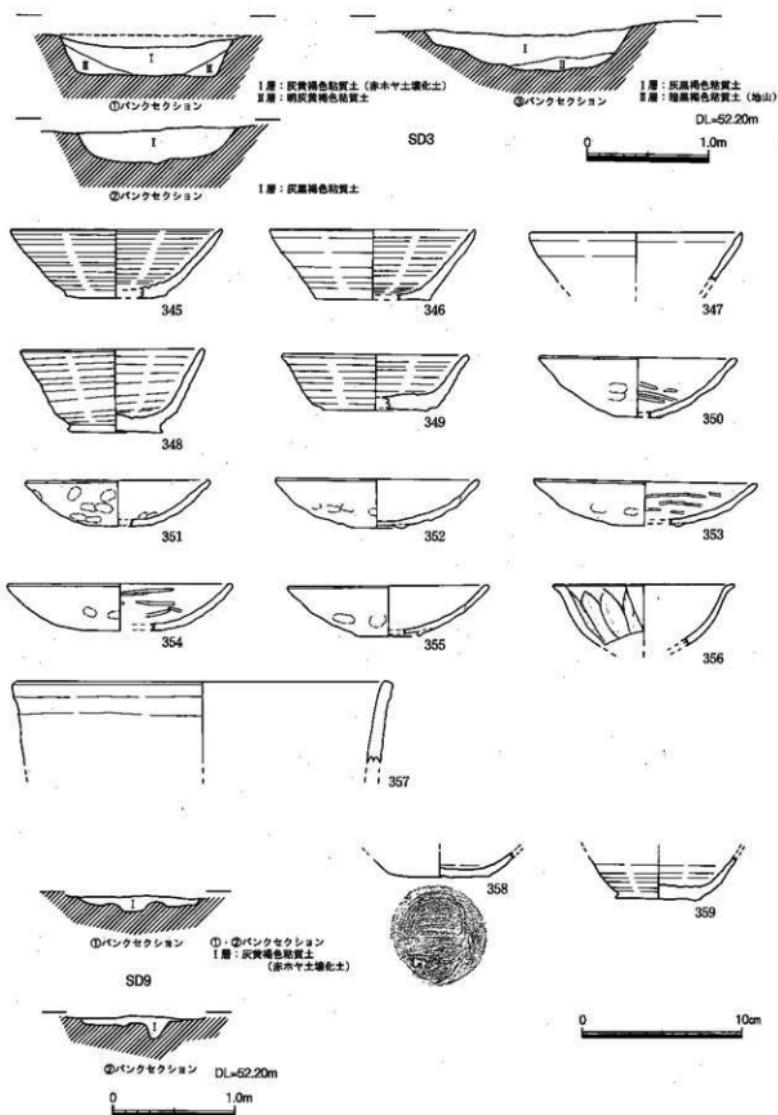


図66 SD 3・9 断面図及びSD 3・9出土遺物

SD-10 (図57)

堀2と接して平行しながら直線的に延びる。堀2とは近接しているが間に赤ホヤ層が残るため、同一のものではない。西端部は堀1と接するが切り合い関係は不明であり、東端部はSD3を切っている。確認延長約19.5m、幅1.2~1.7mで深さは20cm内外と浅い。断面形状は浅い皿状を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土單純一層に赤ホヤが混入している。

出土遺物 (310・311) (図65)

310・311は土師質土器の杯である。310はベタ底から斜上外方に外反する。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、内外面ともナデによる段が顕著である。311は内済する。ロクロ成形、ナデ調整が施され、器壁は薄く、硬質である。

(6) 堀又は柵列

SA-1 (図57)

堀1東側で検出した柵列である。15間分 (32m) を検出し、柱間は1.8~3.5mと一定していない。柱穴は円形で径33~60cmである。埋土は灰黄褐色粘質土が多く、明黒褐色粘質土のものもある。遺物は細片のみの出土である。なお、方向は堀1とは一致しない。

SA-2 (図57)

SA1とちょうど中央附近で交わるように位置している。10間分 (20.8m) を検出した。柱間は1.8~4mと区々である。柱穴は円形で径35~60cmである。埋土は灰黄褐色粘質土であった。遺物は図示できる土師質土器が1点のみであった (376)。あたかも堀1に平行するように配置されているが、伴うものとの断定はできない。

SA-3 (図57)

SA2の延長上に位置するL字形をなす柵である。10間分 (19.3m) を検出した。SD10内にある柱穴はSD10埋土上層では検出できず、床面で検出している。柱間寸法は1.4~2.6mで、SA1及びSA2に比べ狭い。円形を呈する柱穴は径25~50cmである。埋土は灰黄褐色粘質土であった。遺物は図示できるものはない。

SA-4 (図57)

SA3の北東側に方向をほぼ平行させて並んでいる。5間分 (14.4m) を検出した。柱間は2.2~3.8mとばらつきがある。柱穴は円形で径28~60cmと区々である。

(7) 配石遺構

配石遺構1 (図67)

R7グリッドの調査区端部から始まり、L字状に配置されている。北端部が調査区外に延びるため全容は不明であるが、確認延長約12.5m、内面幅0.3~0.4mである。他の遺構との関係では北東端

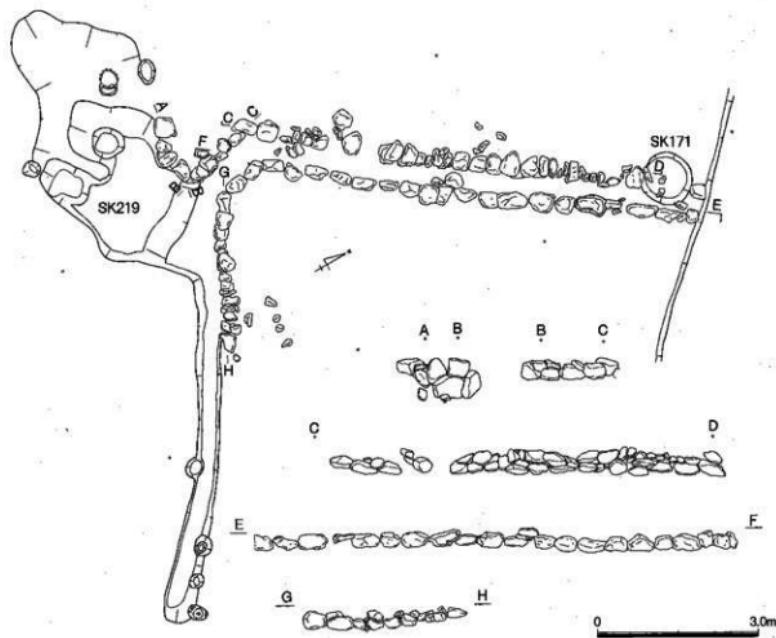


図67 配石遺構1 平・立面図

部に所在するSK 171が埋められてから構築されているのは明らかで、南にひらくSK 219とは同時期に機能していた可能性が高い。配石の下端面及び上端面は比較的良好揃い、内面についても整然と配置している。石材は砂岩を主体とし、チャートも使用されているが、その他は僅少であり、被熱痕跡のある石が一定量存在する。但し、被熱痕をもつ石はまとまりがなく遺構が構築されてから被熱したのか、あるいは被熱した石を使用したのか確定しがたい。一般的に、焼けた石をわざわざ使用するということは考えにくいのではないか。

(8) ピット

P-847 (図68)

R11グリッドに位置し、SE2とSK 217に挟まれたところにある。平面形は不整円形を呈し、径65～70cm、底部は平坦で東側立ち上がりは勾配がきつい。深さ約20cmである。遺物は、壁及び底面に張り付いた状態で出土している。

出土遺物 (360～362)

360・361は土師質土器の杯である。ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。円盤状を呈するベタ

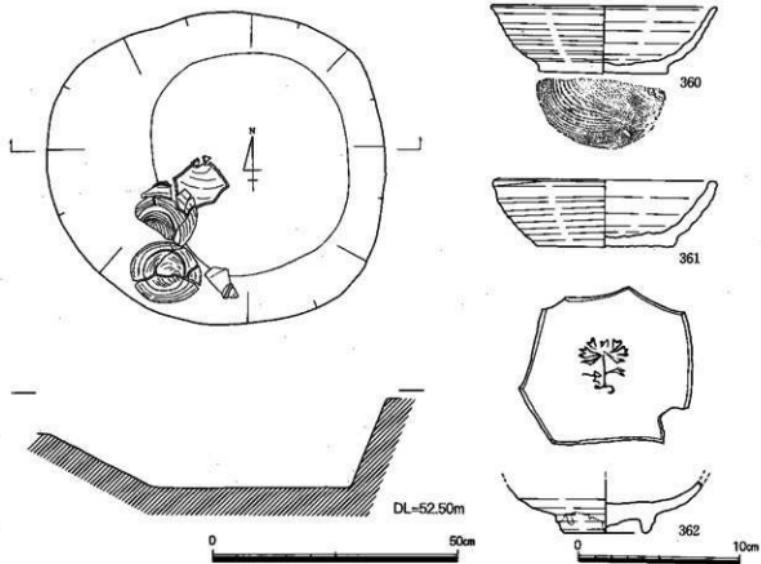


図68 Pit 847 遺物出土状況図及び出土遺物

高台から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。360の底部切り離しは静止状の糸切り痕が認められる。361は口縁端部が面を成す。360・361とも内外面にナデによる段が顕著である。362は青磁碗である。高台が付く底部からやや外方に開き内湾する。高台外面は削られ、面取りされる。外底中央部は凸状を呈する。シャープなつくりで灰味のつよい透明感のある釉が高台外面まで施釉される。全体的に釉が薄いため体部へラ削りの痕が認められる。内面見込みには、菊花文が施される（上田D類）。

ピット出土遺物（図69・70）

検出されているピットの内、327個から遺物が出土している。ここでは、特徴的な遺物について種類ごとに述べることにする。出土地点、詳細は、遺構出土遺物観察表を参照されたい。

土師質土器（363～395）

363～379は小皿である。363・364は短く内湾する。363は内外面とも丁寧なナデが施されるが、内底見込みはロクロ口目を残す。365は短く外反し、端部は面を成す。内底周縁部は凹む。外底部にはヘラ状の圧痕が認められる。366・367はP394からの出土である。ベタ底から斜上外方に立ち上がり口縁部は尖る。比較的つくりが雑である。369～372は硬質である。丁寧なナデ調整が施される。外底部に、糸切り後、ヘラ状の圧痕が認められる。373は厚みのある底部から、短く外反し、口縁端部は

つよいヨコナデにより尖る。内面は未調整。374～377の口縁部は上向く。374は底部から上方に短くつまみ上げる。色調は白色系を呈する。375は内底見込みが凹み、口縁端部は丸まる。376は欄列2のビットからの出土である。ベタ底から外反し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。377は被熱し、火彫れ変形している。胎土に3～5mm大の角礫が含まれる。378は内底見込みが凹む。379は底部の器壁が薄く、一部穿孔している。380は小杯と呼べる器形である。ベタ底から内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸味を持つ。口縁部は丁寧なナデが施されている。381はラッパ状を呈した小杯である。内面は丁寧なナデが施されている。382～395は杯である。382はベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともナデによる段が顕著である。383・384はP1096からの出土である。ベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部上半から口縁部にかけて内湾する。口縁端部はヨコナデにより尖る。外面はナデによる段が残るが、内面は丁寧なナデが施される。384の底部内面には指頭によるナデが施され、外面は糸切り後、ヘラ状の圧痕が認められる。器高が低く皿とも呼べる器形である。385は体部上半から口縁部にかけて内湾するタイプであり、383・384に比べ器が高い。外面はナデによる段が残るが、内面は丁寧なナデが施される。外面には、糸切り後、ヘラ状圧痕が認められる。383～387はいずれも器壁が薄く、色調は白色系を呈し、精緻な胎土で硬質である。387は内底周縁部が沈線状に凹む。388・389は底部に段を持ちながら、内湾し、口縁端部は尖る。胎土には角礫5mm大を含む。390はベタ底から斜上外方に大きく開く。内底中央部が凸状に盛り上がる。391はベタ底から斜上外方に大きく開き、口縁端部は尖る。内面は丁寧なナデ調整。外面体部上半はナデによる段が残る。392はベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部中位で外反する。内外面ともナデによる段が顕著である。393は外面は丁寧なナデが施され、内面はナデ調整の段が残る。394は箱形を呈する。ベタ底から上方に立ち上がり、口縁端部は尖る。外底部は糸切り後、ヘラ状圧痕が認められる。内底部は指頭によるナデが施されるが難である。395はベタ底からわずかに段を持ちながら内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は尖る。胎土中に7～8mm大の角礫を含む。

青磁（396～402）

396～402は青磁である。396は厚みのある底部に断面四角形の低い高台が付く。内面見込みに花弁文風の模様が施される。劃花文碗である。灰オリーブを呈した釉が高台外面まで施釉される。疊付の一部まで釉がまわるが釉を拭き取る。397は外面に片切彫りによる幅の広い蓮弁文が施される。釉は全体的に厚く施釉される（上田B II類）。398は片切彫りによる幅の狭い蓮弁文が施される。劍頭は丸ノミ状工具により施されるが、蓮弁としての単位が明瞭である。透明感のある釉が施釉され、貫入が認められる（上田B III類）。399も細線刻蓮弁文碗である。断面逆台形状の高台から内湾して立ち上がり、口縁部は直立する。高台脇は抉りが入る。外面は丸彫りで蓮弁文が描かれるが、劍頭と蓮弁の単位がずれている。底部内面には丸彫りで捺花状の花弁が描かれ、見込みには、亀甲状のスタンプが施される。全体的にくすんだ灰オリーブ色を呈した釉が高台内面途中まで施釉される（上田B IV類）。400・401は無文の青磁碗である。400の口縁部は外反し、端部は丸味を持つ。401は断面四角形の高台が付く。内面見込みに一条の界線が認められる。釉は全体的に薄く、体部外面はケズリの単位が認められる。疊付まで施釉される。402は稜花皿である。裏折れ、口縁部は外反する。口縁端部には抉りが認められ、内外面とも無文である。

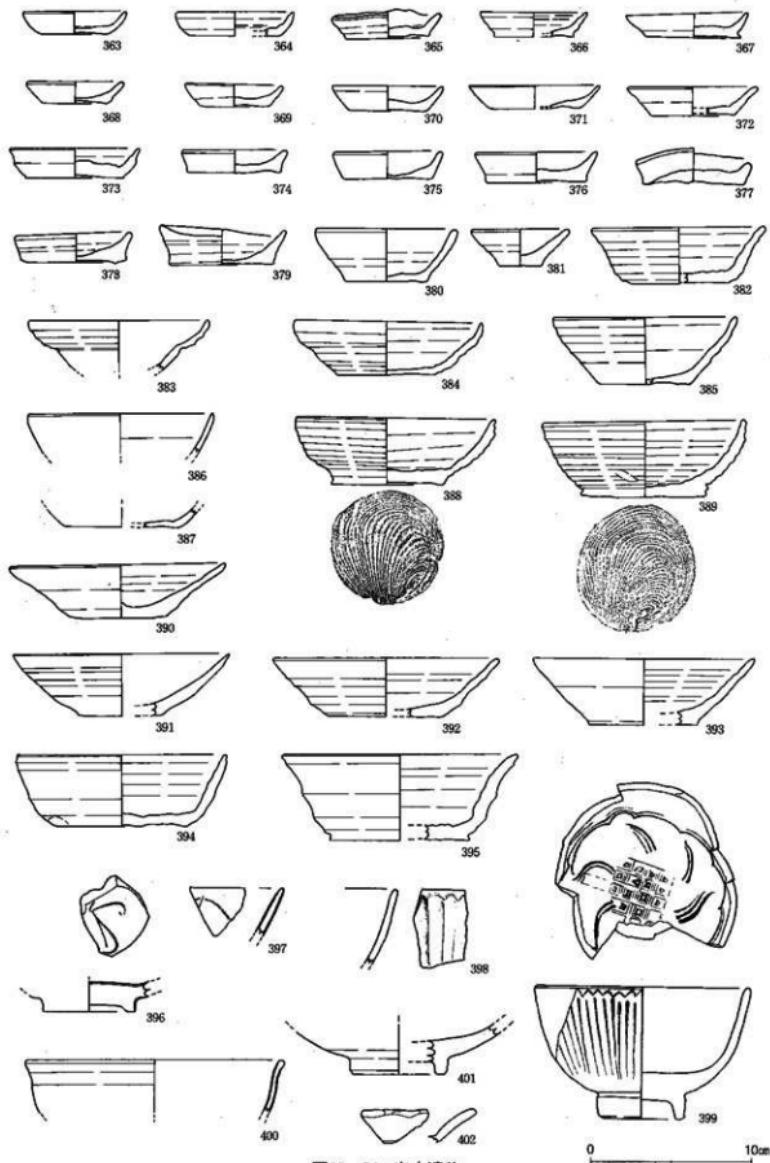


図69 Pit 出土遺物

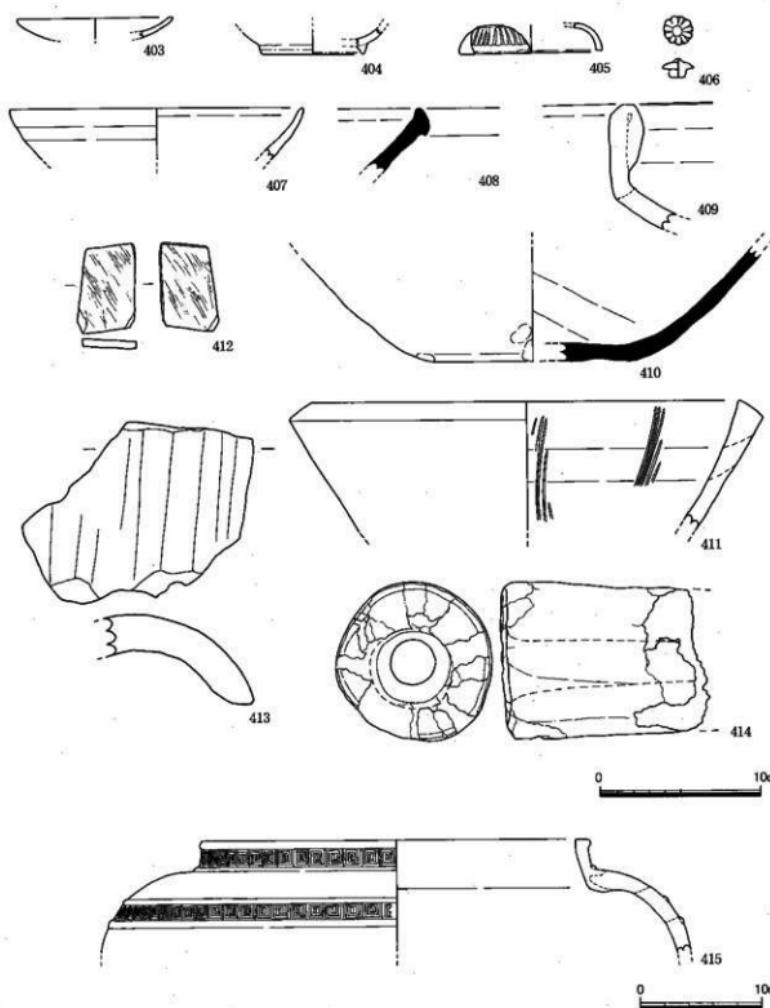


図70 Pit 出土遺物

白磁（403～406）

403は白磁皿である。口縁部は内湾する。透明感のある釉が施釉され、貫入が認められる（森田D群）。404は白磁の端反り皿である。断面三角形の高台から内湾気味に立ち上がる。高台置付の釉は削り取る（森田E群）。405は青白磁の合子の蓋である。外面は丸彫り状の工具により、蓮弁が施される。青味がかった灰白色を呈する釉が外面全体に施釉される。内面及び口部分は露胎である。406は白磁の小型の瓶の蓋と思われる。菊花を彫り込み、中央には小さな突起が付く。裏面は無釉。

瀬戸・美濃系陶器（407）

407は瀬戸の灰釉平碗である。口縁部はヨコナデにより尖る。

東播系須恵器（408・410）

408・410は東播系の捏鉢である。408は口縁端部は上下に拡張がみられ、玉縁状を呈する。410は底部からやや丸味を持って斜上外方に直線的に立ち上がる。底部内面から上半に向って指頭により斜位にナデ調整が施される。外面は指頭圧痕が認められる。

備前焼（409・411）

409は備前産の甕である。口縁部は折り曲げて玉縁状に肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、口縁部下から体部は斜位のナデ調整が施される。411は備前産の摺鉢である。口縁部は外傾する面を成す。5条を基調とする摺目が認められる。内傾接合による接合痕が認められる（間壁Ⅲb期）。

砥石（412）

412は砥石である。両側面は面取りされており、扁平な長方形状を呈する。石質は白色系頁岩である。

瓦（413）

413は丸瓦片である。凸面は長軸方向に向って、継方向のケズリ、凹面には細かな布目痕が認められる。凹面側縁には1.3cm、側面は1.4cmの面取りが施される。

羽口（414）

414は吹子の羽口である。円筒形を呈し、直径9.6cm、中央の円孔は3cmを測る。口の部分には珪酸質の付着が認められる。

風炉（415）

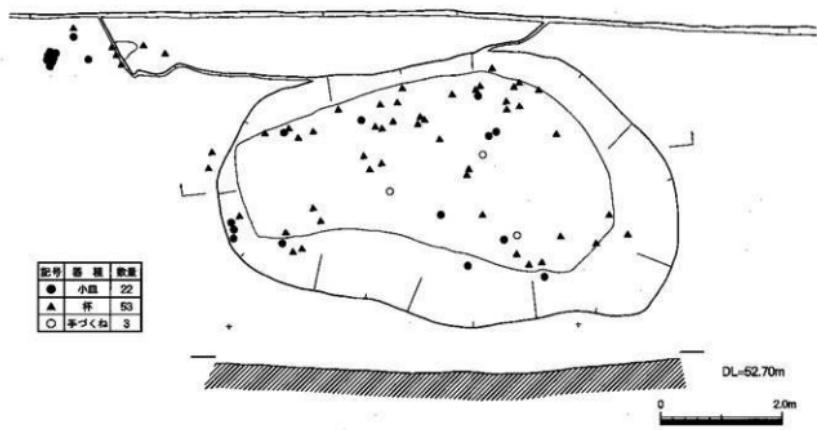
415は土師質土器の風炉である。胴部から大きく内傾し、口縁部は直立する。口縁端部は横方向に僅かに拡張され、水平な面を成す。口縁部上下両端と、肩部に2条の突起が巡り、中に雷文がスタンプで施されている。

(9) 性格不明遺構

SX-1（図71・72）

Q4グリッドを中心にし、調査区の北端部に位置する。長軸7.5m、短軸4.5mの不整椭円形の非常に浅い落ち込み状の遺構である。遺物が土師質土器を中心大量に出土しているので、廃棄土坑的性格をもつ遺構と考えられる。

出土遺物（416～482）



SX 1 平・断面図・出土遺物 ドット図

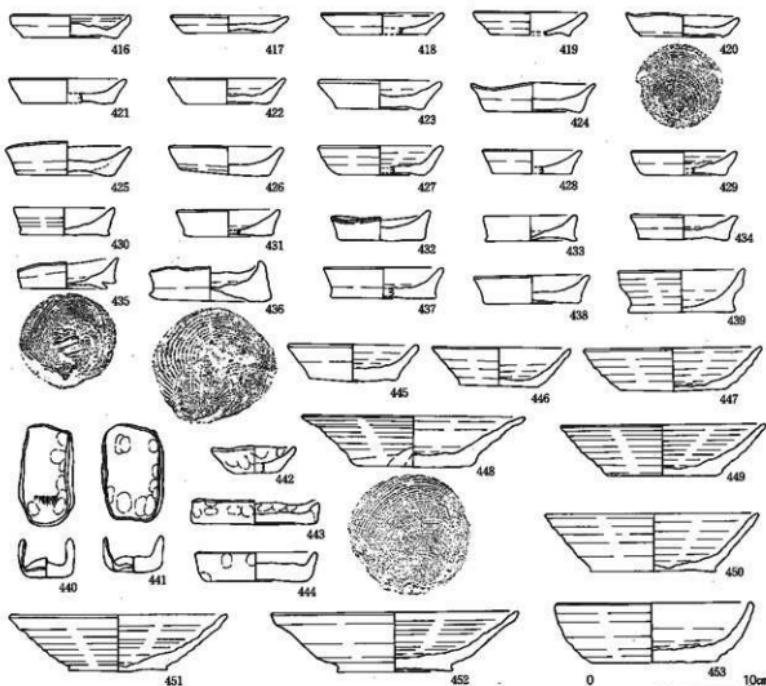


図71 SX 1 出土遺物

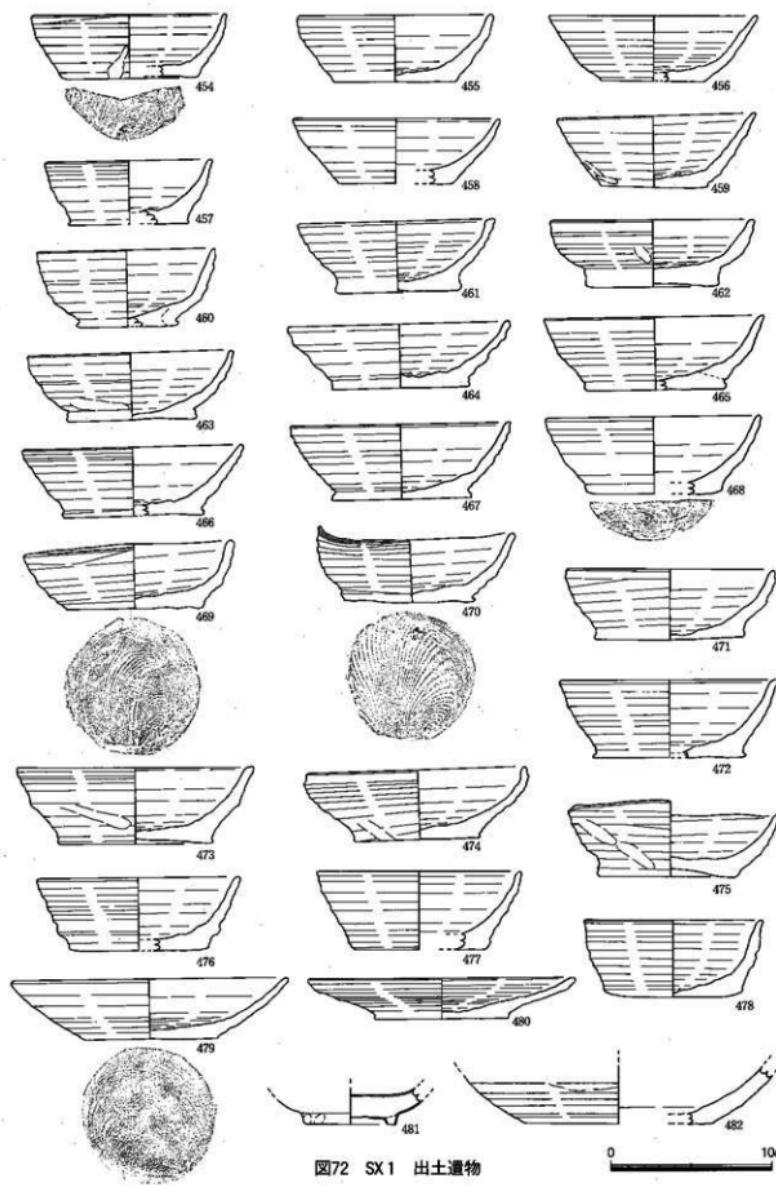


図72 SX1 出土遺物

0 10cm

416~480は土師質土器である。416~444は小皿であり、ロクロ成形のものと、手づくね成形のものが認められる。ロクロ成形のものには、口縁部が外反するもの（416~429）と、直立するタイプのもの（430~438）が認められる。外反するタイプのものは内外面ともナデ調整が施されており、口縁端部が尖るものと、丸味を帯びるものがある。416は内面にナデによる段が残る。420・422は内底部にロクロ目を残す。424は被熟し、一部、赤褐色に変色、歪みが生じる。上方に直立するタイプのものは、内底中央部から口縁部に向ってナデ上げ、端部は尖る。内底中央部は凹み、薄くなるタイプが多く見られる。底径は5.5cm前後のものと、6.5cm以上のものとある。435は糸切り後、ヘラ状の圧痕が認められる。436は被熟し、火彫れ変形している。437は内底部にロクロ目が残る。439はベタ底から段を持って立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内底部中央部は凹む。外面はナデによる段が顕著である。440・441は耳皿である。粘土板の両端を上方に折り曲げる。内外面に指頭による圧痕が顕著である。440は内底部の一部にハケ状のものでナデた痕が認められる。442はベタ底から斜上外方に短く折り曲げる。内外面とも指頭圧痕が顕著である。443は円盤状の底部周縁に粘土紐を輪状に貼り付け、上方に折り曲げる。接合部に指頭による圧痕が連続する。444は円盤状の粘土板の縁を上方に短く折り曲げる。内底部に指頭圧痕が顕著である。445・446は法量が他に比べ小さく、小杯として分類した。ベタ底から斜上外方に立ち上がる。446は445に比べ器壁が薄く、口縁端部は尖り気味になる。447は色調がやや褐色系を呈し、硬質である。器高が低く、皿として分類した。ベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内外面ともナデによる段が顕著である。448~478は杯である。448はベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁部はラッパ状に大きく開く。外面はナデによる段が顕著であり、底部脇から体部にかけ一部指ナデが認められる。449~452はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部が尖る。内底中央部は凹む。内外面にナデによる段が顕著に認められる。色調は褐色系を呈し、胎土中に雲母片が微量認められる。全体的に器壁は薄く、硬質である。453~477は内済するタイプの杯である。453はベタ底から内済する。外面全体及び、内面の体部中位から内底部全体にかけてナデの段が残る。口縁部内面は丁寧なナデ調整が施される。454は内外面ともナデによる段が顕著であり、外面底部脇から上方に向って一部指ナデが認められる。456は他の杯に比べ、器壁が薄く、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内外面ともナデによる段が顕著である。458はやや厚みのある底部から内済して立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。459はベタ底から直線気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。焼成は還元状態に近く、外底部は火だしき状に灰色に変色する。460~462は厚みのある円盤状の底部から内済して立ち上がる。461の口縁端部は水平な面を成す。462は分厚い底部から内済し、口縁端部は細まる。463~475は円盤状の底部から内済して立ち上がり、口縁部は直立するタイプである。底部下半から体部中位にかけて斜めのナデの痕が認められる。粘土紐巻き上げ、ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。底部切り離しは回転糸切りによる。476~478は器高が4.5cm以上を測り、箱形を呈する。ベタ底から上方に立ち上がり口縁端部は尖り気味に仕上げる。478はにぶい褐色系を呈する。底部切り離しは静止状の糸切りである。479は法量が大きく、口径16.6cm、器高3.7cmを測り、口径指数が22.2と低く皿とも呼べる器形である。ベタ底から斜上外方に直線的に開き、口縁端部は尖る。内外面ともナデによる段が顕著である。480は皿である。ベタ底から大きく外反し、口縁部はやや内済気味に上向く。

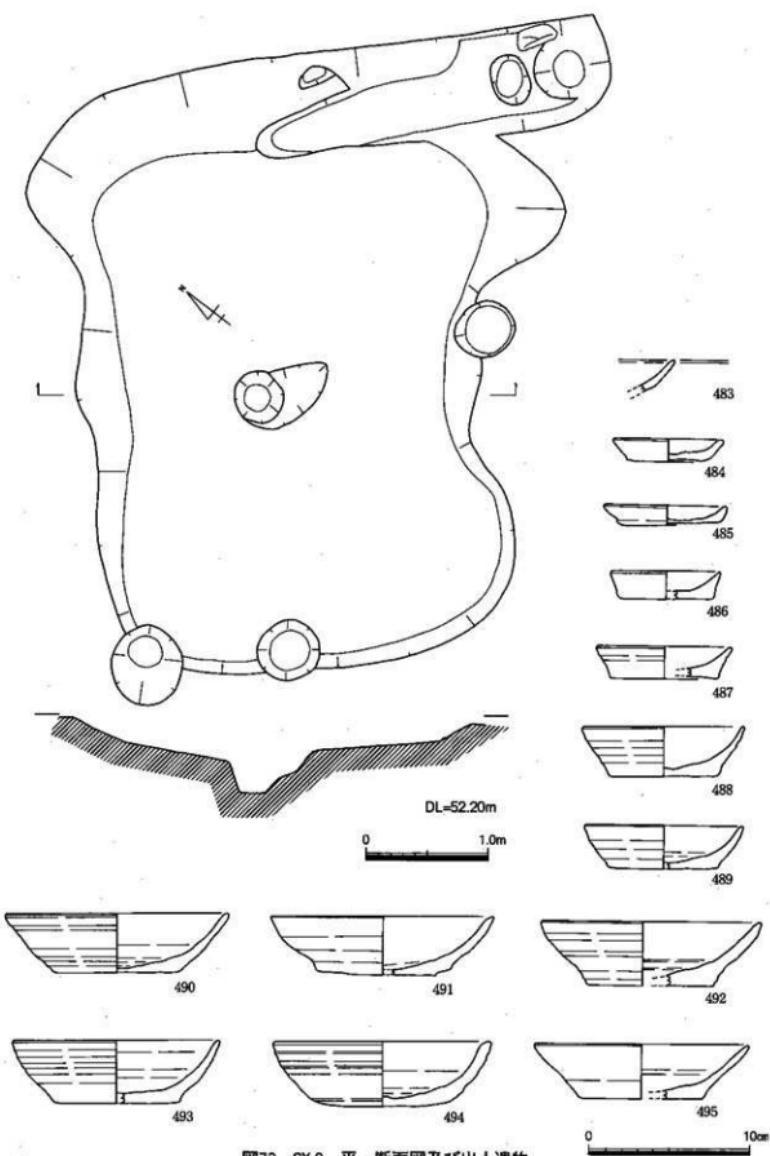


図73 SX 2 平・断面図及び出土遺物

内外面ともナデによる段が顯著である。481は龍泉窯系青磁碗である。断面四角形の低い高台が付く。透明感のあるオリーブ灰色を呈した釉が高台内面まで施釉される。高台外面に釉ツケガケの際、指で押えた痕跡が認められる。482は瀬戸産の灰釉大皿である。ベタ底から斜上外方に大きく開く。内面の体部下半はハケヌリされ、外面は体部下半までツケガケで施釉されており、下半から底部は露胎である（藤沢古瀬戸後期Ⅱ期）。

SX-2 (図73)

堀1と堀2の交点南側に位置する浅い皿状の遺構である。平面形は不整の隅丸方形状を呈する。長軸約5m、短軸約3mで中央部にピットが存在する。

出土遺物 (483~495)

483は瓦器碗である。口縁部はヨコナデが施され、端部は尖り気味に仕上げる。484~495は土師質土器である。484~487は小皿である。484・485はベタ底から短く外反する。内底見込みは凹む。

486・487はベタ底から直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。488・489は法量が他に比べ小さい杯である。ベタ底から内湾気味に立ち上がる。内面は丁寧なナデが施され、外面はナデによる段が残り、内底中央部は凹む。490~493はベタ底からやや段を持ちながら内湾するタイプの杯である。内面は比較的丁寧なナデ調整が施され、外面はナデによる段が残る。内底部見込みは凹む。494は底部に段を持たずに内湾し、口縁端部は丸くおさめる。内底部はナデによる段を残し、内面体部下半から口縁部にかけては丁寧なナデが施される。外面は、体部上半から口縁部にかけてナデによる段を残す。粗雑なつくりである。495はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がり、体部中位からやや外反気味になる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。内面体部中位にナデによる段が残る。

(10) 包含層出土遺物

当遺跡から出土した遺物は40,256点を数えるが、そのほとんどが包含層からの出土である。土師質土器を始め、貿易陶器類、瀬戸・美濃産、常滑産、備前産などの国産陶器類、瓦質土器、東播系須恵器、鉄器、石製品など多種に及ぶ。内訳は別表5を参照されたい。

ここでは、種類ごとに分類し、遺物についての説明を行う。

土師質土器 (496~603) (図74~76)

土師質土器は、供膳具の小皿・皿・杯が中心に出土している。成形・手法がロクロ成形、回転ナデ調整が施されるものと、非ロクロ（手づくり・型づくり）成形でナデが施されているものと大きく2タイプに分類される。ここではロクロ成形のものをA類、非ロクロ成形のものをB類に分け、それぞれ形態・手法・色調など特徴的なところで細分を行う。

小皿 (496~542)

小皿はロクロ成形（A類）のものと、手づくり成形（B類）のものとがある。

A 1 a 類：(496~503)

ロクロ成形。外反する。内面は全体に丁寧なナデが施される。外底部に回転糸切りの後、ヘラ状の圧痕が認められる。器壁は薄く硬質であり、色調は浅黄褐色を呈する物が多い。胎土の砂粒は細

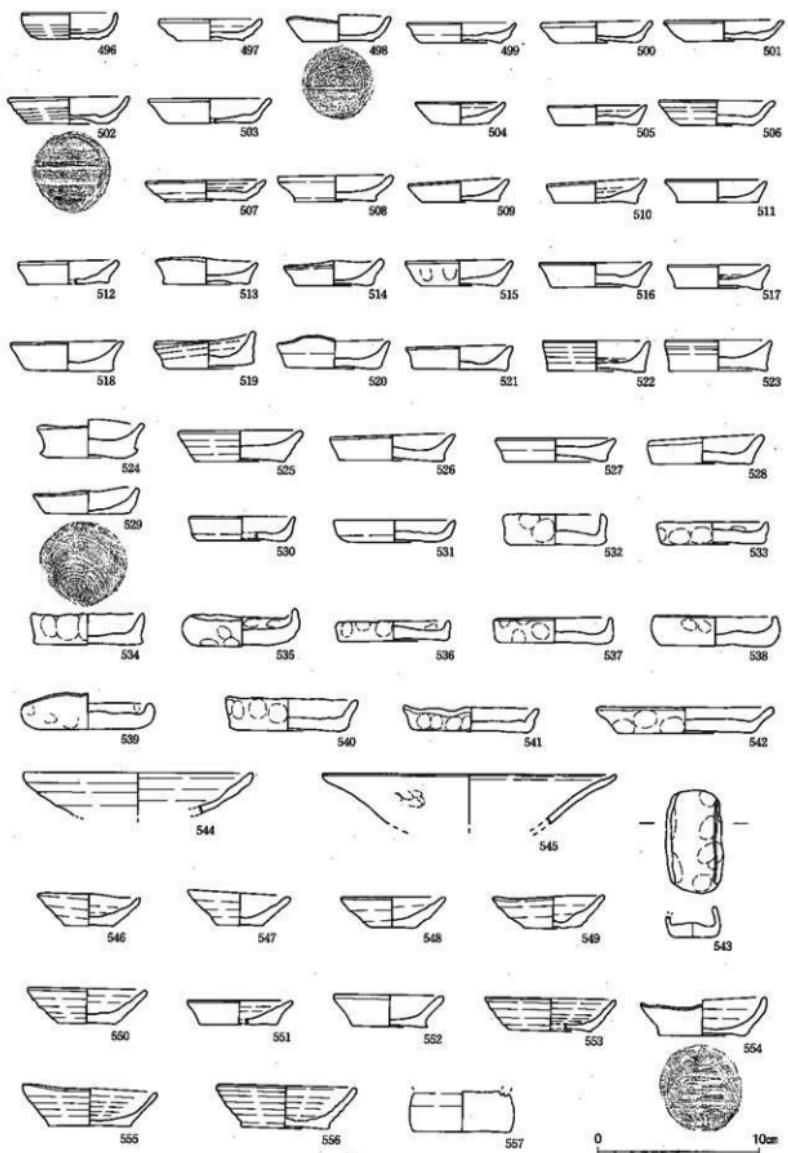


図74 包含層出土遺物（土師質土器小皿・小杯）

かく緻密である。496・502は内湾気味であり、外面はナデによる段が残るものであるが、外底部の圧痕や、器壁の薄さ、胎土・色調などからみて同一群であると考えられる。

A 1 b 類：(504～508)

ロクロ成形。外反する。内底部にロクロ目を残すもの。法量・形態によって細分できる。底径が3.6cm大のもの(504)、5.0cm前後のもの(505～508)とがあり、507・508はやや内湾気味であり、口縁端部はやや丸味を帯びる。体部内面にはロクロ目を残す。

A 2 類：(509～517)

ロクロ成形。斜上外方に短く立ち上がり、口縁端部は尖る。内底中央部から短くナデ上げるため、内底部は凹む。底径4.8～5.4cm前後を測り、器高は1.3～1.6cmである。516は、内底周縁部が凹む。

A 3 類：(518～528)

ロクロ成形。短く直立し、口縁端部は尖る。雑なつくりで胎土には5mm大の角礫が認められる。底径が5.5cm前後を測るもの(518～524)と、6.5cm前後のもの(525～528)と大小がある。底径が5.5cm前後のものは、器高で細分も可能かと思われるが、成形が均等でなく、被熱、変形しているものが多く基準にのらない。526～528は比較的丁寧なナデ調整が施されている。

A 4 類：(529～531)

ロクロ成形。短く内湾し、口縁部は尖り気味である。外面底部脇がナデにより丸味を帯びる。

B 1 類：(532～542)

手づくね成形。底部周縁を上方に短く折り曲げる。内外面とも指頭圧痕が顕著である。直立するタイプ(532～534・536・537・540・541)と、丸味を持つタイプ(535・538・539)が認められる。542は底径が大きく斜上に開く。543は耳皿である。B 1 類と同じ胎土・手法で底部の両端をつまみ上げる。

皿(544・545)

B 2 類：(544)

手づくね成形。内湾する。体部上半から口縁部にかけてはヨコナデ調整。口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面下半に指頭圧痕が認められる。

B 3 類：(545)

手づくね成形。体部上半で外反し、口縁端部は上方に僅かにつまみ上げる。外面体部上半の一部に指頭圧痕が認められる。

小杯(546～556)

小皿とも呼べるが、ここでは形態からみて小杯とした。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。ラッパ状に聞くタイプと、内湾気味になるタイプがある。

A 1 類：(546～552)

ベタ底から斜上外方に大きく聞く。底径指数(底径+口径)が48.0以上を測る。549・550はやや法量が大きく、549は内底周縁部が凹む。551・552は底径指数が67.0～71.0を示す。

A 2 類：(553～556)

ベタ底からやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともナデによる段が顕著である。

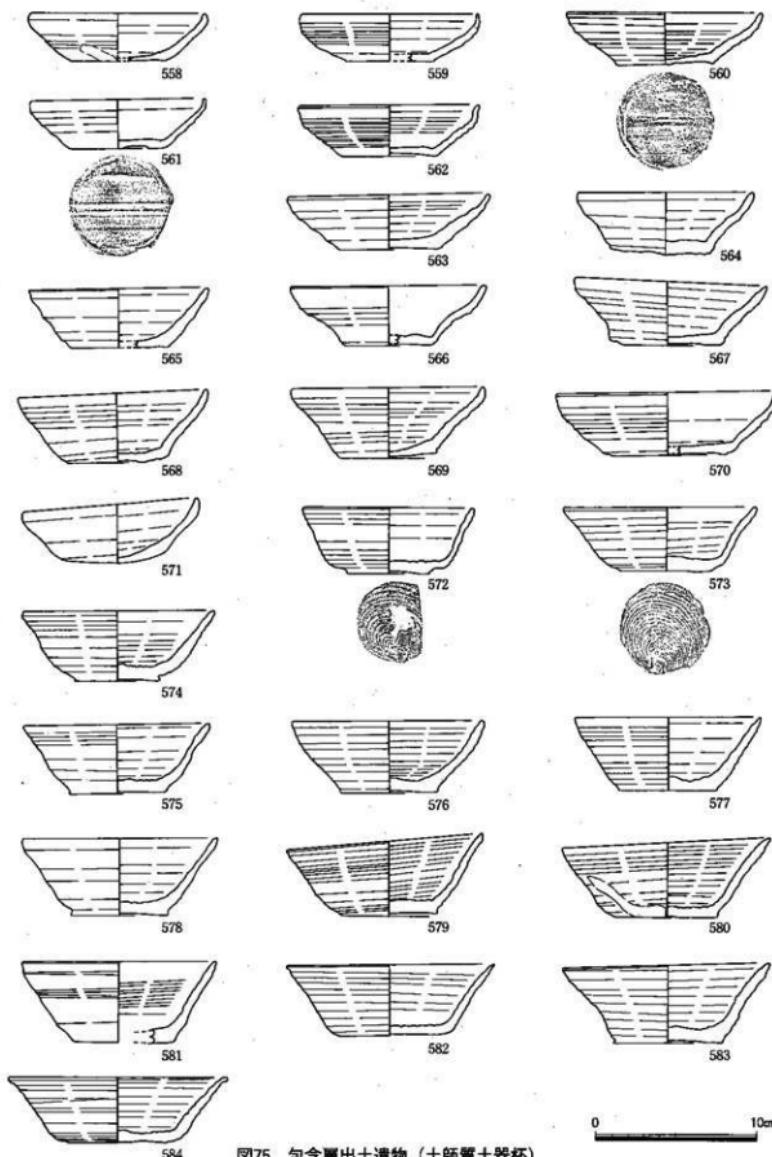


図75 包含層出土遺物（土師質土器杯）

557は円柱状の底部片である。上面にロクロ目が残り、下面には糸切り痕が認められる。

杯 (558・598・601・603)

杯は、全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる (571のみ内型づくり)。形態的にみて皿とも呼べるものがあるがここでは、杯として分類を行う。

A類：(558～570)

ベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部上半から口縁部にかけて済曲し、口縁端部が上向き尖るタイプの杯である。器壁が薄く硬質であり、色調は浅橙色から白色系を呈する。内面は比較的丁寧なナデが施されるが、外面はナデによる段が顕著である。口縁端部はつよいヨコナデにより、意識的に尖らす。粘土紐巻き上げ、ロクロ成形、内面はナデ調整が施される。内底部は指頭により一方に向かって丁寧にナデる。外底部は、糸切り後、ヘラ状圧痕が認められる (伊野分類Gaタイプ4次模倣系)。

①A 1類：器高が2.9～3.3cmを測る低いタイプ (558～563)

②A 2類：器高が3.6～4.4cmを測る高いタイプ (564～570)

に分類できる。570は、他に比べ、法量が大きい。

571は内型づくりで成形されており、ナデ調整が施される。丸底風の底部を呈し、体部上半から口縁部にかけて内湾する。口縁端部はヨコナデにより尖り気味に仕上げる。内底部には「の」字状に指でナデた痕跡が認められる。胎土中には石英・チャートなどの砂粒が認められ、色調は灰白色を呈する。

B類：(572～586)

やや、段のある底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。粘土紐巻き上げ、ロクロ成形で、回転ナデ調整が施される。内底部には粘土紐の単位が渦巻き状に認められる。胎土中には0.5～1.0cm大の角礫が認められる。572～576は口縁端部を丸くおさめる。579～584はやや法量が大きく、口縁部の外反度がつよく、口縁端部は尖り気味になる。585・586は器高が高く、やや箱形を呈する。外面底部脇を上方に向って斜位にナデた痕跡が認められる。法量の大小で、B 1類・B 2類として分類した。

C類：(587～596)

ベタ底の底部から段を持って内湾しながら立ち上がる。胎土中に1cm大の角礫を含み、被熱、変形しているものが多い。

C 2類：(597・598)

C類と同じタイプであるが、外面底部から体部下半のナデが比較的丁寧であり、体部上半で内湾する。器高に対して、底径と口径の差が大きい。C類に比べ、胎土は精緻である。

小杯類：(599～603)

法量が他に比べ小さく、小杯として分類できるタイプである。599・600はベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。口径と底径の差があまりない。601は杯Cの小型のタイプである。底径の大小で大きく2つに分かれる。602・603は底径と口径の差が大きく、ラッパ状に開く。

瓦器碗 (604～607) (図76)

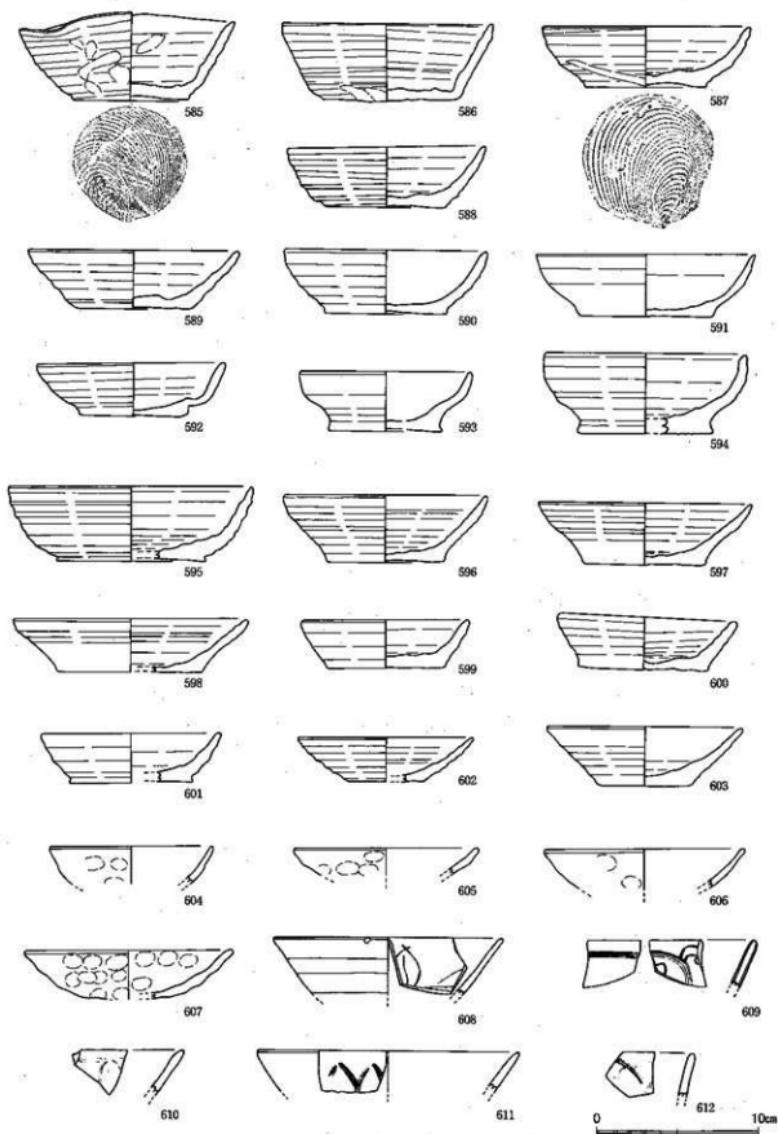


図76 包含層出土遺物（土師質土器杯・瓦器碗・青磁碗）

604～607は和泉型の瓦器碗である。外面体部下半に指頭圧痕が顯著である。体部は内湾し、口縁部はつよいヨコナデにより外反し、端部は丸く納める。607の法量は他に比べやや大きい。内面にはヘラミガキの痕跡は認められない。

青磁（608～642）（図76・77）

608～635は青磁碗である。608・609は内面に草花風の文様が片彫りされる。龍泉窯系I－2類の青磁碗である。610～623は蓮弁文碗である。610・611は幅広の蓮弁文であり、鎬の稜が認められる（B－1類）。612～615は幅広の蓮弁文であるが鎬は認められない（B－2類）。615は見込みに花文様のスタンプが施される。616～623は細線刻蓮弁文である（B－4類）。616～618は劍頭と蓮弁の単位が意識して施されている。619～622は劍頭と蓮弁の単位にズレがあり、621・622は劍頭が省略されている。623は見込みに菊花文のスタンプが施され、中央に「玉」のスタンプが認められる。624～630は外面口縁部に雷文帯が認められる（C－2類）。631・632は外面体部下半に片切形による幅の広い蓮弁文が施され、632の見込みには花文のスタンプが認められる。633～635は無文の碗である。633の口縁部は僅かに外反し（D類）。634・635の口縁部は内湾する（E類）。636～638は稜花皿である。636・637は口縁端部に抉りが認められ、内面には草花と波状の文様が施される。638は法量が大きく盤とも呼べる器形である。内面には草花風の文様が施され、口縁内面には波状文が認められる。見込みには目痕が認められる。外面は丸彫りで蓮弁が施される。639は香炉である。口縁端部は内側に突出する。口縁部内面まで施釉が認められ、下半は非施釉である。640は青白磁の合子で、いわゆる袋物である。外面は唐草文風の文様が掘り込まれ、薄く青味がかた透明感のある釉が全面施釉されるが、口縁端部の釉は削り取る。641は高麗青磁である。箱状器形の一部か、脚部ではないかと思われる。外面には如意頭文が認められ、青灰味がかたオリーブ色の釉が薄く施釉される。胎土は暗灰色を呈する。642は青磁皿である。削り出しによる断面四角形の扁平な高台が付く。内面には丸ノミ状工具により、菊花風の模様が彫り込まれる。外面は、幅の狭い丸ノミ状工具により幅狭い蓮弁が施される。全体的に青白色を呈した透明感のある釉が施釉され、疊付から外底部にかけては無釉である。外底部は胎土の鉄分が焼成により赤橙色を呈する。菊皿風であるが産地は不明である。

白磁（643～658）（図78）

643は白磁碗である（V類）。口縁端部は外反し、内面には口縁部下と体部下半に一条の界線が認められる。644～647は口縁部が口禿げの皿である（森田区類、A群）。648～650は高台に抉りが入り、アーチ状を呈した皿である（D群）。乳白色を呈した釉が施釉され、内面には目痕が認められる。651～655は口縁部が端反り器形の皿である。657は菊皿である。内外面に同じ丸ノミ状工具による菊花文が施される。656は小杯である。断面三角形の低い高台が付く。外面には丸ノミ状工具による彫り込みが認められる。高台は無釉で、全体的に乳白色を呈した釉が薄く係る。肥前系。658は器種は不明であるが、上面に丸ノミ状工具による抉りが認められ、一部、欠損しているが円孔が認められる。全体的な形状は一部が欠損しており不明である。背面（平坦な面）は施釉されてない。

青花（659～680）（図78）

659は基筒底を呈した皿である（C群）。外面は芭蕉葉文、内面は見込みに植物（芭蕉）を描く。底部疊付は露胎。一部、砂の付着が認められる。660～666は端反り皿である。外面に牡丹唐草、内

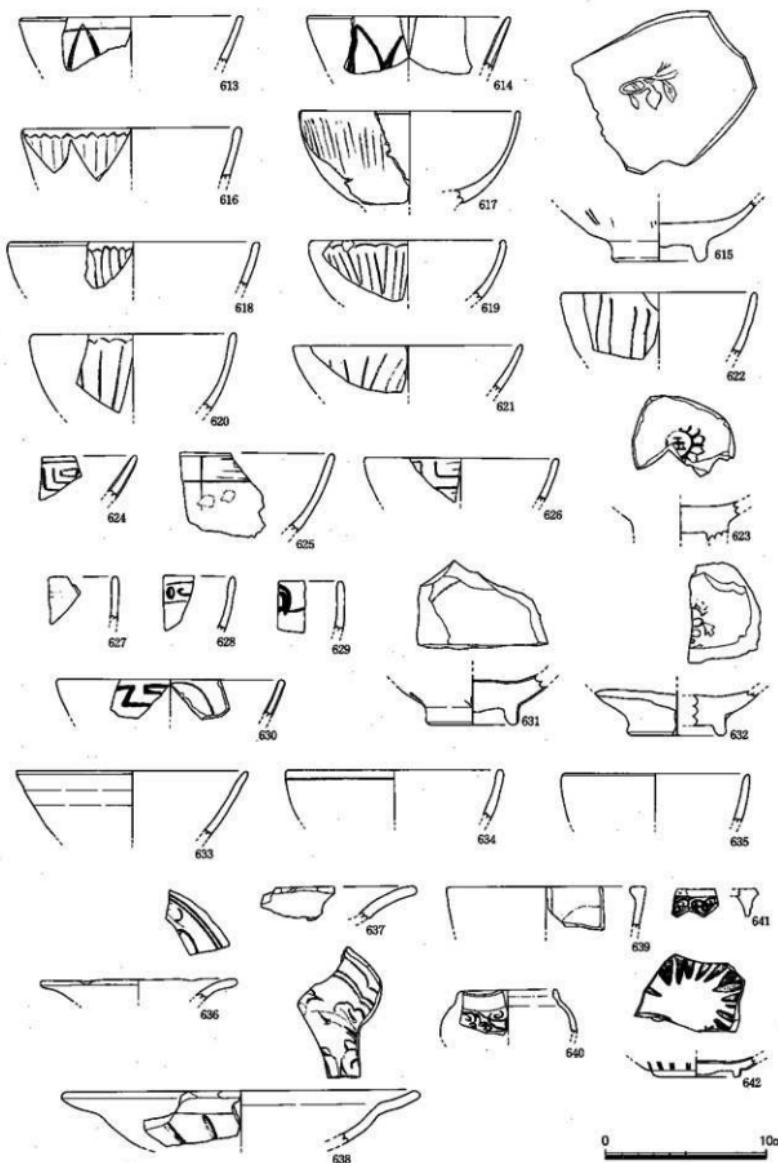


図77 包含層出土遺物（青磁碗・皿・香炉・袋物・高麗青磁）

面見込みには玉取獅子が描かれる（B1群）。660は他に比べ法量が小さい。661は高台端の釉を拭き取り、高台外面に細かい砂の付着が認められる。662は透明釉が雑に薄くかかる。見込みの一部に透明釉が掛かっていない箇所が認められ、胎土の鉄分が赤褐色を呈する。高台外面には界線が認められるが、1条は途切れている。全面施釉であるが、高台端の釉は拭き取られ、高台外面には細かい砂の付着が僅かに認められる。664は高台外面途中から外底部にかけては無釉である。666は透明釉が比較的厚く全面施釉されており、特に、高台脇に釉が厚く溜まる。高台端の釉は削り取る。667～671は碗である。667・668の口縁部は内湾する。667は外面胴部に芭蕉葉文、口縁部に波涛文が施され、口縁部内面には界線が巡る（C群）。668は外面口縁部に界線、胴部に花文が描かれ、内面白縁部には、雷文帯か四方襷文が施される。全体的に薄い釉調で滲みがあり、文様の内容は判別しがたい（E群）。669は碗の底部片である。見込みには花文、外底部には「長命富貴」の字款が認められる（E群）。670は外面に芭蕉葉文が描かれる（C群）。671は胴部外面に唐草文が描かれる。やや、くすんだ釉が薄く施釉される。672・673は皿である。口縁部は葵花形を呈する。外面には渦文が連続して描かれ、内面は何らかの文様帯が巡る。673の体部には、丸ノミにより蓮弁文風に抉りが入る。674～677は華南系の青花皿の一群である。674外面には芭蕉葉文と波涛文くずれの文様帯が認められる。口縁部内面には1条の界線が巡る。釉調は薄く、潤った乳白色を呈し、貫入が認められる。675も口縁部に文様帯が巡るが、674と同様の波涛文くずれの文様帯と考えられる。676は外側に開き気味の高台が付く。釉調はくすんだ淡いオリーブ灰色を呈した透明感のある釉が施釉されており、内面白見込みは蛇目釉剥ぎが認められ、外面は高台外面途中まで施釉が認められる。置付けには、植物繊維質の付着が認められる。胎土は黄白色を呈した陶器質である。外面に体部下半に2条の界線、連続した列点文が施される。677は外側に開く高台が付く。釉調は、透明感のある釉が外面高台脇まで施釉されており、内面白見込みは蛇目釉剥ぎが認められる。高台から外底部は錯釉が施され、内面白見込みの蛇目釉剥ぎ部に、重ね焼きのためか高台の錯釉の付着が認められる。678は腰折れ器形の碗であり、断面三角形の高台が付き、腰折れて上方に立ち上がる。外面は繊細な筆致で草花風の文様が描かれ、内面白見込みには唐草風の文様が描かれ、周縁の腰折れ部に二重の界線が巡る。679は大皿の口縁部と考えられる。口縁部外面に雷文帯、内面には何らかの文様帯が巡る。釉調は透明感があり、吳須は鮮やかなコバルト色に発色している。680は器形は不明であるが徳利形をした瓶子の口縁部ではないかと思われる。口縁端部は界線が巡り、肩部（胴部）には界線下に渦巻文風の文様帯が巡る。

瀬戸・美濃系陶器（681～693）（図79）

681～686は天目茶碗である。681・682は中国産の天目茶碗である。681は内湾し、682は口唇部が外反する。681・682ともに黒褐色を呈した透明感のある釉が施釉されており、681は口唇部に錯釉が認められる。682は禾目状に錯釉がかかる。683は口縁部が直立気味になり、口唇部は尖る。赤っぽい褐色を呈する（後Ⅲ期）。684～686は天目茶碗の底部である。684は削りだしの輪高台であり、高台脇はシャープに削り取る。内面には鉄釉が施釉されるが、被熟し、釉の剥落が著しい。685は高台脇はシャープに削られ、外底部は浅く削り込まれ高台を呈する。高台周辺には暗灰色を呈した鉄化粧が認められる（中Ⅲ期）。686は削りだし内反り高台である。赤褐色を呈した鉄化粧が施される（後

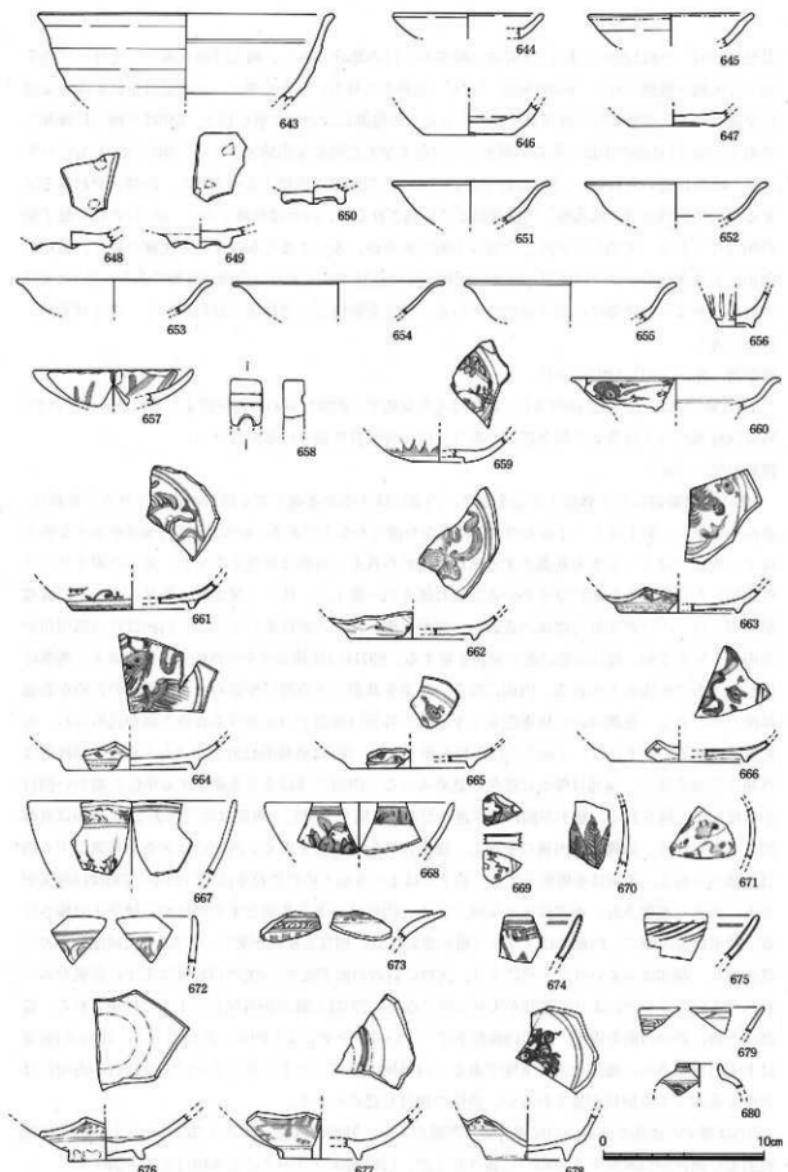


图78 包含层出土遗物（白磁碗·皿·青花碗·皿）

Ⅲ期)。687・688は鉢皿である。687は口縁部の片口の部分であり、端部は面を成す。オリーブ色を呈した灰釉が施釉される。688は底部である。底部から外方に大きく開く。内面には単位が疎らな鉢目が施され、一部摩耗した使用痕が認められる。外底部には糸切り痕が残る。689は平碗の口縁部片である。690は折縁の小皿である。明オリーブ色を呈した釉が全面施釉される。689・690ともにハケヌリの痕跡は認められない。691は筒形香炉である。口縁部は内傾する面を成し、内側に突起状を呈する。灰釉が外面は全面施釉、口縁端部まで施釉されるが、内面は無釉である。692は水注か瓶子類の胴部片である。欠損しており、全容は不明であるが、3~4条を基調とする沈線が巡り、菊花の印花文が施される。ロクロ成形。外面は灰釉が全面施釉されており、内面は無釉である。693は大皿の底部である。外底部に糸切り痕が認められ、粘土を貼付した突起状の高台が付く。ロクロ成形、無釉である。

備前焼 (694~704) (図79~81)

694は鉢である。口縁部は内湾し、端部は尖り気味で、内面に斜めの面を成す。重ね焼きのせいか、外面口縁部から下は還元で須恵器質であり、口縁部は自然釉の付着が目立つ。

擂鉢 (695~705)

695の口縁端部はやや外傾する面を成す。内面には5条を基調とする摺目が認められる。色調は、赤褐色を呈し、胎土は1~2mm大の白色粒を含む滑らかな土である。696は、口縁端部が水平な面を成す。内面には5~6条を基調とする摺目が認められる。外面は褐色系を呈し、溗った明オリーブ色を呈した自然釉が筋状に厚くかかる。重ね焼きの一一番上に、伏せて焼かれた製品らしく、口縁端部の面には、下に置かれた擂鉢の表面の一部が剥離したものが付着している。内面は片口部周辺が赤褐色を呈するが、他は灰色に近い発色を呈する。697は口縁端部がやや外傾する面を成す。端部は僅かに下方に拡張がみられる。内面には7~8条を基調とする摺目が認められ、使用のためか表面は滑らかである。色調は淡い灰褐色を呈するが、外面口縁部下の部分は重ね焼き痕が認められ、赤褐色を呈する。胎土には、1mm大の白色粒を多く含む。698は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は外傾する面を成し、端部は僅かに拡張が認められる。内面には12条を基調とする単位の細かい摺目が口縁部まで施される。胎土が他に比べ違いがあり、灰色を呈し、角礫は殆ど含まない。699は直線的に立ち上がり、口縁部は内側に肥厚し、端部は外傾する面を成す。内面には8条を基調とする摺目が認められる。色調は赤褐色を呈し、胎土には1~5mm大の白色粒が認められる。700は口縁部が上方に大きく拡張され、端部は尖り気味である。内面は5条を基調とする摺目が口縁下まで施される。使用痕が明瞭で、内面にはスリップ痕が認められ、摺目も摩耗が著しい。701の口縁部は上方に拡張され、端部はつよいヨコナデにより、内側に斜めの面を成す。702の口縁部は上下に拡張がみられ、つよいヨコナデにより、端部が尖り気味になる。703は口縁部が外反し、上方に拡張される。端部は内側に斜めの面を成す。内面口縁部下はつよいヨコナデにより凹み、段が生じる。704の口縁部は上方に拡張され、端部は尖り気味である。口縁屈曲部は、つよいヨコナデにより凹む。内面には9条を基調とする摺目が施されるが、斜位の摺目も認められる。

705は壠産の擂鉢である。口縁部外面は凹線が入り、外面口縁部下はヨコ方向にケズる。内面は比較的荒い摺目が口縁部下まで均一に施されるが、口縁部はヨコナデにより摺目をナデ消す。

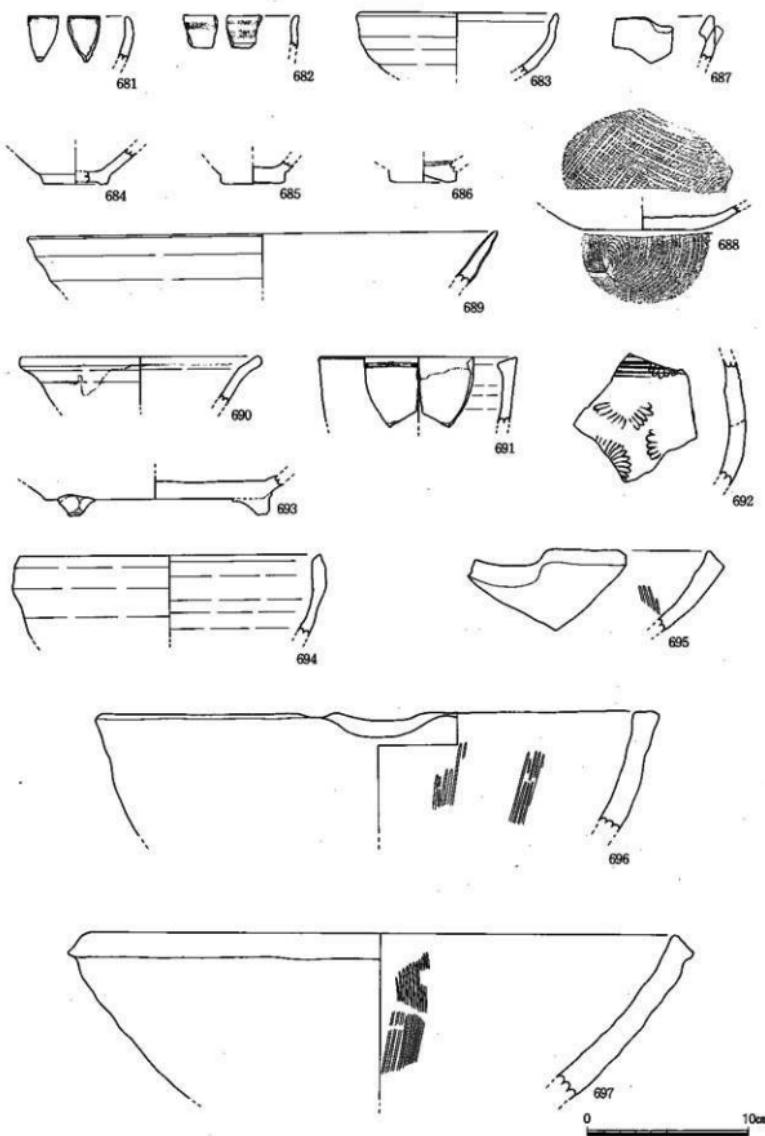


図79 包含層出土遺物（天目茶碗・瀬戸美濃系陶器・備前焼鉢・擂鉢）

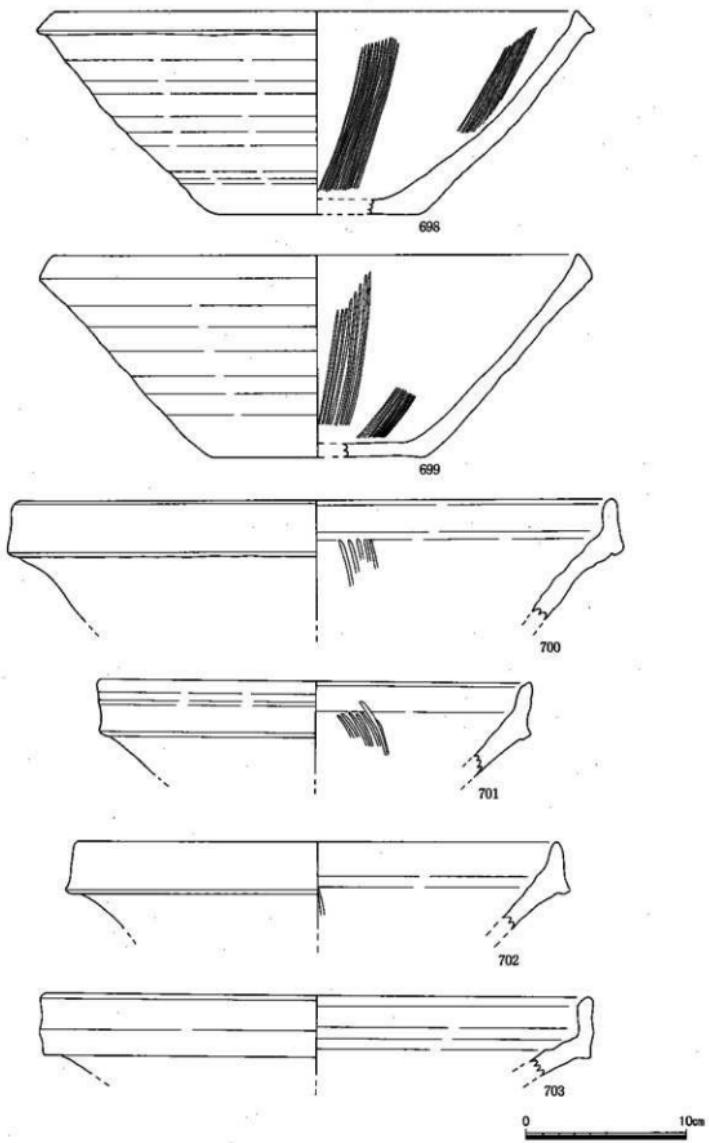


図80 包含層出土遺物（備前焼擂鉢）

東播系須恵器（706～709）（図81）

706は碗である。口縁部が僅かに肥厚する。707～709は捏鉢である。707の口縁部は僅かに肥厚し、端部はつよいヨコナデにより内側がやや凹む。707は法量が小さく、小型の片口鉢と考えられる。708・709ともに口縁部が上下に肥厚する。口縁部はつよいヨコナデにより、内側が凹む。片口鉢と考えられる。

常滑焼（710～712）（図81）

710は壺の底部片である。外面は下から上方向に向かってヘラ削りが認められ、内面は、一部指頭圧痕が認められる。焼成が悪く、赤橙色を呈する。711は広口壺である。口縁部は外反し、外側に折り曲げ、「N」字状を呈する。縁帯の幅は2.3cmを測り、上端は水平な面を成す。712は壺の胴部片であり、押印文が施される。色調は赤褐色を呈する。

備前焼壺・壺（713～715）（図81）

713は壺であり、肩部にかけてなだらかに張る器形であり、口縁部は短く直立し、端部は外側に少し折り曲げる。714も壺の胴部片である。外面には自然釉がかかり、7条を基調としたハケ状工具により、波状文が施される。胎土には白色の角礫が認められる。715は壺の口縁部片である。僅かな頸部を持ち、口縁部は外側に大きく折り曲げ、玉縁状を呈する。5mm～1cm大の白色の角礫を含む。

褐釉壺（716～718）（図82）

716は褐釉のかかった壺である。肩部から内傾し、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部は、外側に折り曲げ玉縁を呈し、端部は、つよいヨコナデにより内側が凹み尖り気味になる。タイのノイ川窯産の製品である。717は黒褐釉の四耳壺の胴部片である。把手状の耳の部分が欠損しており、全容は不明である。外面には黒褐釉が施釉されるが、被熱し、貫入が入る。胎土は暗青灰色を呈し、白色粒が目立つ。718も黒褐釉の壺である。肩部から頸部にかけて内傾する。外面に透明感のある黒褐釉が施され、ヨコナデ痕の箇所には釉が厚く溜まる。頸部と胴部の境に凸帯状の段が認められる。内面にはヨコナデ痕が認められ、無釉である。他と同様に胎土には白色粒が目立つ。

羽釜（719・720）（図82）

719・720は瓦質の羽釜である。口縁部はほぼ直立し、端部は水平な面を成す。鍔は、ほぼ水平に付けられ端部は水平な面を成す。鍔の取り付け部はつよいヨコナデによりやや屈曲する。口縁部外面は四線状に3条ナデ痕が認められ、内面はヨコ方向のハケ調整が施されるが上端はナデ調整によりハケ目が消える。719は外面鍔上面から口縁部にかけてカーボンは認められない。

鍋（721～723）（図82）

721は瓦質の鍋である。体部から口縁部にかけて内済し、口縁部下に粘土帯を張り付けた突帯状の鍔が付く。口縁部はヨコ方向のナデ調整が施され、端部は内傾する面を成す。鍔端部もナデにより平坦にする。外面の鍔より下にカーボンの付着が認められる。722・723は土師質の鍋である。722は鍔が付くタイプの鍋である。口縁端部は僅かに肥厚し、内面に面を成す。鍔の取り付け部と口縁部をつよくヨコナデするため鍔が少し下がった様になる。体部下半に最大径がくるタイプの鍋である可能性がつよい。723は胴部が僅かに内済し、口縁部は外側からヨコナデが施され外傾する。外面の一部に指頭圧痕が残る。

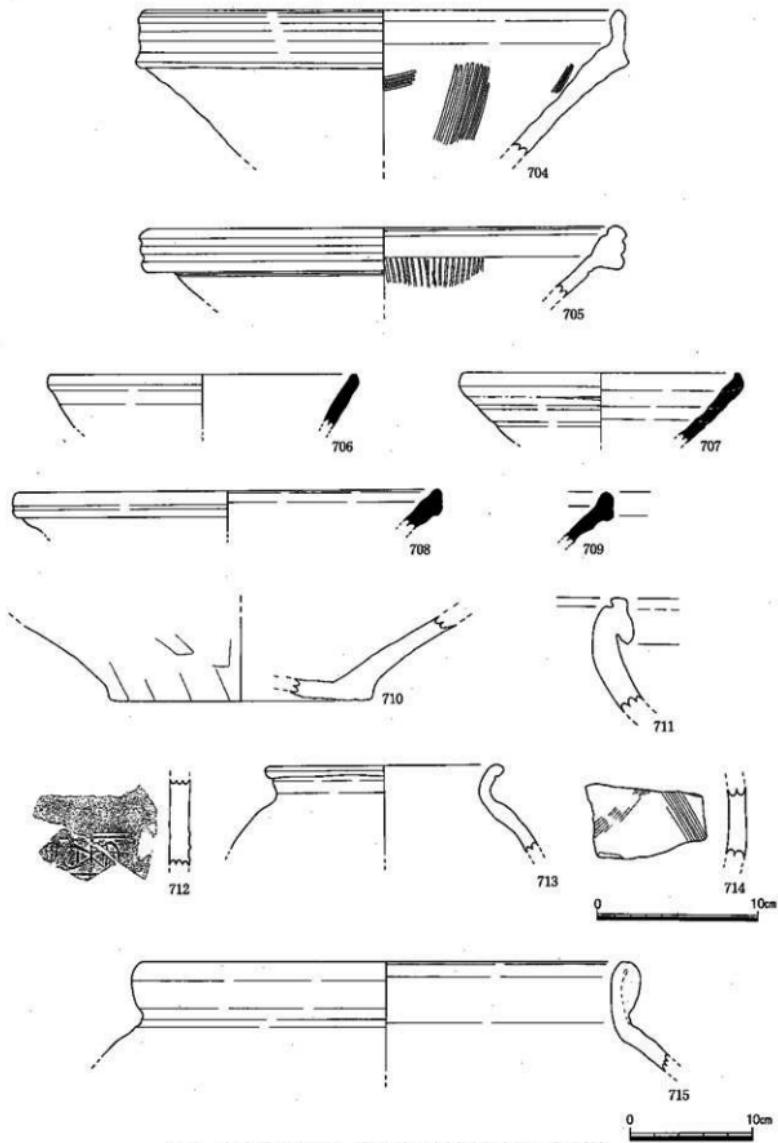


図81 包含層出土遺物（備前焼・東播系須恵器・常滑焼）

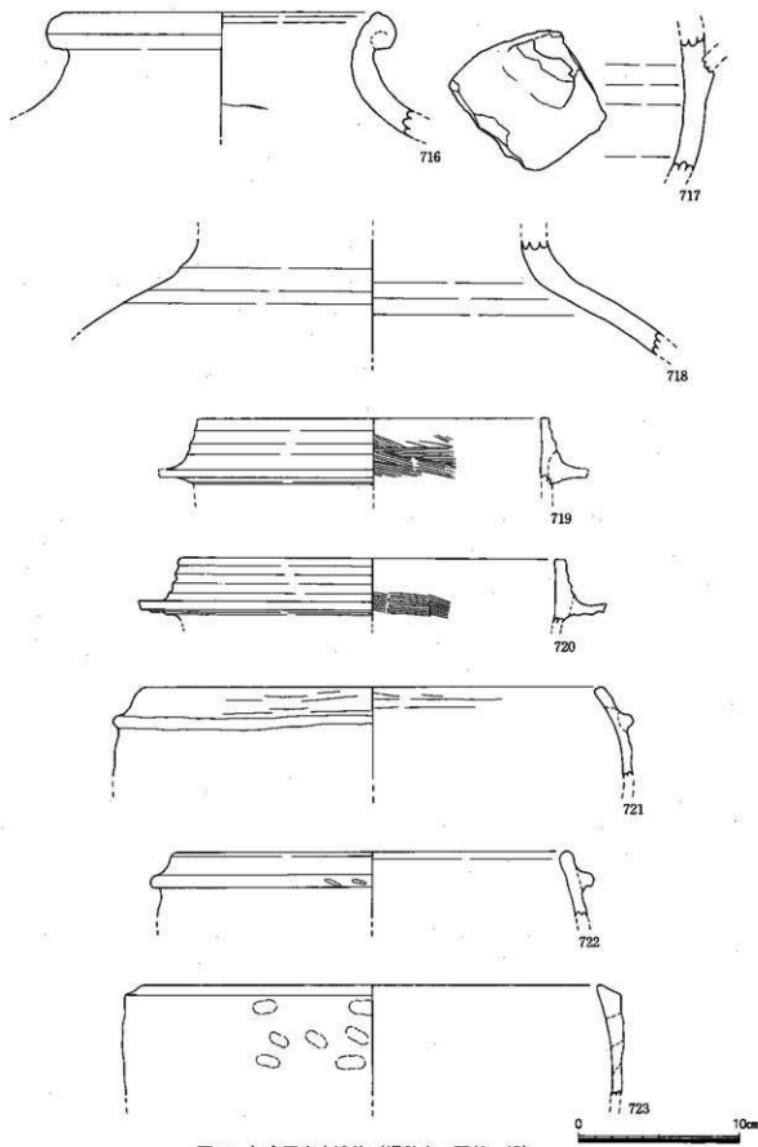


図82 包含層出土遺物（褐釉壺・羽釜・鍋）

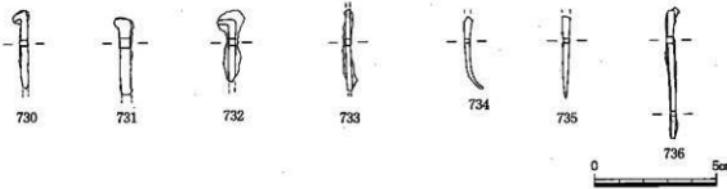
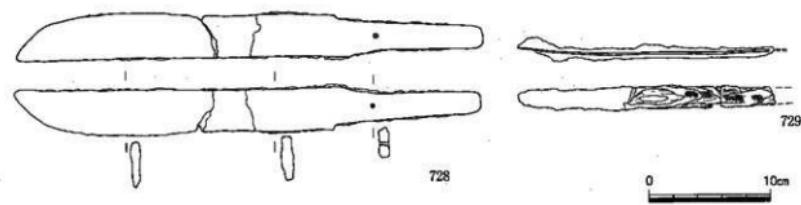
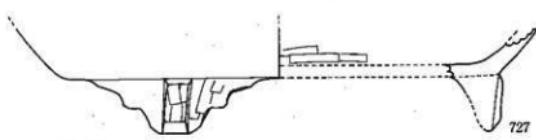
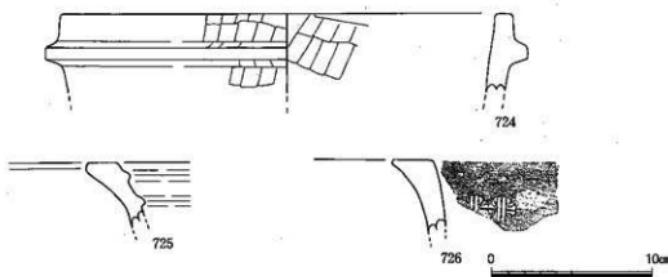


図83 包含層出土遺物（石鍋・火鉢・鉄製品）

石鍋（724）（図83）

724は滑石製の石鍋である。口縁部直下に削り出された鶴が巡る。鶴はやや小さい断面正台形を呈し、垂れ下がっている。端部は水平に削り面を成す。

火鉢（725～727）（図83）

725・726は火鉢の口縁部片である。725は瓦質である。口縁部は大きく内傾し、端部は水平な面を成す。口縁部外面には2条の凸帯が巡り、区画帯をもつ。摩耗が著しく、区画帯の中の文様は不明である。726は土師質の火鉢ではないかと思われる。口縁部は内側に肥厚し、端部は水平な面を成す。外面には、印花文が巡る。胎土中には、石英、チャートなど1～2mm大の角礫が含まれる。

727は土師質の風炉の脚部ではないかと思われる。底部は平底で比較的薄いつくりである。内面はヨコ方向のヘラ削りが認められる。段状に削り出した脚が付く。

鉄製品（728～736）（図83）

728は刀子で全長38.4cm、刃渡り25cmを測り、柄の部分は直径3.5cmの円孔が認められる。729は小柄で残存長21.0cmを測る。730～736は鉄製の和釘である。730～732は頭部を潰して片方に折り曲げた形態の角釘である。断面形はほぼ正方形である。欠損しているものが多く、全長は不明なものが多いが、5～8cm大のものと3～4cm大のものとが主流を占める。断面形は全て正方形に近く、厚みは長いタイプが0.8cm、短いタイプのものは0.4cmを測る。

砥石（737～740）（図84）

737は全長13.1cm、厚さ2.0～3.1cmを測り、直方体を呈した中砥石である。研ぎ面の中央部は研ぎ減りをしており、横からの断面形をみると弧状を呈する。石質は流紋岩製である。738・739は短冊形を呈した扁平な仕上砥石である。石質は頁岩であり、738は節理面によって剥離している。739は側面もよく使用されており、擦痕が認められる。740は全長23.7cm、全幅5.5cm、厚み2.7cm前後を測る大型品である。断面形が直方体を呈し、四面ともによく使用されている。石質は砂岩製である。

瓦（741）（図84）

741は丸瓦である。側面1.3cm、凹面側縁1.5cm幅の面取りがみられる。外面には縄叩きの痕が認められる。

土錐（742～748）（図84）

742～748は全て管状土錐である。欠損しているものが多く、全長は不明なものが多いが、重量が4.5g前後のもの（742・743）と、6.0g前後（744～746）、8.5g～10.5g前後のもの（747・748）とがある。748は全長6.1cmを測り、細長い形状である。

土製品（749）（図84）

749は犬形の土製品である。犬が座った状態で表現されているが前両足が欠損している。型づくりによる製品であるが左右の合わせにズレが生じる。全長4.1cmを測る。

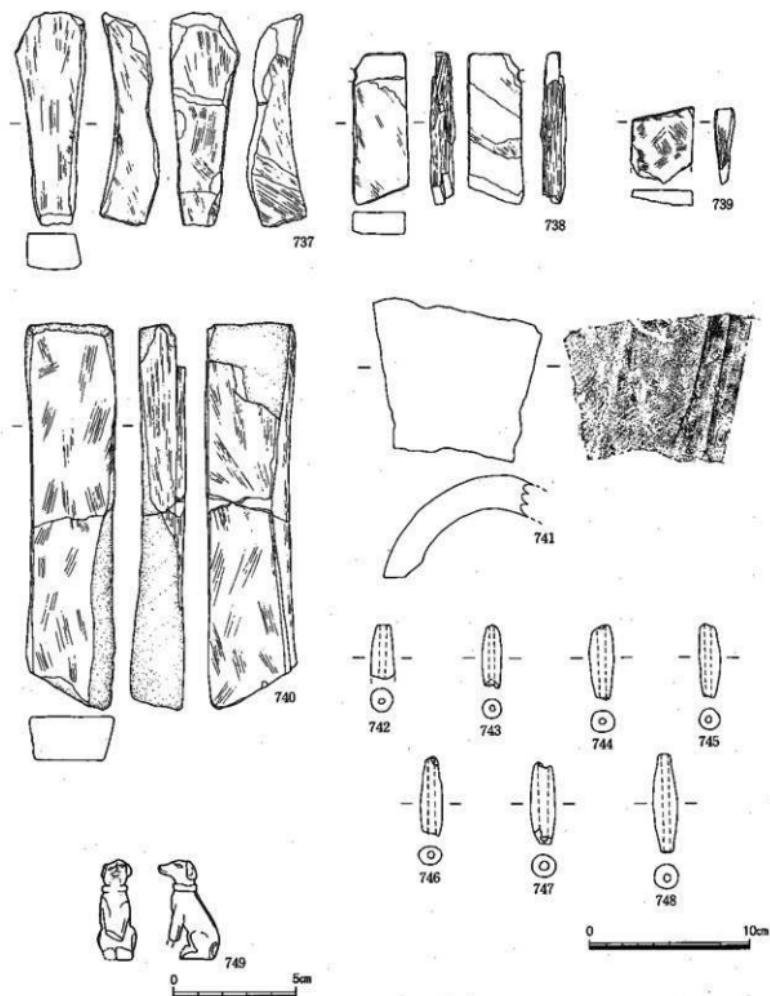


圖84 包含層出土遺物（砾石・瓦・土錘・土製品）

第V章　まとめ

第1節　出土遺物について

姫野々土居跡の調査から出土した遺物は、総点数40,256点を数える。その内訳は（表5）によるが、大半が包含層からの出土である。第IV章では、主に遺構出土の遺物を中心に述べてきたが、ここでは、総括的に姫野々土居跡から出土した遺物の分類を行い、各遺構の時期、相対関係を見てみたい。この際、在地産の土師質土器などの遺物については、共伴遺物が重要になるが、今回の資料の中では実年代を示せるものは見られず、相対的に貿易陶磁器、備前焼、瀬戸・美濃焼、瓦器碗等から年代観を抽出した。

1) 出土遺物の分類

今回、姫野々土居跡で出土した遺物の分類を行う。ここでは、主要な器種、特に供膳具を中心に分類を行う。

土師質土器

土師質土器は、総数37,664点が出土したが、姫野々土居跡出土遺物の96.4%以上を占める。中でも小皿・杯・皿といった供膳具が大半であり、ついで鍋・鉢といった煮炊具・調理具が少数ではあるが出土している。供膳具は、基本的に回転を利用して成形・調整されているが、小皿・皿については、手づくりの製品もみられる。形態的に杯か皿か明瞭でないものもあり、器高の低いものを皿として分類した。また、法量についてみても大小の分化がみられるため、杯については小型のものを小杯として分類した。このように杯か皿かはあくまで相対的であり、分類ごとの設定である。

分類に当たっては、小皿・杯・皿の中で成形の違いで大分類を行い、回転（ロクロ）を利用して成形しているものをA類、手づくり成形をB類とし、それぞれ形態的（外反・内湾）に分類を行った。また、それらが、調整の技法的侧面（ナデ・底部切り離し）、また、胎土・色調の違いが認められるため細分を行った。その他、器種ごとに必要に応じて細分を行った。

小皿

小皿はロクロ成形（A類）のものと、手づくり成形（B類）のものとがある。

A 1 a 類：ロクロ成形。外反する。内面は丁寧なナデが施される。外底部に回転糸切りの後、ヘラ状の圧痕を残す。器壁は薄く硬質であり、色調は浅黄橙色を呈する物が多い。胎土の砂粒は細かく緻密である。

A 1 b 類：ロクロ成形。外反する。内底部にロクロ目を残すもの。法量・形態によって細分できる。底径が3.6cm大のもの、5.0cm前後のものとがあり、口縁端部はやや丸味を帯びる。

A 2 類：ロクロ成形。斜上外方に短く立ち上がり、口縁端部は尖る。内底中央部から短くナデ上げるため、内底部は凹む。底径4.8～5.4cm前後を測り、器高は1.3～1.6cmである。

A 3 類：ロクロ成形。短く直立し、口縁端部は尖る。雑なつくりで胎土には5mm大の角礫が認めら

れる。底径が5.5cm前後を測るものと、6.5cm前後のものと大小がある。

A 4類：ロクロ成形。短く内湾し、口縁部は尖り気味である。外面底部脇がナデにより丸味を帯びる。

B 1類：手づくね成形。底部周縁を上方に短く折り曲げる。内外面とも指頭圧痕が顕著である。直立するタイプB 1aと、丸味を持つタイプB 1bが認められる。

皿

皿は、ロクロ成形（A類）のものと、手づくね成形（B類）のものとがある。

A 1類：器高が3.0cm前後を測り、斜上外方に大きく開く。内底部は未調整であり、中央部が凸状に盛り上がる。体部内面は比較的丁寧なヨコナデが施される。（姫野々城跡出土皿A-3類）

A 2類：口径12.0～12.9cm、器高3.2～3.6cmを測る。ベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部中位から外反気味になる。口縁端部は丸くおさめる。外面体部下半は丁寧なナデが施され、丸味を帯びる。内面は体部上半から口縁部にかけて丁寧なヨコナデが施されるが、体部下半から内底部にかけてはナデによる段が残り、内底中央部が盛り上がるものが多く見られる。胎土中にはチャートを含む0.5mm大の砂粒と、2～3mm大の角礫が若干含まれる。（姫野々城跡出土皿A-1類）

A 3類：口径11.0cm内外、器高2.6cm前後を測る。器壁が比較的薄いつくりのものが多い。他のA類に比べ、法量が小さく、ベタ底からやや内湾気味に立ち上がる。杯Fタイプの法量の1/2を示し、器形的に小杯とも呼べる。

B 2類：手づくね成形。内湾する。体部上半から口縁部にかけてはヨコナデ調整。口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面下半に指頭圧痕が認められる。

B 3類：手づくね成形。体部上半で外反し、口縁端部は上方に僅かにつまみ上げる。外面体部上半の一部に指頭圧痕が認められる。

B 4類：手づくね成形。体部が丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部は外反する。（姫野々城跡出土皿B-1類）

小杯

小皿とも呼べるが、ここでは形態からみて小杯とした。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。ラッパ状に開くタイプと、内湾気味になるタイプがある。

A 1a類：底径が3.0cm内外と小さく、ベタ底から斜上外方に大きく開く。底径と口径の差が1:2を示し、ラッパ形を呈する。

A 1b類：A 1a類に比べ、底径5.0cm内外、口径9.0cm内外を測り法量が大きい。

A 2a類：ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。内外面ともナデによる段が顕著である。胎土は緻密で硬質なものが多く、色調は、にぶい橙色を呈する。

A 2b類：A 2a類に比べ、法量が大きい。

A 3類：ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。底径と口径の差が2:3を示し、口径と底径の差があまりない。

A 4類：ベタ底から内湾する。形態的にみれば、杯C 1の法量が小さいタイプである。

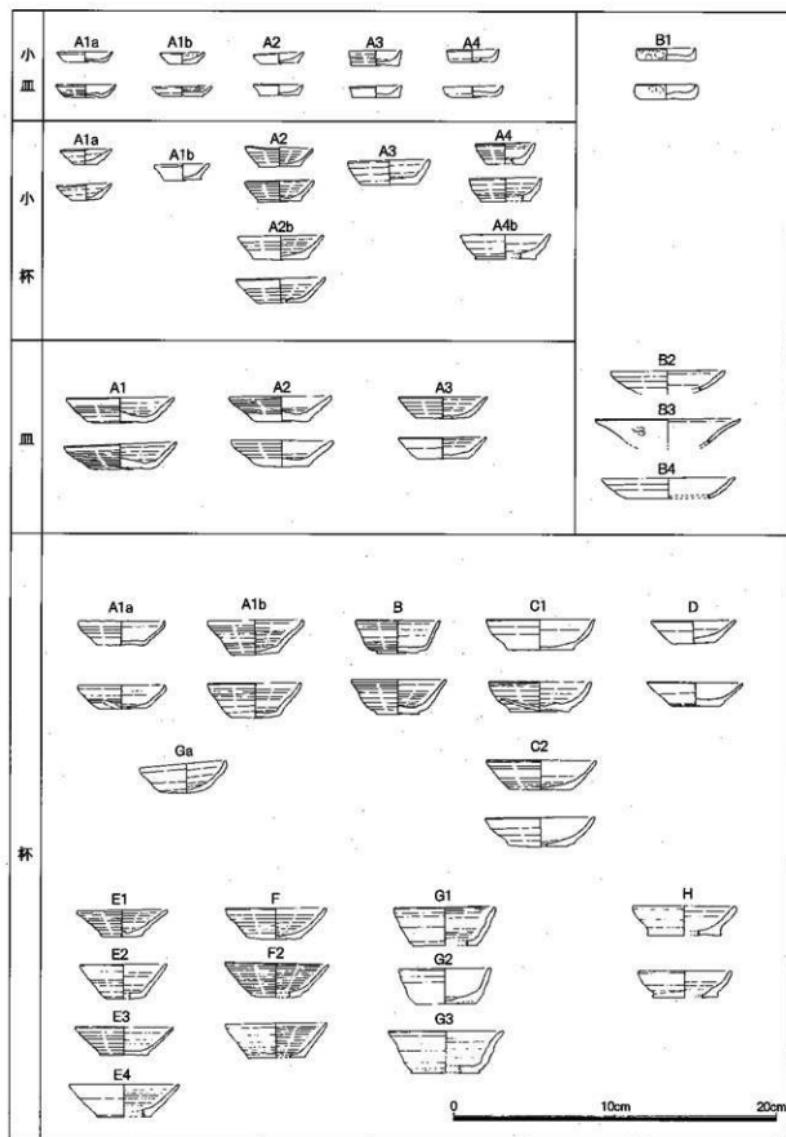


表1 土師質土器供膳具分類表

杯

器高の低いタイプのものもあるが、形態的にみて杯として分類を行う。全て、ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。

A類：ベタ底から斜上外方に立ち上がり、体部上半から口縁部にかけて湾曲し、口縁端部が上向き尖るタイプの杯である。器壁が薄く硬質であり、色調は浅橙色から白色系を呈する。内面は比較的丁寧なナデが施されるが、外面はナデによる段が顕著である。口縁端部はつよいヨコナデにより、意識的に尖らす。粘土紐巻き上げ、ロクロ成形、内面はナデ調整が施される。内底部は指頭により一方向に丁寧にナデる。外底部は、糸切り後、ヘラ状圧痕が認められる。

- ①A 1類：器高が2.9～3.3cmを測る低い皿タイプ。
- ②A 2類：器高が3.6～4.4cmを測る高いタイプ。

に分類できる。

B類：やや、段のある底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。粘土紐巻き上げ、ロクロ成形で、回転ナデ調整が施される。内底部には粘土紐の単位が満巻き状に認められる。胎土中に0.5～1.0cm大の角礫が認められる。

- ①B 1類：口径11.0cm内外、底径5.0cm内外、器高4.5cm以下の小さいタイプ。
- ②B 2類：口径12.5cm以上、底径6.0cm以上、器高4.8cm以上を測る大きいタイプ。

とに細分が可能である。

C類：粘土紐巻き上げ。ベタ底の底部から段を持って内湾しながら立ち上がる。胎土中に1cm大の角礫を含み、被熱、変形しているものが多い。

C 2類：C類と同じタイプであるが、外面底部から体部下半のナデが比較的丁寧であり、体部上で内湾する。器高に対して、底径と口径の差が大きい。C類に比べ、胎土は精緻である。

D類：体部中位に段が残る。丁寧なナデ調整が施され、胎土は緻密で、色調は白色系を呈する。

E類：底径と口径の差が大きくラッパ形に開くタイプの杯である。以下の4タイプに分類できる。

- ①E 1類：内底部が未調整で中央部が凸状に盛り上がるタイプ。ナデ調整の痕跡が段として残る。
- ②E 2類：比較的丁寧なナデ調整が施される。器高が4.0cm前後を測る高いタイプ。
- ③E 3類：器壁が薄く、緻密な胎土。外底部に糸切り後、ヘラ状の圧痕が残る。
- ④E 4類：内面にナデによる段が顕著である。口縁端部は尖り気味に仕上げる。

F類：器高が3.6～4.0cmと高く、口径が12.0cm前後を測り法量が大きい。底部から斜上外方に直線的に立ち上がる。底部切り離しは比較的高速の回転糸切りによる。

F 2類：形態、法量はF類と同じであるが、内面は工具によるナデ調整が施され段が著しい。

G類：器高が4.5cm以上と高く箱形を呈する。口縁部の形態及び調整に違いが見られ、以下に分類できる。

- ①G 1類：口縁端部が尖る。内面はヘラ状工具によるナデにより、段が著しい。底部外面に糸切り跡ヘラ状の圧痕が残る。
- ②G 2類：口縁端部は丸まる。丁寧なナデ調整が施される。
- ③G 3類：口縁部が外反する。調整はG 1類と同じである。

H類：形態的にはC類と同じく円盤状の底部から内湾するが、法量が小さい。色調がにぶい黄橙色を呈する（姫野々城跡出土皿A 4類）。

2) 土師質土器供膳具の相対関係

以上、出土した土師質土器供膳具の分類を試みたが、多種・多時期にわたるため、中には分類しきれないタイプも存在する。器種組成・法量分化・形態変化を時期ごとに詳細に検討するには、一括性のある出土状況を示す遺構が少ない。次に、遺構別に相対関係を見ていきたい。今回、第IV章で取上げた遺構の内、土師質土器供膳具の器種の組み合わせが明瞭に判る物を表3に取上げたが、相対的な年代の判る遺物が伴う遺構は少ない。前述した分類ごとに可能な限り、土師質土器供膳具の相対関係をまとめると、以下の組み合わせが想定できる。

時期\器種	小皿	小杯	皿	杯	相対遺物	遺構
I期	A 1 a A 1 b	A 2 a A 4		A 1 a B C 2 F 2	瓦器椀（IV 2期）、 青磁鑄蓮弁文碗（蓮B 1）	SD 3・SD 9 SX 2 SK 217
II-1期	A 1 b A 2 A 3 B 1	A 2 a A 4	A 3	C 1 F G 1	瀬戸灰釉大皿（古瀬戸後 II期）	SX 1
II-2期	A 1 b		A 1 A 2		常滑窯9型式 李朝青磁	堀 2
III期	A 3	A 1 a	A 2	E 1 E 2	青磁細線刻蓮弁文碗（蓮 B 4）、白磁皿E 1	SE 1、 SB 12P 387・400 SK 219

表2 土師質土器時期別相対表

各期の組成

上表の時期は、遺構から供伴して出土した貿易陶磁器及び国産品の年代観から時期を分けた。後述する「5) 貿易陶磁器の組成」で取り上げる帰属時期と一致している。

各期の組成をみると、I期では小皿・小杯・杯で構成されてるが、この中で法量分化が認められるのは、杯Cタイプである。このタイプの法量の約1/2を測るもののが、小杯A 4類で分類したタイプである。このタイプの法量分化は、II-1期まで認められる。他の杯類をみればA 1 a・C 2類が内湾するのに対し、杯B・Fタイプは直線的な形態である。内面の丁寧なナデ調整のあり方形態、法量からみれば前者は皿にも分類が可能である。この段階の技術的特徴は、杯の内面調整に認められる。特に、器高の深いB・Fタイプは、内面にヘラ状の工具で調整した凹凸痕跡が認められる。また、小皿A 1 a・杯A 1 aタイプは両者とも緻密な胎土であり、色調は白色系のものが多く、外

表 3 土師質土器供膳具遺構別出土表

◎は比較的多く出土している。

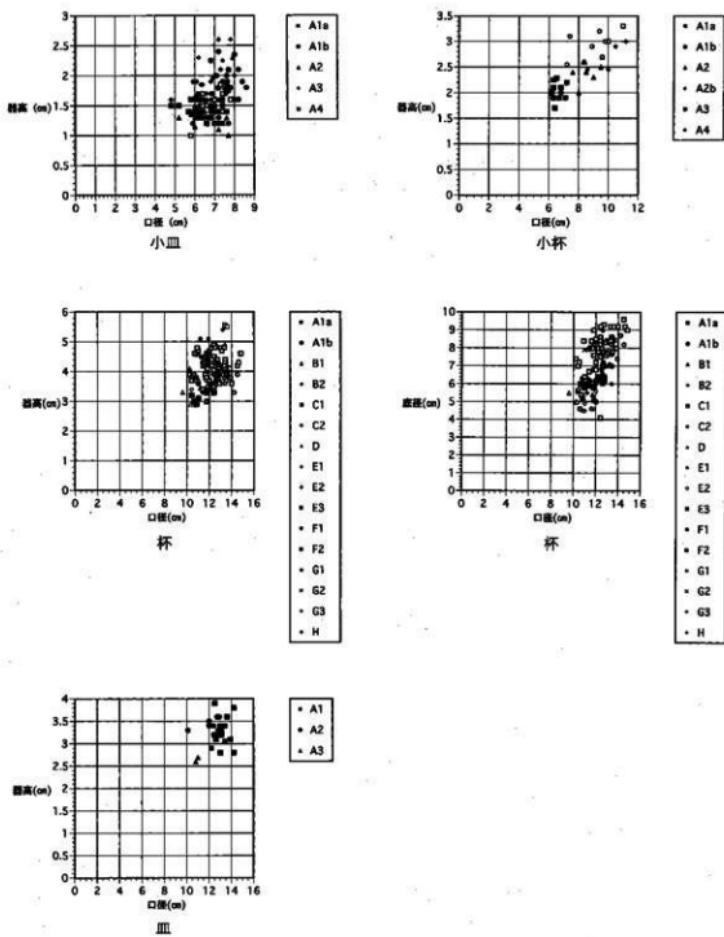


表4 土師質土器供膳具法量表

底部には、糸切り後、板状の圧痕が認められる。

II-1期になると小皿のバラエティーが増えてくる。小皿では新しく直立気味のA2・A3タイプが出現するが口径5.0~7.5cm前後、器高が1.2~2.5cm以上を測り、ばらつきがあるが、底径に規格性がみられ、同じ規格の円柱状の粘土から作られた可能性がある。また、小皿では手づくねのB1タイプがあるが、このタイプは出土した遺構が少なく、SX1及びSK203及び、IV区北拡張区の包含層でまとめて出土している。このことは、この器種の特殊性が考えられ、儀礼的空间において用いられたものと思われる。また、上記遺構からは、耳皿もまとめて出土しており、これらのこととも含めて、IV区北拡張区はハレの場としての機能を考えたい。また、B1タイプは山城では出土が見られない。小杯・杯については、I期の小杯A4・杯C2の法量が縮小化し、杯では今回C1に分類したものに変化する。このC1タイプは形態的にはC2と同じであるが底径の縮小化、胎土・色調の変化が認められる。また、成形・調整についてはC2よりも雑になり、内面は比較的丁寧なナデ調整が施されるが、外表面はナデによる段をそのまま残す。また、色調も両者を比較するとSK2出土のC2タイプは白色~淡黄褐色を呈するものが多いため、SX1出土のC1タイプは橙色系が主流である。これらのCタイプは山城では出土が見られない。その他、Bタイプの杯はみられず、直線的なFタイプの杯に踏襲されてくる。このFタイプの内面には前段階にもみられるヘラ状工具によるナデ調整痕が認められる。また、今回皿A3で分類した皿であるが形態的には小杯とも呼べるものであり、小杯のA2bタイプと法量的に同じであり、杯Fタイプの小型タイプとしても捉えられる。

II-2期の資料は少なく、ここでは堀2の資料を見るにすることにする。この堀2の組成をみると、小皿・皿がまとめて出土している。小皿A1bについては内底部にロクロ目を残すタイプのものであるが、堀2出土の小皿はほとんどがこのタイプに統一されている。前段階までは、器壁が均一であるのに対し、底部が厚みを増し、器高が高くなっている。皿はロクロ成形によるA1・A2タイプのものが出現していく。前段階まででみるとロクロ成形の製品で明確に皿と呼べる器形がみられなかったが、杯で分類している杯A1a・Cタイプのものが、内面を丁寧にナデ調整を施す点からみれば皿として分類されるものである。皿A1・A2については内面の調整の仕方に特徴がみられる。特に、皿A1については内底部にロクロ目が残り、中央部が凸状に盛り上がる。体部は外表面はナデによる段を残すが、内面は丁寧にナデが施されている。このタイプは姫野々城跡で出土している皿A-3類と同一のタイプであり、山城部分でまとめて出土がみられる。

III期についても一括性の高い出土を示す遺構が少なく、ここでは、SB12・SE1の資料を中心にみていきたい。まず、この期の組成であるが、小皿・小杯・皿・杯がある。小皿では、前段階から続くA3タイプのものがみられる。また、今回小杯A1aで分類したラッパ型を呈した小皿状のものもみられる。また、新たにラッパ型を呈した器高の深いEタイプの杯が出現していく。このように、口径と底径の差が大きくラッパ状に開く形態のものが増えてくる。皿ではSB12のP387で出土している皿A2タイプがあげられるが、A1に比べ法量がやや小振りで底径と口径の差が大きくなっている。また、前段階にみられたA1はやや内湾気味であるのに対し、体部中位からやや外反気味になる特徴がある。調整はA1類と同じく内底部はロクロ目を残すが、体部内面は丁寧なナデ調整である。この皿A2タイプは姫野々城跡出土の皿A-1類と同一のものであり、山城部分でまとめて

出土している。

3) 杯G a 及び杯A 1 a・b タイプについて

相対表で遺構別に土師質土器の相対関係をみてきたが、次に、今回、杯A 1 a・b類で分類した形態の杯についてみてみたい。まず、形態であるが、G a タイプで分類した椀形の杯の形態に類似する。このG a タイプはやや丸底気味の底部から内湾して立ち上がり、部上半から口縁部にかけてヨコナデによりさらに、内湾する。成形は、内型づくりであり、内外面ともにナデ調整、特に、内底部の周縁を「の」字状にナデ上げる。色調は白色系のものが多い。形態的には、京都系土師器皿（伊野分類G a類）に類似しており、需要、伝播を考える上で、プロポーションの類似という点を重視し、今回は伊野分類を踏襲した。このG a タイプは、胎土・色調ともに他の土師質土器供膳具と異なり、形態もこの地域の伝統のプロポーションとは言えず、全体的にみて胎土・色調ともに異質なタイプであり、モデル的な搬入品として考えることが妥当である。模倣型という観点からみれば、5次模倣型の範疇で捉えられるものであり、このモデルが少なからず当地域において、一時期の需要があったものと考えられる。そして、このG a タイプをモデルとしながら、従来の回転作用を用いて成形したものが杯A 1 a・b タイプである。成形・調整とともに、他の杯・皿と同様であるが、口縁部の形態及び内面のナデ調整の在り方が同一である。口縁端部の仕上げ方、及び内面は丁寧なナデが施されており、特に、内底部は意識的に一方向にナデしている。この、A 1 a・b タイプは浅身タイプ（A 1 a）と深身タイプ（A 1 b）があるが、成形・調整などの手法は同一である。

4) 土師質土器供膳具の様相差～山城との比較～

このように、各期における土師質土器供膳具の特徴と主な器種組成をみてきたが、ここでは、山城と居館部との様相差をみてみたい。山城、居館部とともに出土遺物の90%以上を占める土師質土器供膳具であるが、各期ごとにタイプでみていくと山城ではII-2期から皿A 1・A 2を中心とする一群の比率が高くなる。それ以前の段階の杯、皿のタイプはわずかであり、II-2期以降山上部が活発化していく傾向がみられる。また、III期の段階でみられるラッパ型の形態を示す杯E タイプも山城ではほとんどみられない。ただ、皿A 2類については主郭部分の腰曲輪で比較的まとまって出土がみられる。山城から出土する土師質土器供膳具を儀礼的容器として考えるならば、山上部と、居館部で行われる儀式に違いがあり、使用される杯や皿も種類が違うのではないかと考える。特に、手づくねのB 1 タイプの皿については、山城部では出土がみられず、この器種の特殊性が考えられる。県内の管見では、このタイプの手づくねの皿は他ではみられない。また、土居跡では土師質土器供膳具の出土の仕方からみて日常的な使われ方をしている物もある。器高の高い杯については内面摩耗、タール付着、小皿・小杯については灯明皿などへ転用するなど、二次的使用痕が認められる物も存在していることから、タイプによっては日常的雑器として使われていたのではなかろうか。手づくねの皿については、県内では南国市田村の田村遺跡・十万遺跡（香我美町）・芳原城跡（春野町）など高知県中央部から東部にかけてまとまって出土している。これらの遺跡では14C～15Cにかけては皿は手づくねが主体であり、杯についてはロクロ成形である。この中で芳原城跡について

は1983年に城跡を囲む堀状地形を呈した湿地部分の調査が行われており、明応2年（1493）の紀年銘を持つ護符とともに多量の土師質土器も出土している。ここでの土師質土器は報告書では形態・胎土・調整の差異によって5類に分類されているが、この遺跡での特徴は杯の各形態によって胎土が異なり、目的用途により胎土が選別され、素地作りが規定されると考えられる点である。遺物を実見すると確かに胎土・色調により形態が異なっているものが多く、色調では白色系のものと、褐色系のものとに大きく分かれる。この中でも前者のものは、内外面にタール痕が付着しているものが多く、灯明的な使用目的に使われているのではないかと考えられる。皿については手づくね成形のものとロクロ成形のものがみられるが、前者は形態的に京都系の土師器皿に類似するが胎土が違うため、伊野氏のいう5次模倣系の範疇で捉えることのできる皿である。当遺跡においては皿・杯ともにロクロ成形のものがほとんどであり、手づくね成形の皿はほとんど出土がない。この地域差として認められる特徴は、中村市を含む高知県西部域の様相と同じである。

このように、土師質土器供膳具における使用目的の違いや、儀礼のあり方、京都系模倣の土師器皿の伝播と需要のあり方をみていくためには、時期的位置付けを含めて県内の様相との比較を行う必要があるが、ここでは今後の検討課題としておきたい。

5) 貿易陶磁器の組成

今回出土した貿易陶磁器の組成をみると、グラフ1に示したように青磁が45.9%を占め、次いで白磁22.7%、青花16.2%となっている。その他、中国産の黒褐釉、東南アジアの製品が15.2%を占める。器種組成は、青磁は碗が80%以上を占め、皿は9.9%と少ない。白磁は皿が94.3%と主体を占める。青花は皿が55%、碗が44%を示す。次に、貿易陶磁器の器種分類ごとの組成をみると青磁碗では細蓮弁文のB4類が最も多く、ついで無文のD類碗、E類碗とつづく。青磁皿は出土量が少ないが、龍泉窯系の端反り器形の皿、稜花皿が主体であり、稜花皿ではAタイプが多く目立つ。白磁は皿D群・E1群が多数を占め、中でもE1に分類した端反り皿が主体を占める。青花では碗・皿とともにB群・C群が全体の50%以上を示し、主体を占める。碗ではE群、皿はB2・F・2群といったもう一つの時期的ピークが認められる。傾向としては、青花の碗・皿の比率が新しくなるにつれて碗が多くなっている。

次に、貿易陶磁器からみた姫野々城跡と、今回調査を行った姫野々土居跡との様相を比較する。

1) 姫野々城跡と居館部（姫野々土居跡）との様相

まず、貿易陶磁器の帰属時期を整理しておきたい。ここでは、貿易陶磁器の編年観ごとに組成を分類し、時期ごとのピークを大きくⅢ期に分けた。この中で、Ⅱ期にピークがあることから、Ⅱ期の組成を大きく2つに分けた。また、貿易陶磁器以外の国内産の遺物については年代観の分かるものを抽出し、併せて帰属時期を整理した。

姫野々城跡

I期

貿易陶磁器：白磁A群皿・碗

II-1期

貿易陶磁器：青磁碗蓮B 2・雷C 2・龍D・E、青磁皿龍・稜花皿A、白磁D類

国内産：瓦質羽釜（河内E型）、備前產壺・擂鉢（IV a期）、瀬戸・美濃產天目茶碗・卸皿・鉢（古瀬戸後期III～IV期）

II-2期

貿易陶磁器：青磁碗蓮B 4、白磁皿E 1、青花碗C、青花皿B（外面：唐草、内面：玉取り獅子）・C（外面：密な唐草文、内面：アラベスク文、同じ文様構成のB群の皿）

国内産：備前產擂鉢（IV b期）、瀬戸・美濃產天目茶碗・卸皿・鉢（古瀬戸後期III～IV期）

III期

貿易陶磁器：青花碗E、青花皿B 2・E・F・2群大皿・粗製陶胎染付け皿（漳州窯系）

姫野々土居跡

I期

貿易陶磁器：青磁碗蓮B 1類、白磁皿A群

国内産：瓦器椀（和泉型IV-2～3期）、東播系須恵器捏鉢（III-2期）備前產擂鉢（III期）、瀬戸・美濃產灰釉瓶子（中II期）、灰釉折縁皿（中IV期）、常滑窯（5・6・7型式）、高麗青磁象眼

II-1期

貿易陶磁器：青磁碗蓮B 2・B 3・雷C 2・龍D・E、青磁皿龍IV・稜花皿A、白磁D類、

国内産：備前產擂鉢・壺・壺（IV a期）、常滑窯（9型式）

II-2期

貿易陶磁器：青磁碗蓮B 4、白磁皿E 1、青花碗C、青花皿B・C（外面：芭蕉葉文、内面：アラベスク文・外面：唐草文、内面：玉取り獅子）タイ産褐釉四耳壺、李朝青磁碗

国内産：備前產擂鉢（IV b期）、瀬戸・美濃產灰釉鉢（古瀬戸後IV期）

III期

貿易陶磁器：白磁皿E 2群・菊皿、青花碗E、青花皿B 2・E・F・2群（景德鎮系銅線模花皿、漳州窯系青花皿）

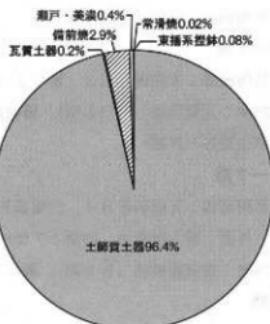
2) 帰属時期

出土遺物からみた帰属時期は大きくIII期に分かれる。今回の帰属時期をまとめた表6、グラフ5を参照されたい。I期の遺物は少ないが居館部では比較的まとまった出土がみられる。青磁碗では蓮B 1・B 2が、白磁では口禿げ皿を中心とするA群の比率が高く、今次調査地点で検出された諸遺構は比較的古い様相を示している。特に、SD 3からは青磁蓮弁文碗B 1類、瓦器椀等が出土しており、土師質土器の杯A・Bがそれに伴う。また、SB 3・4・8についてはピットから瓦器椀・土師質土

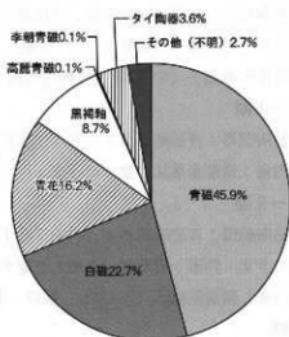
種類	器種	破片数	%
土師質土器	皿・杯	37,589	
	鍋	24	
	鉢	16	
	その他	35	
小計		37,664	96.4
瓦質土器	瓶(丸器瓶)	72	
	釜・茶釜	22	
	擂鉢	8	
	火鉢	19	
小計		121	0.2
備前焼	大甕	889	
	壺	52	
	擂鉢	180	
	その他	3	
小計		1,124	2.9
瀬戸・美濃	天目茶碗	26	
	その他	112	
小計		138	0.4
常滑焼	壺	15	
小計		15	0.02
その他国産	東播系捏鉢	42	
小計		42	0.08
国産品合計		39,104	100
青磁	碗	469	
	皿	52	
	その他	7	
小計		528	45.9
白磁	碗	11	
	皿	246	
	その他	4	
小計		261	22.7
青花	碗	82	
	皿	102	
	その他	2	
小計		186	16.2
黒褐釉	壺	82	
	天目茶碗	18	
小計		100	8.7
高麗青磁	その他	2	0.1
李朝青磁	碗	2	0.1
タイ窯	壺	42	3.6
その他		31	2.7
貿易陶磁器合計		1,152	100
出土遺物合計		40,256	

表5 出土遺物組成表

国産品遺物組成



貿易陶磁器組成



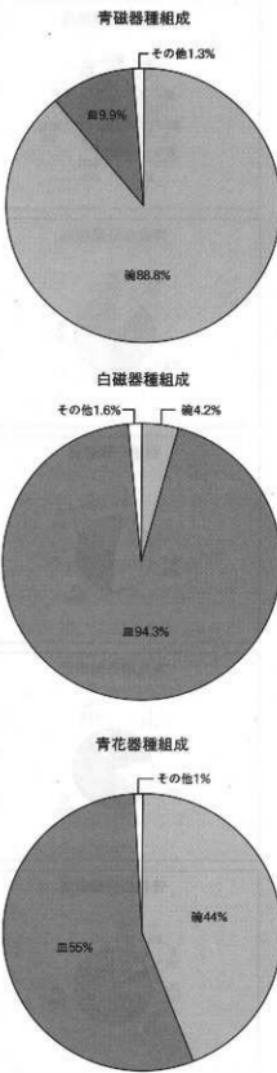
グラフ1 出土遺物組成円グラフ

器の杯Aが出土しており、SD 3に伴う時期が考えられる。姫野々城跡では、白磁A群の皿・碗が出土しているが、これらの遺物の年代を遡るものは無く、南北朝期（14世紀代）には城は存在している物と思われる。また、青磁碗蓋B 2類の量も居館部に比べ少ないが、前段階と比較するとやや、増加傾向を示しており、II期への胎動期として捉えられる。

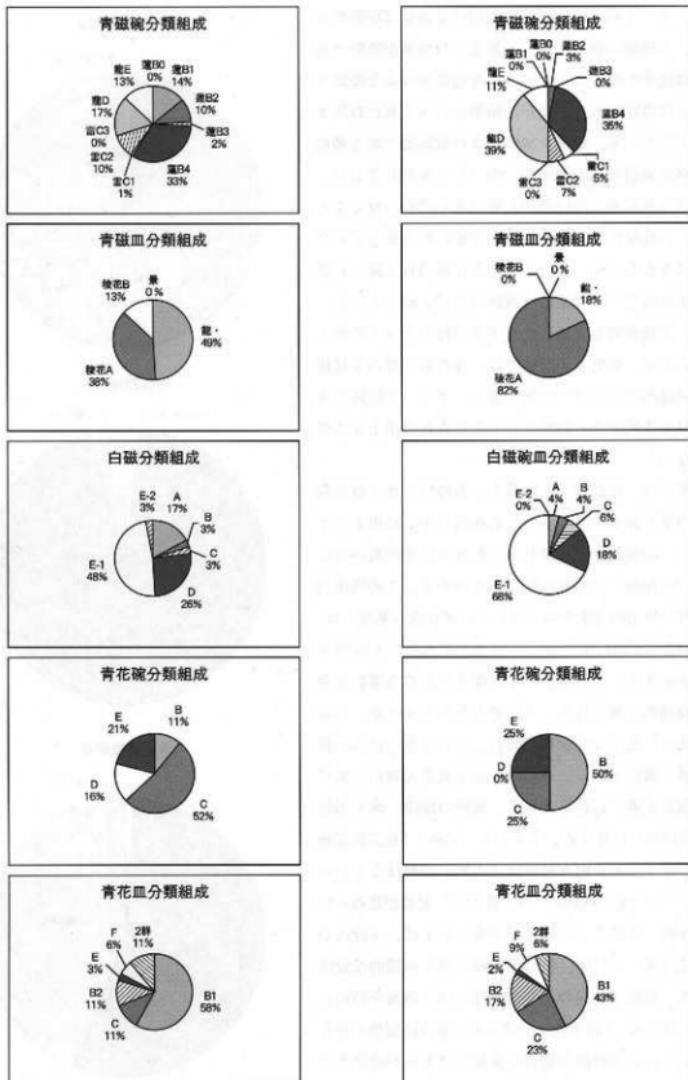
II期は15世紀代から16世紀中葉と幅が広いが、遺物の量もこの期がピークである。貿易陶磁器の組成から15世紀前半～後半期をII-1期、15世紀後半～16世紀前半代にかけての時期をII-2期と

した。II-1期では、貿易陶磁器の全体量は居館部が多く、青磁碗の組成を見ると無文のD類碗が姫野々城跡では比率が高くなっている。青磁皿をみると姫野々城跡では模花皿Aタイプが面積率からみて比較的多く出土している。姫野々城跡では日常雑器である備前焼擂鉢が備前IV期の段階から山の上で使われており、また煮炊具である河内型の瓦質羽釜も認められることから、15世紀代は一定の恒常的な使われ方をしていたのではなかろうか。II-2期の青花皿のB1群・C群の出土傾向をみれば姫野々城跡の方が上回っている。また、文様構成も上述したタイプの物がセットで出土しているが、姫野々土居跡では、青花皿C群の文様構成が城跡出土のタイプの物と違う。また、土居跡の方は山城と比較すると面積率からみて青花の出土する量が少ない。

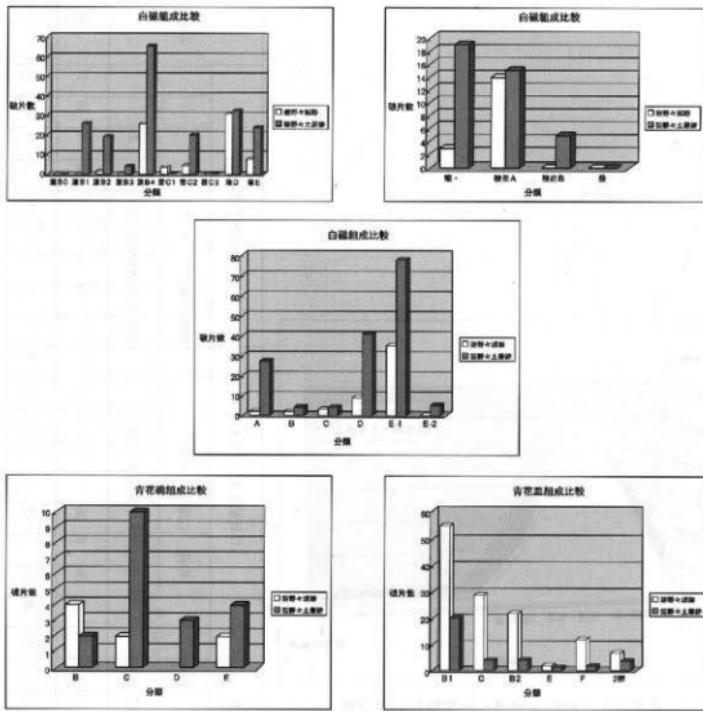
III期では、居館部、山城とともに前段階に比べ貿易陶磁器の量も減少する。主に、青花皿を中心に出土しているが、山城部分では皿B2・F群が比率が高いに対し、居館部では皿E群が主体を占める。この段階の葉山村の歴史的事象をみてみると、津野氏（基高）は、天文14年（1545）に一条氏（房基）に攻められ姫野々城は落城する。その後、一条氏配下における津野勝興は、高岡郡（現上佐市）まで勢力を拡大するが、長宗我部氏と仁淀川での合戦で破れ、天正元年（1573）長宗我部元親にくだる。その後、長宗我部元親の三男である親忠を養子に迎え入れる。親忠の段階で城を須崎城（須崎市）に移すが、天正17年（1589）『長宗我部地検帳』によると姫野々城跡は「古城」記載ではなく、山麓部に二反（約2,000m²）の「御土居」記載が認められる。今回、III期とした16世紀中葉～後半は、津野氏が一条氏に降って以降、拠城を須崎に移す画期的な段階である。姫野々土居のある山麓部では、拠城を須崎に移した後でも、「御土居」をはじめ、家臣団屋敷が存在しており、この段階の遺物が少量ではあるが確認されている。



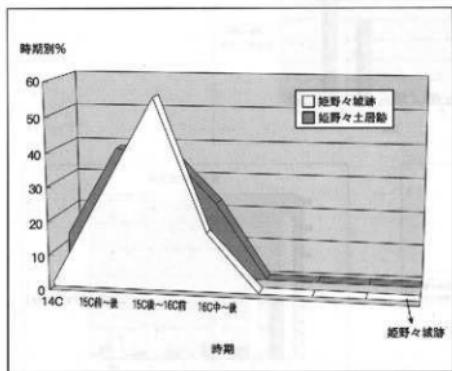
グラフ2 貿易陶磁器器種組成



グラフ 3 貿易陶磁器組成比較



グラフ.4 貿易陶磁器組成比較（分類別棒グラフ）



グラフ5 姫野々城跡・土居跡ピーク比較

	14世紀						15世紀前葉～後葉						16世紀中葉～後半						合計												
	青磁	白磁	小計	青磁	白磁	小計	青磁	白磁	小計	青磁	白磁	小計	青磁	白磁	小計	青花	合計														
姫野々城跡	0	2	0.8	2	0	5	30	8	14	3	9	71	27	26	0	35	2	55	29	147	56	0	0	2	22	2	12	7	45	17	265
姫野々土居跡	26	27	53	12	19	4	20	32	24	15	19	174	38	65	0	78	10	20	4	177	39	0	5	4	4	34	2	4	53	12	457

表6 貿易陶磁時期別比較

第2節 長宗我部氏の動向と遺物様相 ～貿易陶磁器を中心に～

出土遺物の中で年代観のある貿易陶磁器を中心に帰属時期を見てきたが、今回は遺物の全体的な把握には至らなかった。ここでは、前述した山城部分と居館部との様相から導き出される当地域の歴史的事象に、土佐における戦国期の城館調査の管見と比較し、長宗我部氏の動向を追いながら検討を加えたい。

まず、今までに発掘調査が行われている岡豊城跡（南国市）・浦戸城跡（高知市）・中村城跡（中村市）の織豊期の段階の様相を見ていきたい。中村城跡は一条氏の退陣以後は長宗我部氏の家臣である桑名弥次兵衛が居城している。出土遺物を見れば、戦国期に一条氏が居城していた段階の遺物から認められるが、貿易陶磁の組成をみれば青磁B4群、白磁E群、青花はB・C群が中心に出土している。青花のE群・F群の比率は岡豊城が多く、姫野々城跡・中村城跡でも認められるが量的には岡豊城が凌駕しており、特に今回2群として分類した粗製の青花や漳州窯系の青花が目立つ。（皿では小野・鈴木分類F・G群、森分類IIIa・IIIbに該当する。粗製品のタイプは高台無軸のタイプが多い。）森毅氏による大坂城の縄年で豊臣前期（1580～1598）にあたる一群である。長宗我部氏は天正3年（1575）に土佐を統一し、天正13年（1585）には四国を統一するが、その後、秀吉傘下に入る。長宗我部氏は、拠城である岡豊城（南国市）から天正16年（1588）、大高坂（現高知城）に移り、天正19年（1591）には浦戸城に拠城するが、このことは、豊臣秀吉の政策であった文禄・慶長の役が大きく関わっているものと考えられ、水軍を率いる必要性、港湾窓口としての機能性を重視し、土佐湾沿岸部である浦戸に移したものと考えられる。この段階、津野親忠は姫野々から須崎城に拠城を移すが、このことは、前述の社会的状況を含めて姫野々では領内流通経済の掌握及び城下町建設が不可能であるため、港湾集落須崎を外港として選んだものと考えられる。

このように16世紀後半では、葉山村だけでなく、土佐における戦国期の最大の画期であり、長宗我部氏の動向とリンクして見ていかなければならない。前述した青花の一群は、長宗我部氏のビーグルから豊臣傘下に入る段階のものであり、四国を統一していく中で拠点的に使われたと考えられる城や、豊臣傘下以降にも機能していた城に出土が見られる。今回取り上げた岡豊城跡・姫野々城跡・中村城跡ともに出土がみられることから、今後、土佐の城郭出土の資料を見てゆく上でのある一定のメルクマールになるであろう。

また、最近の発掘調査では、長宗我部氏の「一領具足」と呼ばれる半士半農の給人集落があったとされる八田奈路遺跡（伊野町）でも漳州窯系の青花皿が出土している。姫野々にもこうした一般給人層があり、須崎に数多くの給地を与えられている。こうした自営農の存在である多くの農民的給人層は、市場に進出し、次第に貨幣流通経済の担い手となっていく。次にあげる「土佐国臺簡集五」に、文禄・慶長の役での朝鮮出陣の際の献金として、一般給人層が相当の貨幣蓄積を行っていたことが読み取れる。

坪付

初タ本出三反十五代ノ内

一所式反下 上中洞名

唐立付而料足式貢文氣遣仕候間右田地給分ニ云付候自今奉公專一也

天正廿年

二月吉日 親忠（花押）

中洞

西村与次衛門尉

慶長に入ると津野領では年貢の銀納制を取っており、貨幣流通は順調であった様である。このように、天正末期から慶長期にかけての土佐では、こうした給人層が貨幣蓄積を行い、今まで、領主層しか持てなかつた貿易陶磁器も手に入れることができたのではないか。このことは、当時、商品流通の拠点であった堺の商人の動きともリンクして考えなければならない。このように城館以外の集落遺跡でも一定の出土がみられ、メルクマールとなる貿易陶磁器は、遺跡の性格、当時の流通・交易を考える上でも重要である。

第3節 姫野々城下屋敷群について

今回の調査では、古絵図に描かれている城下町の屋敷跡、及び『長宗我部地検帳』に記載されている屋敷名を復元していく上で貴重な資料が得られた。

古絵図については江戸時代に地下人により作成されたものであり、若干の修飾は否定できないが『長宗我部地検帳』の記載とほぼ一致する。天正16年（1588）の「津野半山地検帳」によると、津野氏は城山の南麓中央部に土居を構え、その南に広大な弓場を備えていた。土居を中心として西に長林寺・三嶋神社、東に聴松院、中央部に良徳院・道場・聖文院など寺社があり、家老の津野藏人をはじめとする家臣の屋敷群がある。姫野々土居集落は16の小字より成りたっているが、「屋敷」名は大小あわせて74に及ぶ。これらの屋敷の配置をみると、「御土居」を中心に上級給人屋敷が集落の中に分散的にみられ、一般給人や中間屋敷が上級給人の屋敷を中心に10前後の屋敷集団としてグループを形成している。御土居は2反で、土居の前には五反二七代四歩の広大な御弓場がみられる。また、土居の東側には「御乳人」という側近の奉仕者を構えている。このような配置は、香美郡土佐山田町楠目に所在する山田氏の楠目城の城下町にもみられる。

寺院の配置をみれば集落西端に三嶋神社、それに対して東の聴松院、三嶋神社の東側には領主の菩提寺である長林寺が古長林寺より移っている。これらの集落端の社寺に対して、御土居に接し、東南に良徳院、西北に聖文院と種玉庵があり、御土居中心に内側と外側の二重配置となっている。このように寺社の配置や、領主居館を取り囲むかたちで給人屋敷を構え、前述した弓場の存在等からみても軍事的な配慮が読み取れる。この検地が行われた、天正17年段階は親忠は拠城を姫野々から須崎に移している。しかし、その家臣にあたる給人屋敷は姫野々に存在しており、給地の多くは須崎城のある須崎市平野部周辺にあたる。この段階、津野親忠は姫野々から須崎城に拠城を移すが、このことは、前述の社会的情勢を含めて、姫野々では領内流通経済の掌握及び城下町建設が不可能

であるため、港湾集落須崎を外港として選んだものと考えられる。

今回、調査した地点は、天正17年の地検帳に記載されている「御乳人屋敷」周辺にあたり、御土居に推定されている部分の東側にある。今回の調査で検出された建物跡が、地検帳記載の御乳人屋敷や、山内右衛門大夫、堅田藏之進の屋敷に相当するかどうかは、詳細な検討が必要であるが、SB 3・4・8と区画溝SD 3・10については、同時期の遺物の出土がみられ、現段階では14世紀代の建物跡と考えられ、前段階の遺構として捉えることができる。他の建物については、出土遺物からの検討は難しく、規格性、切り合い関係等から見て大きく三つの時期に分かれる。この中で調査区東部で検出されているSB 12は、出土遺物から検討すればⅢ期の段階の建物であり、古絵図、地検帳記載から位置関係を復元すると堅田藏之進屋敷に推定される。

堀の西側（御土居推定地側）の側面には、土留めと考えられる石積みがみられ、西側の地形が一段高くなっていることから土壘が御土居内側に造られていた可能性がある。横列の方向性や、溝、堀の切り合い等から区画溝（SD 3・10）の段階から地割りの方向性を残しつつも防御性のたかい堀を取り入れ、土居そのものが西側に移動している可能性も考えられる。今回、検出された建物群が前段階の津野氏の住屋（主殿）と呼べるものかどうかは不明であるが、堀と建物の位置の関係をみると、東限には同規模の堀が存在しないことから、主殿的建物は調査地点の西側にある可能性が強い。

山城が恒常に使われるようになるのが15世紀、中でも後半であるが、前述したように土居跡ではこの期（II-2期）の遺構は少ない。堀は、山城が恒常に使われる段階につくられたようで、居館が一時的に山上に移動している可能性もある。後述する付帯で取上げた今次調査区北西に隣接する地点で検出された堀の性格も含めて考えると、地検帳段階の津野親忠の「御土居」は調査地点の西側にあると考えられ、この段階では山麓に再び居館を構えたものと思われる。

今回の調査で得られた資料は、姫野々城跡の調査成果を含め、居館（土居）と山城の関係、その機能や推移を知る上で貴重な事例となろう。

〈参考文献〉

- (1) 伊野近富 1998 「中世前期の京都系土師器の伝播と受容」『中世土器の基礎研究III』日本中世土器研究会
- (2) 『田村遺跡群』 高知県教育委員会 1986 (田村遺跡群の報告書は15分冊で構成されているが、今回は第10分冊を引用した。)
田村遺跡群では、守護代細川氏の城館内にあたるLoc. 42調査区のSK 96・SD 2から京都系土師器皿が多量に出土している。これら、中世の諸遺構からはロクロ使用の皿は認められない。
- (3) 『十万遺跡発掘調査報告書』(香我美町埋蔵文化財調査報告書第2集) 香我美町教育委員会 1988
- (4) 『芳原城跡発掘調査報告書』 高知県教育委員会 1984
- (5) (4)同じ。城跡据部の堀状地形部分の調査で、明応2年(1493)の記年銘をもつ護符とともに多量の土師質土器供膳具が出土している。杯は形態によって胎土が異なっており、目的とする杯の形態によって胎土が選別されている。皿はロクロ成形のものとロクロ未使用のものが存在し、

後者の中には、白色系で京都系の土器と形態が類似するものが存在するが、京都出土のものとは胎土が違う事から搬入されたものかどうかは不明である。

- (6) (1)に同じ。
- (7) 「姫野々城跡 I・II」 葉山村教育委員会 1995・1996
- (8) 「岡豊城跡第1~5次発掘調査報告書」 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1990
「岡豊城跡第6次発掘調査報告書」 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- (9) 「浦戸城跡」 高知市教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
- (10) 「中村城跡」 中村市教育委員会 1985
- (11) 森 級 1995「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—」『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会
- 森 級 1999「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器」「土器陶磁器からみた織豊期城郭」織豊期城郭研究会第7回研究集会資料 織豊期城郭研究会・日本中世土器研究会
- (12) 「八田奈路遺跡II」 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999
- (13) 「長宗我部地検帳」「高岡郡下の一 津野半山地検帳天正十七年四月一日」 高知県立図書館 1963
- (14) 中山泰弘 1998「長宗我部地検帳からみた楠目地域について~山田氏の城と城下町の一考察」「土佐山田史談」第23号

今回の貿易陶磁、国産品の分類等で引用した文献は以下のとおりである。

- 小野正敏 1982「15・16世紀の碗・皿の分類と年代」「貿易陶磁研究 vol.2」 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究 vol.2」 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究 vol.2」 日本貿易陶磁研究会
- 間壁忠彦・眞子 1966~1968「備前焼研究ノート」「倉敷考古館研究集報1・2・5号」倉敷考古館
- 藤沢良祐 1993「瀬戸古窯址群II-古瀬戸後期様式の編年」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X」
1995「瀬戸古窯址群III-古瀬戸前期様式の編年」「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要
第3掛」
- 中野晴久 1994 赤羽・中野「生産地における編年について」全国シンポジウム「中世常滑焼をおっ
て」資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所